



大西祝  
講

哲學史

完

東京專門學校藏版





西洋哲學史目次

緒論

一頁

古代哲學史

緒言

一頁

第一期 物界考究の時代

第一章

ミレトス學派

一七

タレレス……………一八 アナクシマンドロス……………二一

アナクシマ

シタニス……………二七 提要……………二九

第二章

宗教の作振

三六

ピタゴラス及びピタゴラス盟社……………三三

第三章

宗教と學術との衝突

三六

クセノポチス……………三六

四三







ペリパテティック學派……………二六九

### 第三期 倫理時代

第十六章 倫理時代の大勢……………二六八

第十七章 ストア學派……………二七五

第十八章 エピクロス學派……………二九二

第十九章 懷疑學徒及び折衷說……………三〇〇

ピロン學徒……………三〇〇 新アカデミ……………三〇三 後の懷

疑學徒……………三〇八 折衷說……………三二〇

### 第四期 宗教時代

第二十章 新プラトーン學派の先驅……………三二三

新ピタゴラス學徒……………三一八 宗教的プラトーン學徒……………三二一

三二一 フイロンの哲學……………三二三

第二十一章 新プラトーン學派……………三二七

プロテオノス……………三二八 ヤンプニコス……………三三六

### 中世哲學史

第二十二章 教父時代……………三四一

ニカイア會議以前の時代……………三四四 ニカイア會議已後の

時代……………三五五

第二十三章 スコラ哲學總論……………三六〇

### 中世紀哲學第二期

第二十四章 スコラ哲學の發生……………三六七

スコラ哲學の發生……………三六九 アンセルムス……………三

七四 アベラルドス……………三八九

第二十五章 アラビヤ及び猶太の哲學……………三九七



スコラ哲學第二期

第廿六章 全盛時代

トマス・アクイナス……四〇八

中世期哲學第三期

第廿七章 衰頹時代

ドンス・スコットス……四一八  
オッカムのキルリヤム……四

二五 ユックハルト……四三三

近世哲學史

第廿八章 過渡時代

ヤイコブ・ベリメ……四五五  
ワルター・リッポルツ……

四五八

第廿九章 近世學術の濫觴

フランシス・ベーコン……四七三  
ガリレオ……四八一

マス・ホッブス……四八二

第三十章 デカルト

第卅一章 デカルト學說の發達

アルノー・グーラン……五二五  
マルブランシ……五二九

第卅二章 スピノーザ

第卅三章 神秘家及び懷疑家

第卅四章 ライブニッツ

第卅五章 チルラ及び其の學派

バウムガルテン……六四〇

第卅六章 デン、ロク

第卅七章 シーシ、パークレー

第卅八章 デブド、ヒーム



第卅九章 ニー トン

七三七

第四十章 デイズム

七四六

第四十一章 道義學者

七六五

第四十二章 聯想派の心理學者

七九六

第四十三章 蘇格蘭學派

八〇二

第四十四章 佛蘭西に於ける啓蒙時代

八一〇

佛蘭西に於ける啓蒙時代の氣勢

八一〇

及びゾルネール

八一〇

ユンディヤック及びエルエシユス

八一〇

エルエシユス

八一〇

自然科學者と唯物論

八三七

ピコフアン

八四二

アンシクロペヂスト

八五〇

シャール・ボチ

八四三

ロビチ

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

デューク

八四三

ロー.....八五一

第四十五章 獨逸に於ける啓蒙時代

八八〇

第四十六章 イムマヌエル、カント

九〇一

純直觀の形式.....九三三

純悟性の概念即ちカテゴリー.....九四二

理性の觀念.....九六三

第四十七章 カントの繼續者及び反對家

一〇二二

ヤコービ.....一〇二四

シルツェ.....一〇二八

第四十八章 カント以後の哲學

一〇三七

シルレン.....一〇三〇

フィヒテ.....一〇三七

シエルリング.....一〇四一

ヘルバルト.....一〇五〇

ハルトマン.....一〇五六

ヘーゲル.....一〇五六



ル學派の分裂唯物論争及び新カント學派……………一〇六一

コント……………一〇六三 デンクスタチア……………一〇六四

スペイン……………一〇六五

……………一〇三三

……………一〇三三

……………一〇三三

……………一〇三三

……………一〇三三

……………一〇三三

……………一〇三三

……………一〇三三

……………一〇三三

……………一〇三三

……………一〇三三

### 西洋哲學史目次 畢……………一〇六六

## 西洋哲學史

### 大西 祝 講述

#### 緒 論

〔一〕そも、哲學と謂ふは如何なる者なりや。哲學はその問題の解釋の不易ならざるのみならず、その考究の範圍即ち哲學の問題、それみづからも亦全く一定せりと謂ふべからざるに如何なる事柄が哲學考究の範圍に入るべきか其の問題の真に何處に存するかが是れ亦一の問題たるなり。この故に哲學史を講ずるにあたりあらかじめ或一派の哲學思想を取り來たりてそれが特殊の見地より哲學を解せんは頗る不適當の事にしてこゝにはかゝる事をせざるべし。正しく又明に問題を言表し得ば是れやがて其の問題の眞實の解釋に一步を進めたるなり、明瞭に又正當に問題を掲出することは哲學研究上決して容易き事にはあらず。

〔二〕その問題とする所かくの如くなる哲學の研究は如何にして起こりしかか、おもふに吾人の心性に自然界及び人間界の現象に對してその如何なるものなるか



を驚き異しむの情具はり而してこの驚異の情がやがて哲學研究の源をなし、ならん、古の學者もまた驚異の情が哲學の研究を誘起したりといへりき。さてかくして吾人が一旦天地万有に對して驚異の情をおこすや種々様々に思考してこれが解釋を得むと力む、まかもその思想や極めて茫漠模糊として一の想念と他の想念との間に連絡なく唯漠然たる種々の觀念をきれく、に思ひ浮かべたるのみにて矛盾撞着の點はた少からざるよりこれをそのままに打ちすて難く思ふに至る、こゝに至りては吾人が智識は明に一段の進歩をなせりといふべし、復言すればこの段階に於いては件の常識上の漠然たる觀念を明瞭にしその矛盾の點を除かざれば満足せざるに至れる也、而してこの不満足はますく、吾人をして自然界及び人間界に對する吾が思想を一にまとめて整然たる組織的智識を得んの念をつよからしむ、この觀念こそ哲學研究の起りし又その生長しゆく原由なれ。

(三) 右開陳せし所によりて試に哲學といふもの、一般の性質を陳べんか、哲學とは當時代の人の以て肝要且有益と認め又吾人が能力を以て研究し得と信ずるか、ざりに於いて其の組織的智識又は統一的智識を得んと欲することにあるといふべし。

尙細しくいへば件の組織的智識には或根本原理のこゑを統一するものなかるべからず、即ち個々の現象の基礎となりてこれを統括する根本原理を求むること及び吾人の知り得たる又多趣有益と看る境界の全軀を統合せる組織的智識を求むること(約言すれば根本を究め以て全局を統一せむとすること)是れを哲學的知識の特色とす。まかも全局の統一といふも其の時代によりておのづからその範圍を異にす、すなはち吾人の知り得べしと看る又は研究するに價ひすと看る全軀の範圍が或は廣く或は狭くなることある也。これを要するに吾人の眼界に入り來たる諸現象の根本原理を認めてそれが統一的智識を得んとする、これを哲學の性質又傾向といふべき也。

(四) こゝには前にもいひし如く敢て或一の哲學上の學派もしは立脚地より見て哲學の性質を定めんとにはあらず、まかはあれど哲學史を講ずるにはまづほゞ哲學といふものゝ概念を有せざるべからず、然らざれば哲學史中に如何なる事柄を入れて適當なるべきかを知る能はざれば也、而して哲學史を講ずるに方たりては哲學の概念は右の如く解するを以て最も穩當なりと信ず。右の概念もて果し



て哲學史中に通常入るべきものとせらるゝ都べての事柄を蔽ひつゝし説き盡くし得るか否かは予輩の講述を進めゆくに從ひておのづから明なるべし。

〔五〕上に哲學の問題がその時代によりて異なりて範圍の或は廣く或は狭くなるよしを云へりしが、かくいふは哲學が社會全體の變遷と決して無關係なるものにあらざるといふと同じ。思ふに哲學は一時代一社會の文化、即ち當時代人心の全般の傾向希望信仰と決して全く離るべきものにあらざ、故に廣義にて哲學史を人類文明史の一部と見るも不可なし。すなはち哲學は吾人の生活全體の他部分と疎からざる關係を有するもの換言すれば吾人の生活全體が特に智識的要求を中心として發表したるものなりといひつべし。

志かれども哲學が一時代一社會の全體の状態を反映し又これに關係を有すといふものから凡ての哲學皆この點に於いてその趣を同じくすといふにはならず、社會の状態に影響さるゝことの甚しく大なるものあれば又大ならざるものもあり、こは専らその時の社會と哲學者個人との關係より生ずるの差なれば劃一には論し難けれど如何なる哲學者も多少は當時代の影響を受け之れと關係を有せざる

なし。故におしなべて如何なる哲學者も亦時代の子なりといふを得べし。

〔六〕上述せしところによりて已に哲學の變遷に與りて力ある要素二あるを認むべし。即ち一は社會の文化、一は個人これ也。さて個人といふ中にも哲學の學説を立てたる先輩とこれに影響さるゝ後進者との二あり、蓋し一學者が自ら或學説を創唱すといふものから一より十まで悉く獨創の見を立つるか如きことは殆ど無く少くもその中の或部分は先人の研究の結果を繼紹せるもの也。志かも先人の影響をうくるにもその度に差あるは論なし。若し一學説いで、一定の形をなし而して後の學者これをそのまゝに繼紹して所謂學統なるものを保續するの傾あるときはおのづから先人の影響を受くると大なるべし。

此の如く個人の哲學思想が先人の學説に影響せられてその學風を後に持續するはこれ即ち哲學史上の固定的要素を成すものなるがさて又こゝに時勢の影響が同じく學説の上に大體の一致を來たすに與りて力あるとを記せざるべからず、同時代に生まれ同時代の空氣を呼吸し同時代の埒内に制限せられたる趣のおのづから其の時代の學説に現れざるを得ず。かく先人の影響は學説を固定ならしめ



時勢の影響はこれを一致せしむるの傾ある者なるが、まかも此等はたゞかくして哲學史上停止合同の要素を爲すのみならず又多少變動の起因をも含み居れり、社會は恒に一定の状態に止まるものにあらず動きゆくものなれば其の個人に影響するところ亦決して永く同一なる能はず、又堅固なる所傳を有する學說もその内部に多少自家撞着の點を藏するが常なれば是れ亦久しくそのまゝの形狀を持続し難し、故に哲學史上停止合同の要素となる學派並びに時勢そのものにも亦變動の種子を含み居れるなり。然れども變動の主動力はこれらにあらず個人の創見にあり、哲學史上の變遷を見んには時勢並びに學派の影響と共に個人的原素あることを認めざるべからず個人の獨創する所あるを許さざるべからず、約言すれば同じ時代又同じ先人の影響をうけながら尙其の思想を異にする個人的差別あることを承認せざるべからず。かゝる個人の差別は何によりて生ずるかは何やうに説明するも此の如き差別ありてこれが實に哲學變遷の主動力となることは否むべからざる事實なり。哲學史は今説明したる固定一致の傾向と變動の傾向とによりて織りなされるもの也。

かゝるが故に哲學史を研究するには一には先人の學說に對する關係を見一には其の時代の影響を見一には又個人の特質獨創のところを見ざるべからず、哲學史は此の三方面より講究するを要するなり。

〔七〕右の三方面より哲學の變遷を見るを要す故に哲學史は唯學說を臚列するのみをもて足れりとすべからず即ちたゞ學說の記載（ディスクリプション）をもて足れりとすべからず必やかゝる種々の學說のいで來し所以又その變遷（トランスフォーメーション）し來たりし所以を説明せざるべからず言ひかふればその生起上（ゲネシス）の關係を説明するを要するなり而してかゝる生起上の關係は件の三方面より見て始めて明なるべし。哲學史家としてはまづ須らく忠實に事實を明にし變遷の跡を詳にすべし、みだりに學說を是非褒貶するは史家の面目に慚はざる也、そは既往の歴史に徴するも絶対に承認すべき圓滿の學說未だ出でず哲學史はむしろ學說の變遷興廢のやまざるを示すものなれば也。かゝるが故に一哲學史家たゞ自己の哲學上の所信を懷抱するも若しこれを唯一の標準として凡ての學說を是非褒貶するときには偏僻の弊に陥り易し、さるが故に偏へに史家一個の哲學上の見識よりするの批評は史家としてはむしろ力めて



控ゆるを可とす。さもあらばあれ學說の相つぎて生起したりし關係を叙するにあたりて彼れ此れを比較し其の優劣を論ずることば全く排除するには及ばず、却りて多少優劣を論ずることなくしては完全に生起上の關係をも説明し得ざるべし、そは後の學說のおこるは前の學說に不満をいだき之れを補はんがために出づること多ければ也。こゝを以て全く批評を用ゐざるは未だ史家としての職務を全うせざるものと謂ふべきなり。さはれ前にもいひし如く絶對の標準を立て之れに照らして凡ての學說を較量するは哲學といふもの又從うて哲學史といふもの、今の状態にある間は出來がたき事なれば歴史としては批評の根據を専ら批評せんとする學說そのもの、中に置き又その學說の前後及び同時代の學說との關係に置くこそ最も穩當なるべけれ。故に主として左の三點につきて學說の價値を定むるをよろしとす。

一 如何なる先人未發の問題及び解釋を提出せしか又その問題及び解釋が後人をして如何なる新行路を取らしめ如何なる新見地を開かしむるに効ありしか。

二 學說の内部に自家撞着の點あるかなきか

三 その實際達したる解釋が果たしてよく其の統合せむと欲したる事柄を悉く統合し得たるか。

主としてこの三點につきて批評するは最も穩當ならん、故に予は今こゝに哲學史を講ずるにあたり批評を要する場合には専ら此の如き内部の批評を用ゐんとす。この如き内部の批評はこれを學說の生起上の關係を説明するとの中に於いてすらも不可なからん、如何なる先人未發の問題及び解釋を提出したりしかと尋ねるは是れ畢竟哲學史上生起したる思想のうちいづれを個人の特發獨創に歸すべきかと問ふと同一なり、又その問題および解釋が後人をして如何なる新思想を發揮せしめたるかと問ふは是れ畢竟生起上の關係を闡明する以外の事にあらず、又一學說の内部に自家撞着の點あるかなきかを見るは躰いで出でたる學說の生起したりし所以をわきらむるに缺くべからざる事なり、又たとひ其の學說の内部に彼れ此れ矛盾するところは無く形式上の統一だけは保てりとするも其の組織の狹隘なるに失してまさに統合すべかりし事柄のうち遺したるものはあらざるかと



尋ねるも是れ亦後の學說の生起上の關係を見るに必要な事なり。かるが故に哲學史上もろくの學說の生起したりし所以を説明するには右掲くる三點についての批評を缺くべからず謂ふところ生起の説明を解してかゝる批評を爲すことをも含めるものとするに不可なし予輩はかゝる意味に解したる生起の説明を爲すものとして哲學史を講せんとす。但し専ら内部の批評をなすに方たりても多少史家みづからの哲學上の見識の露出するとあるは免れ難き所なるべし。若し完全なる哲學上の見地よりして古來出現したるもろくの學說を批判し其の一終句に向つる進歩の跡を審にし得ばこゝに理想的哲學史を編みたりと云ふを得べきも是れ今の歴史家の正當に試み得べき所にあらず。

〔八〕こゝに講せむとするは西洋哲學史也。西洋哲學は源を希臘に發して一の連絡ある潮流をなして今日にいたりぬ通常これを古代中世今世の三大期に分かつ、尙細にこれを分ち得れど大體の變遷を示すにはこの三期に分割するを以て便利なりと考ふ委しくは如何なる變遷の時期を西洋の哲學史に區劃し得るかは講述を進むるに従ひて明になるべし。先づ古代の哲學史より講し初めん。

## 古代哲學史

### 緒言

〔一〕凡そ世界の哲學に東西の二大潮流あり。東洋哲學は其の源を古代印度に發し西洋哲學は古希臘に發したるものといふべし。而して西洋古代の哲學史はほとんど希臘の哲學ともいひつべきもの也。たゞ希臘哲學の末期に至り其の思想羅馬人の中に流れ込み其の間多少の哲學思想を惹き起したるものあり通常これを希臘羅馬の哲學といふ、さはれ其の時に其の重なる思想は希臘人の發明にかゝれるもの多く羅馬人固有の發明としては殆どあらざりし也。總じて羅馬人が西洋文明の要素をなすに於いて力ありしは決して輕きにあらざりしかど哲學上特に發明獨創の見といふべきものは殆どこれなかりし也。今こゝには希臘哲學の如何にして發生し又如何にして變遷發達せられしかを見んと欲す。

〔二〕凡そ未開幼稚なる社會の常として種々荒唐なる神話及び天地開闢說などの俗間に言ひ傳へらるゝものなるが希臘哲學の發生せし前にもまた種々の荒唐なる神話及び天地開闢說など盛に俗間にいひ傳へられ又詩人に謳歌せられき。



而してこれら希臘の傳説は他國のより特に高等なる段階にありきとはいふべからず、矢はり他國の神話に見ゆるが如く天は地と相構りて諸の神又萬の物を生み出だせるやうに言ひ做したりし也。但し希臘の詩人などの之れを言ひ表せるうちには希臘人特殊の想像のいどよく見え、且當時幼稚なる希臘人が如何さまに世界を觀ぜしかもよく現れて面白し。

ホメーロスの詩中には神に關する談話いろ／＼見えたと天地開闢の事につきては多く言はず、こは疑ふらくは當時俗間に傳はれる傳説に對して既に嫌らずなりし結果ならんか。まかるにヘッオドス(西曆紀元前八百年頃の人)に至れば反りて細／＼と天地開闢諸神出生の事を記したり。さればこは彼處此處にいひ傳はれる俗間の傳説そのまゝを記し、にはあらでむしろ俗間の傳説にその儘を以て満足せず多少これを組織統合せんとせし要求の結果なりしならん。すなはちヘッオドスは天地の生起を考へて太初にカオス(カオスは深淵、混沌、空虚、無味なき深淵の物也)ありてこれよりガイア(神)とエーロス(生産力)と生りいでかくて漸次に諸物諸神を生じぬとやうに説きたりしなり。又降りて西曆紀元前六世紀の

ころに至れば一層進歩したる一層組織的なるフェレキデス等の天地開闢説あり。これら諸説は種々異同はあれど要するに諸神と万物とを打ちまぜて或は男女の婚構して子を産むに擬へ或は一物より自然に他物を化生するになぞらへて諸神諸物の生起せし由來を想像したるものに外ならじ。さもあれ、たとへ想像的なるにもせよ、兎に角諸神諸物の生起せし由來を考へ斷片的に傳はれる俗間の傳説を統合組織せんとするの精神は已に業にこれらのうちに顯然たりし也。

(三) 右いふ天地開闢説が吾人の眼前に横はれる物界の生起を説明せんとせしが如く希臘哲學も亦そのはじめは唯物界の説明を以てその目的となし、也。吾人の眼前に横はれる天地万象の由來を道理的に説明せんとする自意識の明になれりしと共に希臘哲學は發生しぬといふべし。すなはち眼にふる、物界を取りてそが生起の由來を説明せまくする所よりいへば同じく天地開闢の問題を繼紹せるものから其の説明の精神と方法とに至りては大に其の性質を異にすといはざる可らず。そは從來の天地開闢に關する傳説はむしろ天地のはなしの如きもの、天地開闢の物語を書きつゝりたるが如きものなりしかど希臘哲學の考究の動



機は今現に吾人の眼前に横はれる如實の天地万物に對して、これを現實かくあらしむる物、素は何ぞと問ひ來たれる也、又從來は天地の現象を以てひとへに天神地祇の所爲に歸し誰が日を照らし誰が雨を降らすといふか如きいと稚き想像的説明を以て足れりとしたれどこゝに至りては力めて物理的に天地の現象を説明せんとしたる也。こは要するに吾が理性の要求をますく明に自覺し來たりて舊感想舊信仰に満足せずなりし結果に外ならざる也。

〔四〕此の如くして希臘哲學はその發端をひらきしがこの新思想のおこりしに希臘人に先んじて已に文化に進みし東方諸國民の思想上の影響與りて力ありしかあらぬが、これにつきて近世學者の説くところ同じからず。或學者は希臘哲學はもとく埃及、ペルシヤ、支那、印度などの哲學思想より得來たりしもの、やういへれどこは惟ふに東方文化の影響をあまり重大視せしものならん。げにや彼此其思想の似かよひたるふしいと多かれど輪廻轉生説の如き、印度の服水論師、風仙論師、火論師等の説又四大の説、極微の説など、同様なる思想の希臘にもあるが如きその著るき例也、まかも直に希臘の哲學は埃及、波斯、印度等より輸入せられたる

もの也と斷言するほどに確實なる歴史上の證左あらざる也。或は右の説に反して、印度のニヤトヤ、サンクヒヤなどのひとへに宗教的、神秘的ならずして學術的といはるべき哲學組織は希臘學術の影響の然らしめしところなりと論ずる學者もある也。要するに天文及び數學に關して多少其の資料を埃及、ペロニアなどに仰ぎし所あるは事實ならめどそれだに純粹に數學といひ天文學といふきはものにはあらざりしならん。すなはちこれら數學並びに天文上の智識の幾分を他より得來たりたるは否むべからざる事實ならんも、そを組織統合して學術的智識となせし功績はこれを希臘人の天才と勞力とに歸せざるべからず。希臘人が美術、文學、學術に驚くべき天才を有せりしは後世の嘆美する所也。

〔五〕希臘哲學の起こりしは西曆紀元前第六世紀の頃に當たれり。當時希臘人は制度風教に社會生活の状態にいちしるき動搖進歩をなしつつありき。就中小亞細亞の西南岸又アイゲア海の島嶼に植民せしイオニア種族は希臘史の當初に於て全希臘人の代表者として東方の人民に知られ且早くよりファイニキア人と通商貿易を開き又その(ファイニキア人の)海上の勢力の衰ふるに乗して遠く地中海を



往來し其の眼界は頓に廣まり其の市都は目覺ましき繁盛を來たしたり。又當時は君主政治已に倒れ貴族政治また去りて民主政體これに代らんとし黨派の軋轢常に酷しく社會一般の事物を擧つて絶間なき活動の渦中にあらしめき。かく人民の生活又智識のいちしるき進歩をなしつつある時恰も哲學もその萌芽を發しぬ。すなはち希臘哲學の起りしはかくの如き時代に於ける社會人心の活動の結果に外ならず。その生起の地は小亞細亞の沿岸及び南伊太利等の植民地にあり。就中かの最も敏活にして新奇を求め創意發明の才に富めりしイオニア種族こそ實にその搖籃を擁護せしものなりけれ。

〔六〕希臘哲學を分かちて五期となす。初期は専ら客觀なる天地万物の現象を説明せんとせし時にしてこれを物界考究の時代と名つくべし。第二期は考究の興味をさく吾人自己の事に傾きし時にしてこれを人事考究の時代と名つくべし。すなはちかのソフィスト及びソクラテスの出でたる時也。故に或は前の第一期をこの期と區別してソクラテス前の時代ともいふ。第三期は組織的時代にしてかのプラトン・アリストテレスのいでも大哲學組織を立てし時即ち希臘哲學全

盛の時期也。第四期を倫理研究の時期となす倫理道德の研究を主眼としてそれによりて以て吾人の安立の地を得んと欲せし時代也。第五期即ち末期は希臘哲學が漸く宗教的傾向を帯び來たりひたぶるに出世間の處に安心立命の地を得まくせし時期也。この期は東方殊に猶太的宗教思想の影響をうけしと著るき期にしてこれを前の尙純粹なる希臘思想の立脚地に立てりし第四期と區別して希臘東邦的時代といふを得。又この第四五の兩期を合して或はアリストテレス以後の時代とやうに大らかに分かつ學者もあり而して希臘羅馬の哲學といふは此の時代に屬せるものなり。

## 第一期 物界考究の時代

### 第一章 ミレトス學派

〔一〕希臘哲學の發端をミレトス學派とす。(或はレズに起り物理學派又は名初代イオニア學)この學派の眼目とする所は万物の大原たる一物素を指定して其の變化を見て以て宇宙の森羅万象を説明せんとするにあり。されば諸現象の原理を見てそが純一的知識を得んとする哲學の大主眼は既に業に此に現れたりと謂



ひつべし。然れども先づ最初には万物の本原たる一物素を求むるにも猶まだ五  
 人日常の経験に接近せる所、吾人の直接に知覚し得る範圍の外にいでざりき。然  
 るにかゝる範圍内にて如何なるものが尤も萬物の物素と見做すに適當なるべき  
 かといふにまづ成るべく變化し易き、又成るべく固定の形質なきものならん、そは  
 其の變化を見て以て万象の生起を説明せんとすれば也。通常希臘哲學の鼻祖と  
 稱せらるゝタールネスは水を以て斯くの如き物素と見做しぬ。

タールネス (Thales)

〔二〕 タールネスは小亞細亞西南岸のイオニア種族の一都府なるミレトスの市民  
 にして其の生死の年月定かならず、まづ西曆紀元前六百年頃の人と思はれ、大謬な  
 かるべし。その生涯の經歷及び學說については古來種々の傳説あれど信じがた  
 きもの多し。唯埃及を遍歴して彼の國の僧侶より數學上の智識を得來りぬとい  
 ふことは疑ふべき必要なきが如し、彼れはじめて幾何學上の智識を埃及より傳へ  
 たりとは一般に言ひ傳へたる所なり。又彼れが西曆紀元前五百八十年の日蝕を  
 豫知しきといふとも實事なるべし。彼れは又世事に明にして當時の政治にも參

與しきと思はる、これその常に希臘七賢人の首座に置かれたる所以なるべし。

〔三〕 さてタールネスが學說の主點とするところは、万物は水より成れりといふに  
 あり。如何なる理由により水を以て万物の本元となし、かは今日よりこれを確  
 知せんよしなし、又件の水は如何なる方法順序によりて万物を生出するかにつき  
 ても今日よりこれを知らんよしなし。否恐らくはタールネスみづからも此の點に  
 つきては明白なる所見を有せざりしならん。

〔四〕 アリストテレスがタールネスの所說として明に記し置きしは、(一)諸物の本原  
 水にあり、(二)世界は水上に浮ぶ、(三)万物は神々を以て充たさる、(四)磁石の鐵を引くは  
 靈魂(即ち生氣)當時の希臘人は一般に生氣と靈魂とを同一視したるあるによると  
 いふの四點に過ぎず。さて右の中万物は神々を以て充たさるといひ、又磁石の鐵  
 をひくは生氣あるによるといへるより、或學者はタールネスは諸物に生氣ありと思  
 ひ、又万物を造出する水には一種根本的活力ありてこの活力(生氣)又靈魂が万物を  
 造り出だす根元なりとやう考へるならんといふ、或は然らん、若し果たして然らば  
 タールネスは物活説(物體と生氣とを相離さず物に具はれる活力によりて物界の諸



現象を生ずといふ説を唱へたるものと見らるべし、されば吾人はこれをタールネスみづからの學説によりて確證する能はざる也。それは兎もあれタールネスが水を以て諸物の根原となし、は疑ふべからざることにしてこの一事以て彼れが希臘哲學史上に於ける位地を確むるに足る。すなはち彼れは從來の天地開闢説の物語を超脱して天地の森羅萬象を一物素の成せる所と見むと試み而してこゝに希臘哲學を開けるもの也。次に説かんとするアナクシマン드로スに至ればミレトス學派は明にその歩を進めたるものといふべし。

〔附言第一〕 タールネスが水を以て萬物の大原となしたる理由に就いてはアリストテレスの言へる所すら其の臆測にとゞまる。今姑くタールネスの位地に立ちて其の萬物水より成れりと云へりし理由の最も眞實に近からんものは何ぞと考ふるに恐くは水のいと變化し易くして或は天に昇り或は地に入り又大地を繞り之を浸し之を浮ぶるが如くに見ゆるによるならんと思はる。

〔附言第二〕 ポル、タンヌワリー氏はおもへらく世界は水上に浮べりといふ如き説はタールネスの埃及より傳へたる所にして彼れは數學又物理の説に於いて

は埃及の僧侶の弟子たるに過ぎず希臘の學術は正當にはアナクシマン드로スに初まると云ふべしと。然れどもタールネスが萬物の物素を水と見たることによりてミレトス學派を開き而して此の學派を開きたるものとして希臘哲學に其の地位を占むるとは否むの要なかるべし。

#### アナクシマン드로ス (Anaximandros)

〔五〕 タールネスに踵いで起こりしアナクシマン드로スも同じくミレトスの市民にしてその生まれしはアポロドロスに従へば六百十一年乃至十年頃なるべし。タールネスに學びたりと言ひ傳ふれど親しく就いて學びしことありしか確には知られず。天文并に地理上の知識に秀で初めて地軸圖様のもを製しきとぞ。万物生起の理に關し「ペリフィゼオス」(Peri phuseos)と名づくる書を著し、がこは早くより失せて今は唯その中の一句を傳ふるのみ。いはんが如し、フィジス(Physics)は或は諸物の性或は自然界或は萬有と解せらる。アナクシマン드로スは希臘學術の發生上重要な位地を占むる學者なり。

〔六〕 タールネスは水を以て万物の本原となせりしがアナクシマン드로スは、ア



パイロンを以て万物の本原となしぬ。ト、アパイロンとは際限なきものといふ義也。そも水といふ一物より万物を生起すとは甚だ考へがたし万物の本原たるべきものは固定の形なく界限なきものたるべし、まからざれば如何でよく一切物を生起せしめん。水は所詮水たる一定の性質を有するもの即ち定限あるものなればこれによりて到底天地の森羅万象を説明すべくもあらず又若し水にして際限なきものならんには万物を容れずして却りて悉くこれを水となし了るべしと、斯く思ひ到らんと取て難きにあらざるべし。アナクシマン드로スが万物の原を際限なきもの即ちト、アパイロンならざるべからずと考へしは能く一切の物を生じて盡きざらんには其の原物は必ず無盡藏なるべく無盡藏にして能く萬物とならんには萬物中の例へば水といふ如き一種物にてあるべからず、未だ何れの物と限られずして能く何れの物ともなり得るものならざる可からずと思ひしに據れるや蓋し疑なからん。即ちアナクシマン드로スはト、アパイロンを以て時として存せざるなく處として在らざるなき無限、無邊のものとなし此のもの普く万物を包被し万物これより生出すと考へたりしなり。

〔七〕 上述ぶる程のところは確實と見て差支ならんも更にくはしくト、アパイロンの性質を説かんとすれば哲學史家の間に異論を生ず。或はこれを解して諸物の相混じて雜在せる有様なりといひ、或は性質上單純無差別のものなりといふ。前説にまたがへば諸物はみな個々各自の形質を有しながらト、アパイロンの中に混在せるなり、後説に従へばト、アパイロンより後はじめて個々各自の性質を具ふるにてそれまでは性質上無差別のものとして存する也。思ふにアナクシマン드로スみづからはかゝる細微なる點にまでは考へ及ばず、たゞ吾人の實際五官を以て知覺する個々物ほどに性質上定限せられたるものにはあらでまかもよく差別の性質を有する個々物を生出するものとやうにいと大らかに考へたりしならん。ト、アパイロンの物體なると即ち空間を填充する底のものなるとは明なり。

〔八〕 さてかく万物はト、アパイロンより生れ出でたるものなるが、そは如何にして生出せしかといふに、アナクシマン드로スは唯、反對のものが分離し出づといふに止まりて更に如何にしてまかるかは深く問ひ究めざりしものゝ如し。恐らくはト、アパイロンにまかせしむる無窮の活動力ありと思ひしまでにて満足したり



しならん。(多くの史家はテオフラストスの言によりてアナクシマンドロスはト、アパイロンに無始無終の運動ありと説けりと云ふ、然れどもまたこれは唯アリス、トテレスが反對のもの、無盡藏に分かれ出づる所以を自家の思想もて斯く解したるのみアナクシマンドロスみづから恒久の運動てふをいへるにあらずと考ふる史家もあり、恒久の運動てふ語の餘りにアリストテレス自家の用語めけばなり。さてかくト、アパイロンより分離し出づる反對のものは寒、暖又乾濕の氣なり、而して暖にして乾なるものがその反對の寒にして濕なるものに働きて天地萬物を生ずるなり。

〔九〕 天地の構造に關するアナクシマンドロスの説を略述すれば元と濕にして寒なるものを取り巻きて火あり、この火後に分裂して穹蒼に羅列する天躰となり、而して濕にして寒なるものは火に照らされて蒸發し又遂に水陸相分かれて吾人の住する大地を成せり。地躰は圓柱形にして高さ幅の三分の一、人類は其の平面に住す。又大地は世界の中心に位して諸の天躰は絶えず其の周圍を廻轉す。アナクシマンドロスは太陽の軌道の大地の面と平行せずして傾けるとを認めたり

といふ。

人類はもと今日吾人の有する所とは異なる形躰を具へ魚鱗の如きものを被りて水泥の中に棲居せりしが後に水中を出で、陸上にその子孫を蕃殖せしむるに至りつひに今日の人間の如き形躰を具ふるものとなれりといふ、是れアナクシマンドロスの有名なる説として後世に傳へらるゝ所也。

〔十〕 万物はかくしてト、アパイロンより出で來たれるがこはまた遂にはト、アパイロンに還り、還りては出で、出でゝは還り來往循環歎むときなしとアナクシマンドロスは説きたりしが如し。其の書中の句として今日に傳はれる名高き語に曰はく、「諸物は定められたる所に従うても、と來し所にかへるべし、かくして定まれる時に於いて物皆其の不正の業に對して賠償を爲し又罰を受くべし」と。今試にその意を推しはかるに、個々なる諸物の存在は皆各自の位地性質を他物に對して維持保存するにあれば勢ひ成るべく他物を壓倒し成るべく自己を保持するに傾くべし、さるは已に中正を失うたるものなればそが償として罰として遂には再び素のト、アパイロンに歸入せざるべからずといふにあるならん。アナクシマン



ロスが右の如き世界の循環説を唱へたりしは唯一個の世界に就いて云へるにて吾人の俯仰する世界の外に數多の世界ありとは説かざりしならん、ツェラーはいへど最近の研究の結果によればアナクシマン드로スは同時に數多の世界ありて各自或はト、アパイロンより出で或はこれに還りつゝありと説きたりしが如し。

〔十一〕以上陳述せしところを總括していへば(一)アナクシマン드로スはターレスの如く個物の一なる水を以て万物の物素と見ず無際限なるト、アパイロンを説き(二)この無際限なる本原よりまづ性質上反對のものゝ分離し出で而してその反對のものゝ作用によりて萬物を成すといひ(三)また世界の無窮に出没して歇むとさなきをいへり。思ふに物の絶對的元始は考へ難きが故に循環説を以て世界及び万物の起原を説くはいと便利なりしならん。

ト、アパイロンより反對の性質分かれいづといふのみにて其の如何にして然るかとの説明はアナクシマン드로スにありてはいと不完全也。而してこの如何にして然るかを説明するとに一步を進めたるは次に出でたるアナクシメニス也。

アナクシメニス (Anaximenes)

〔十二〕このミノトス派第三の哲學者も前二人と同じき市都の生まれにして古來の所傳によればアナクシマン드로スの弟子なりきといふ。縱令然らざりきとするも其の學說の影響を受けたりしは明也。生死の年月定かならねど概ね西曆紀元前五百八十八年より全五百二十四年に至るの間に生存せし人ならん。イオニアの方言にて一書を著し、が一小句の外今は全く傳はらず、これを『ペリ、フィゼオス』と名づく。

〔十三〕無際限なるト、アパイロンより如何にして千種万態なる個々物の生出せしかはアナクシマン드로スが學說の難點也。アナクシメニスが一見恰もターレスの地位に立戻りて空氣を以て万物の物素と見たるは全くゆゑなきにあらず、ミノトス學派の立脚地にある間はト、アパイロンよりも一層吾人の實驗する所に近き物象を以て諸物の起原を考へんとするは一理なきにあらず。アナクシメニスは水よりも固定の形骸なきもの而かもト、アパイロンよりは固定の限界ある空氣を撰びたりこゝに謂ふ空氣は雲霧霞等を一切含ませていへる也、即ち雲霧煙霞となるすべてのものゝ總稱なりと知るべし。而してアナクシメニスは空氣を以て



無際限のものといひき。これ明にアナクシマンドロスの影響をうけたる也。

〔十四〕何を據として彼れは空氣を万物の本原となし、かといふに、今に傳はれる唯一の句あり、曰はく、恰も空氣が吾人の生氣として吾人を保つが如く全世界も亦息氣により空氣によりて保たると。すなはち彼れは一種の生活の氣ありとなし吾人がこれに包圍せられこれを呼吸して生存するが如く全世界これによりて存在すとやうに考へたりしならん。かく彼れが生物について見たる現象を以て万物を觀じたるはまさしく彼れがアナクシマンドロスの説をば一層明に眼前に描き出ださんとせし結果なるべし、又こゝに至りてタイレンス及びアナクシメニスの取れりきと察せらるゝ物活説の一際明瞭になれりと云ふを得ん。

〔十五〕諸物は如何にして空氣より生じ出でたるか。アナクシマンドロスは只反對のものが分離し、いづと説くに止まりしがアナクシメニスは一步を進めて空氣の活動によりて之れに厚薄を生じ而してこの厚薄が同一の空氣より千種万態の諸物を生ぜしむと説きたり。おもへらく空氣の厚く濃くなるは即ち寒く冷かになる也、其の薄くなるは即ち暖になる也と。見るべしアナクシマンドロスの所

謂寒暖二氣の反對をもアナクシメニスは只だ同一物(空氣)の或は濃く或は薄くなるの作用に歸したることを。而して薄くなれば空氣は火と變じ、濃くなれば凝りて風となり、更に凝りて雲霧となり、次に水となり、地となり、又石となる。これ一物素より如何にして諸物の生ぜしかをタイレンスよりもアナクシマンドロスよりも明に説きいでたるもの也。

〔十六〕アナクシメニスは宇宙の構造を説いて曰はく、大地先づ成り、地より蒸發する氣愈々薄くなりて火となり、此の火廻轉するにつれて天球となれり、大地は扁平なると益の如く甚だ廣き故に空氣に支へられて動かず、天球は同じく空氣に浮びて大地を左右に廻轉す、恰も帽子の頭の周圍を上下に廻轉せずして左右に廻轉するが如し、日輪の夜に見えざるは地下を行くが故にあらざ、大地の北方の高き故にこれに隠くる也。アナクシメニスが又世界の循環するると數多の世界の存在とを説きたらんとするは、はアナクシマンドロスと同じ。

### 提要

〔十七〕上述せるが如く希臘哲學はもと天文物理の説と相離れたるものにあら



ず。後の科學の種子と見るべき種々の考究はた相混じて哲學の中にやどれりし也。(但し數學は早くより別のものとして取扱はれしが如し。)此のミレトス學派の大眼目とする所は一物素より生じたるものと見て天地の万象を説明せんとするにあり、タールネス先づ此の着眼點を代表し踵いてアナクシマンドロス并にアナクシメニス出で、更に之れを開發したり。タールネスが物素と見たる一特殊の物(水)に代ふるにアナクシマンドロスは無際限のもの即ちト、アパイロンを以てし此のト、アパイロンより反對のもの分かれ出づるによりて一切の個々物を生じぬと説きたり。次に又アナクシメニスは一物素の變化によりて如何様にして万物の生起するかを説き出で、其の物素が厚薄を爲すの作用に歸しぬ、是れ一步を機械的説明に進めたるもの也。約言すればタールネスに於いて一物素といふ思想を見、アナクシマンドロスに至りて無際限といひ又吾人の思想上差別の物象を説明するに甚だ肝要なる反對のもの、相働くといひ又循環といふ思想を見、アナクシメニスに至りて厚薄を爲す(即ち詮すれば物質相集り相散するとに歸すべき)機械的作用といふ思想のはのみゆるあり。彼等三哲學者が皆万物の本原を物質上の

ものに求め又そを生氣ある底のものと思ひしに於ては一也、又万物の生起を一本原に歸せしめしも一なり。彼等の心には万物の本原の一元的なるべきとは論證するまでもなく明けしと思ひし也。之れを要するに彼等は皆一元的物活説を唱へしものといふべし。

## 第二章 宗教の作振

### ピタゴラス(Pythagoras)及びピタゴラス盟社

〔一〕紀元前第七世紀より第六世紀にかけて希臘の社會は百般の搖動甚しく從來の制度習慣は漸く其の權威を失うて復た人心を満足せしむる能はざるに至りぬ。而して其の智識上の變動を代表し窮理心の獨立を發表したるものは前に述べたるミレトス學派なるが又道徳及び宗教の上にピタゴラスの如きありてその運動の代表者となり専ら風教の作振を以て自任しき。當時かゝる宗教家として出で來たれりしは獨りピタゴラス一人に止まらずエピメニデス又オノマクリトスなども同様の性質を帯びたりしなり。さはれ當時最も重要な位地を占め且希臘の思想界に微少なならざる痕跡を留めたものは實にピタゴラス及び其の盟



社なりとす。さて所謂風教の作振とは一種の講又は教會の如きものを組織し一定の禮拜儀式を用ゐて宗教的信念を興起するにありき。總じて何れの國にても社會上の變動甚しく人心靜止せざる時代にはかゝる宗教的現象を見らるゝが、ピタゴラスはまさしくかゝる時代の需要に應じて出でし者にして其結びし社は即ち當時他にも少からざりし講の一種と見るべきもの也。然れども又此れに止まらずしてピタゴラス盟社が希臘哲學史上看過すべからざる地位を占むるに至りし所以のものは後に此の社中に所謂ピタゴラス派哲學の形成されしが故なり。この故に所謂ピタゴラス派哲學はピタゴラスみづから全く説きし所とは謂ふべからざれど哲學上多少説きし所ありとなすも實際如何ほど説きたりしやは明ならず(ピタゴラスの名は希臘哲學史上忘るべからざるものとなりぬ。

(二) ピタゴラスの生涯に關しては種々の訛傳誤謬相纏綿して明に其の事實と妄説とを辨へがたし。或は詩歌音樂の神なるアポローンの子なりといひ、或は黄金の脛を有しきといひ、其の他様々の奇蹟を行ひきなどいふがごとき皆後人の假構捏造に外ならず。希臘哲學の末期に出でたる新ピタゴラス學徒のピタゴラ

スに於けるは恰も道士輩の老聃に於けるが如き也。

ピタゴラスの生涯に關して確に實事と見做し得べきは左の數事に過ぎず。父をムネサルコスと云ひアイゲア海のサモス島に生まる。西曆紀元前五百三十年頃に南伊太利のクロトニに移りこゝに一の盟社を結び其の勢力の及ぶ所頗る大なりしが如し。後メタポンティオンに移りこゝにて没しぬ。さればミレトス學派第三の學者なるアナクシメネスと略ぼ其の時代を同うせしか或は少しく之れに後れたりしならん。

ピタゴラスはアナクシマンドロスに學びたりといふ傳説もあれど確ならず。されど多少其の學説の影響を受けたりしは明なり。又廣く埃及、フォニキヤ、カルヂヤ、アラビヤ等を遍歴してその諸邦の僧侶博士に就いて見聞知識を博うしたりともいひ傳ふれどこれは憑るべき確證なし。そは兎まれ角まれ彼れが博識の聞き高かりしはヘラクライトスの證言を以ても明なり。多少哲學上の思想をも懐きたりしといふ事は必ずしも否むべからざれど其の感化功績の大なりしは主として宗教上の事業にありき。後世彼れを尊びて豫言者又神人と見る者あるに至り



しは畢竟素と彼れが宗教的人物として出でしが故ならん。

〔三〕 ピタゴラスが勢力の當時に認められしは専ら其の結びし盟社によれり。こは一種特別の禮拜式を有する講の如きものにして此の講に屬せし徒は一定の或法を守りきと見ゆ。されど其の戒律の如何なるものなるかにつきては後世の學者その見を異にす。要するにピタゴラス盟社は宗教的信念を中心として一定の戒律を守り一種特別の生活を送るを以て目的と志たりし也。當時の此の種の講には種々の迷信の行はれたるを見ることなるがピタゴラス盟社はそれらの中には先づ最も立ち優りたる者なりしならん。且又此の社にては夙くより音楽數學をはじめ躰操美術をも兼修したりしが如し。

此くの如くピタゴラス盟社の最初の目的は専ら宗教的・道徳的生活を規定するにありしが之れと關聯して政治上の運動にもたづさはり當時の政治社會にたいならぬ勢力を及ぼすものとなりき。如何にして此の盟社が政治上の勢力を有するやうになりしかに就いては史家その意見を同うせず或は曰ふ此の社は社會の風紀を維持せんがために貴族政治即ちスバルタ風の政體を主張したりと。或はい

ふ此の社のものはその特殊なる宗教的團躰の當時に容れられ又廣くその感化を及ぼさんが爲に貴族社會と相結托したりと。何れにしても政治上貴族主義に賛同して一時クロートンに小ならざる勢力を振ふこととなりしと共に當時ますます熾ならんとする民主思想と衝突して劇しき軋轢を生ずるに至りぬ。此の軋轢はピタゴラス在世の時に既に始まりしならんと思はる彼れが其の居をメタポンテイオンに移したりしは恐らくは此れがためなりしならん。その後反對の氣餒はますます其の熱度を高めて遂に南伊太利に於いては此の社の殆ど撲滅せらるゝに至りき。小亞細亞の沿岸なるイオニヤ種族の植民地に比すれば南伊太利には多數の希臘種族此に雜在し隨うて市府との争、政社と政社との軋轢も亦一層酷しかりし也。且第六世紀の末つかたイオニヤの諸市府が全力を擧げてペルシヤの侵略に抵抗せし時は希臘の文化はむしろ南伊太利にうつりしが如き觀あり。

〔四〕 前にも述べたるか如く所謂ピタゴラス派の哲學は多くは後の學徒間に發達せしものにて其の中如何ほどピタゴラスみづからの説きしものなるかは明ならず。唯彼れがたしかに説きたりと思はるゝは輪廻轉生の説あるのみ。但しこ



は彼れに始まれるの説にはあらで已に其の以前にありて多少希臘人の間に行はれたりし思想也。思ふにピタゴラスは輪廻轉生の説をば善惡應報の説と相關せしめて之れをその宗教的教説の要點となし、ならん。又當時既に詩人等に唱へられたる多少進歩したる一神教的思想をも或は交へたらんと思はる。

後にピタゴラス派の學説に見ゆる二元的思想は早く已に其の學徒の間に唱へられたるが如し。又此學徒が夙に音樂及び數學を修めたりしとが其の世界觀に多少の影響を及ぼしたる所ありしならんといふも全く根據なき想像にあらざるべし。かゝる起原を有するピタゴラス學徒の思想が一派の哲學として如何なる形を成すに至りしかは後に開陳すべし。

### 第三章 宗教と學術との衝突

クセノフテス (Xenophanes)

〔二〕吾人は前章にピタゴラスに於いて當時の宗教的運動の實際的方面にあらはれたるを見つ。ピタゴラスの宗教的運動は當時に於ける宗教的信仰の作振を計りしものにて其の信仰を學術上批判したるものにはあらざむしる實際上に於

ける宗教の復興改善を主となし、也然るに當時の學術思想がその當然の傾向として通俗の宗教思想と相衝突せんとするとは能く防止すべからず。かのミレトス學派に於いても其の思想の已に業に通俗の宗教思想と乖離するの非見を見る。アナクシマンドロスが世界を指して神といひ又トアバイロンを指して神デウスのといひしが如きこれ已に俗間の宗教思想及び在來の詩人などの歌ひし所と相異なり又異ならんとするを見る。而して其の學術思想と通俗の宗教思想との衝突を尤も際やかに尤も大膽に發表し通俗の宗教思想に學理的批評を加へたるものをクセノフテスとなす。

クセノフテスは小亞細亞のイオニヤ種族の一都府なるコロフォオンに生まる。(ツエラーは其の生れし年を五百七十六年乃至七十二年とすれど又或史家は五百七十年以前に生まれしとは考へられずといふ今はたい切れの句をのみ存するそが詩中に年二十五にして故郷を出で他邦の客となると茲に六十七とあり。四方に流浪するや詩歌を吟誦して口を糊しつつにシ、リ、又南伊太利に至れり。南以太利の一市府エレアに至たりしとあらんと思はるれどこゝに其の節をとい



めて其の學を傳へたりと云ふとは確かならず西曆紀元前四百七十九年には尙生存し居りしが如し。さればクセノファテスはピタゴラスとほゞ其の時代を同うせしか又は寧ろ少しく彼れに後れたりしならんか彼れと共にイオニヤ種族の市府に生まれ後移りて南伊太利に來たりし者也。

〔二〕 テオフラスタスはクセノファテスをアナクシマンドロスの弟子なりといへれど其の思想の要點に於いてミレトス學派と頗るその趣を異にする所あるは明也。又クセノファテスはピタゴラスと同じく其の思想を宗教の上にそゞぎたれど、  
 志かも彼れと異なり俗間の宗教的信仰に對しては全然攻撃の位地に立てりき。  
 ホメーロス、ヘシオドス等が神々の喧嘩、口論又詐欺、竊盜をさへ書きならべ只管神を人間のやうに思ひなすを嗤うて曰はく。「もし牛又は獅子が人間の如く手を有し而して其の手をもて書くを得又器物を作くるを得ば馬は馬の如くに、牛は牛の如くに神の形を畫くならん」と。又曰はく「エテオピヤ人は其の神を色黒く鼻平と思ひ、ツラキヤ人はその神を碧眼赤髯と思へり」と。彼れはかゝる口吻を用ひて當時の人が神を人間の如く思ひなすを罵倒しき。謂へらく神は決して人間に類す

べきものにあらず生まるゝとなく死するゝとなく無窮より無窮に存在し常住不動なり。「人と神々との中にて最も大なるもの即ち唯一の神あるのみ。こは形に於いても思ひに於いても死すべき人間に似ず。」彼れは凡の物を照覽し凡の物を思ひ凡の物を聞く。又曰はく「神は勞するゝとなく其の心の思を以て凡ての物を支配す。」彼れは常に同じ場所に止まり少しも動くゝとなし。今は此處今は彼處とやうに場所をうつすは彼れにふさはしからず」と。

此の如き進歩したる宗教思想とミレトス學派に現れたる一元的哲學思想とがクセノファテスに於いて相合しきと見ゆ。アラストラレスのいふ所によればクセノファテスは全世界を一なりと考へ而して此の一を神と見たりしが如し。即ち數多の世界なり、唯有るものは眞實一なり、萬有即一而して其の一なる者は動くゝとなき也、是れ神也。

唯一なる世界を無際限のものと思たりしか否かにつきてはクセノファテスの思想明ならず。彼れが「上にありては空氣下にありては地根無窮に達す」といへりしより見れば世界を無際限と思ひしやうにも見え、又世界は各方向に同じやうに廣が



り居れりといへりしより見れば彼れはまた世界を圓球の如く限界を有せるものやう考へたりしとも見ゆ。思ふに一は宇宙の廣大無邊なるをいひ、一は空蒼の圓かに見ゆるを云ひしならん。

〔三〕 此の如くクセノフアチスは全世界を一と見而してこれを神と考へたりしより見れば一神説を唱へたりしが如く思はるれど彼れの一神的思想は實際如何なるものなるかは史家中議論のある所也。そも一神教風の思想は多少已に當時の詩人間にも現れて當時の進歩的思想を代表したりしには相違なけれど老かもこれらの思想は概ね唯一最大の神ありてこれが下に幾多の小さな神々を司配するやう考へたりし也。クセノフアチスは此の點に關しては如何に考へたりしか。史家或は謂ふクセノフアチスは純乎たる一神説を主張したりと、或はいふ否その所説の一神はその詩句に見ゆる如く神々の中の最大なるものを指せるなりと。クセノフアチスカ萬有即一而して此の一か神なりといひし時には一なる全世界そのものを指していへるにて世界以外に神ありてこれが世界を創造しぬるやうに考へしにはあらざらんが、又彼れは世界中の局部を指してこれを小さな神々とも名

けしならんか。彼れの思ひし所既に頗る俗間の思想とは其の趣を異にする所あるは明なるが彼れの言に神その心の思ひによりて万物を司配すと見て神を靈なる者と思ひしと解するは非也、當時は未だ物躰と區別して心靈を思ふとなかりき。アナクシマンドロスが世界を指して神といひしが如くクセノフアチスも此の見ゆる世界を神といへる也、但だ通俗の宗教思想を批評したる結果として其の神を一躰なりとし而して其の一躰を萬有の全躰と同一と見且恒久不動のものを見たる也。但し宗教思想の批評によりて得たる神てふ觀念とミントス學派に由來せる一元説とは未だクセノフアチスに於いては能く調和せられでありし也。

〔五〕 クセノフアチスの天文氣象の説に關しては精しきとは知れず、彼れが説として傳へいふ日月をはじめ虹霓等の天象は光輝ある雲即ち燃ゆる蒸發氣より成り而して其の没し又其の光の消ゆるとあるはその象を形つくる雲の一旦離散するが故にして又其の光の顯るゝは其の雲の再び收結するが故なりと。然れども又傳へ云ふ件の雲は炭火の如く一時消え失せて其の光を失ひ後また燃え出べしとも説きたりと。又或は其の説を解して毎日毎夜新なる日月星辰が絶



えず天空を走りゆくと思ひしといふ。又彼れは山上に海生物の化石のあるを見  
て大地は曾て流動躰なりしかはた水中に没せしとありしなるべしと説き、又將來  
水の作用によりて再び原始の状態に還るべしこれと共に人類も悉く滅亡し而し  
て再び大地の形成せらるゝと共に復生出すべしと説きたりとぞ。

〔五〕世界の構造に關するクセノフアチスの説には種々明瞭ならぬ個處あれど唯  
一なる全世界を神と見又この神を不動常住の者と見たりしは最も肝要なる點に  
して而して此に大問題の含まれあるなり。何ぞや。恒久不動なる神と全世界と  
は一なるに如何にして此の世界には種々の運動變化あるかといふと又その唯一  
の神と個々万物との關係は如何にといふとこれ也。換言すれば常住不動なる唯  
一の神と變々化々する万物とを如何にして調和せしめ得るか是れ解釋を要する  
問題也。思ふにクセノフアチスハ未だ明瞭に此の問題を陳べずして唯ちほらかに  
神は唯一不動の者なるべし而して其の神は全世界に外ならずして万有の全體即  
ち一躰なりと思ふに止まりしならん。而も斯く考ふれば既にミレトス派の立脚  
地とは同じからず、ミレトス派にありては一元あり而して此れより世界を生ずと

説きクセノフアチスは世界即一躰と説きし也。此に後にエノア學説を喚起すべき  
問題の伏在せるなり。

#### 第四章 ヘラクライトス (Heraclitos)

〔一〕ミレトス學派の主眼とする所は一物素の變化と見て万物の起原を説かん  
とするにありしが、其の一元説はクセノフアチスに在りては全世界即ち常住不動  
の神なりと云ふ思想に變じたり。若し彼れの説く如く萬有は一元一躰にして而  
して其の一元一躰は不動ならば現に世界に見る所の變動を如何にせん。世界に  
於ける變動を沒せざらんがために萬物は詮ずる所一にして、若かも其の一の無限  
に變々化々する所以を説明せんとせしはヘラクライトスなり。即ちヘラクラ  
イトスは變化を以て物の實相となし万物は變化すればこそ又能く一にてあり得  
れと説きたり。學説の系統よりいへばヘラクライトスはミレトス學派と親密な  
る關係を有すれど、若かも万物の一にして又其の變化する所以の理を説かんとし  
たるはそのミレトス學派を超越したるの點なり。ヘラクライトスは多少クセノ  
フアチスの所説を知りたらんと思はるれば彼れの論は或は前者に對して云へる所



あらん。前者曰はく全世界は一にして其の一は動くことなしと。万物の一にして、志かも動くといふ關係を思ひうかべ之れを説かんとしたるがヘラクライトスの學說の主要の點また其の特殊の點なり。

〔二〕ヘラクライトスはエフェソス(小亞細の—市府イオニ)の人、ピタゴラス又クセノフテスに後れ出でたり。自己の獨立の見識を信ずると厚く世間の俗輩を眼下に睥睨し世の碩學とたゞえらるゝ輩をさへ痛罵して措かざりき。其の言に曰はく、多くの事柄を學知すると決して眞知識を得るの道にあらず。博識もし人に眞識を與ふる者なりとせばヘシオドス、ピタゴラス、クセノフテス及びヘカタイオスをも賢くしたりしならん」と。散文にて一書を著ししが今はたゞ其の斷片の語句を存するのみ。簡淨なる文辭に深遠なる思想を寓せるが故に古より晦澁讀みがたきの稱あり。且つ文字の比喩に富み反語アンタゴニスムに饒かなる頗る老子に似たるものあり。(老子が上徳不徳、是以有徳、下徳不失徳、是以無徳といひ大道廢有仁義、智慧出有大偽といふが如き皆所謂反語と稱するもの、即ち反對をまとめて其の中に一貫の眞理を見るもの也ヘラクライトスも亦常にこの種の反語を用ひたるところ頗る

老子と似たるものあり。)

〔三〕ヘラクライトスが自家發見の所とせるは變化又生滅といふものあればこそ世界は保たるゝなれといふと是れなり。一物として絶えず變化流轉せざるはなく變化流轉して窮まらざる、これ即ち物の物たる所、その存在すといはるべき所なり。此の物は彼の物に、彼の物はまた彼の物に絶えず活動轉化するこれ即ち世界の實相也。複言すれば此物は唯此物として存せず彼物は唯彼物として存せず常に此れが彼れとなりゆき、彼れが此れとなりゆきつゝある也。斯く万物皆新陳代謝して窮まりなきものなるが、志かもその常に同一不變の自體を有せるが如く見ゆるは何故ぞ。これ他なし。此の物の彼の物と變り去りつゝある量と彼の物の此の物となり變はりつゝあるの量と正に相平均すれば也。即ち一物の他に出で去るほど又他より入り來たるが故也。流水の混々逝いて息まざる、志かも同一の流と見ゆが如し。ヘラクライトスの有名なる語に曰はく「再び同じ流れに入るを得ず、常に新しき水流來たるが故也」と。

〔四〕如何なれば万物はかく絶えず變化生滅する。その變化は何處より來たる



かといふにヘラクライトスはこれ物には反對の傾向が常に働くがゆゑなりといふ。反對の流行あるが故にこゝに變化あり。變化あるが故にこゝに万物生ず。万物の生滅して片時も静止停息せざるは反對のものゝ相争へば也。争ありて活動あり。反對ありて物は一致調和の状態を保つ。一方に死なくば争で他方に生あるを得ん。反對の一致此れ即ち万物生存の原理也。この故にヘラクライトスは「ホメロスが神又人の間に争の熄まんを欲せしは不可也彼れは宇宙の滅亡を願へるを知らざりし也。もしホメロスの祈願の聽かれたらんには萬物は消え去るとならんといへり。彼れはまた争は万物の父、万物の王なり」物を結ぶものは反對なり「神は晝又夜也、夏又冬也、戦又和也飽また餓也」などいへり。又此の反對の釣合を「隠れたる調和」といへり。「世人は異なる方角に引かるゝものゝ相和するを知らず、世界の調和ある構造は反對の緊張に懸る譬へば弓又琴の造りの如し」。

〔五〕此の如く凡ての物一にして其の一なるものが反對の流行を爲す。「一は凡ての物を以て成り又凡ての物一より出づ」。一とは何ぞ。ヘラクライトスは之れ

を火と見たり。物の生滅變化の様は火に於いて最も明に見るを得。火至れば何物も之れに化し之れに化すれば又忽ち煙と變じ去る。「凡ての物は火に替へられ火は凡ての物に替へらる、恰も器物を金貨に替へ金貨を器物に替ふるが如し」。万物の一なる所火に外ならず。火は万物變化の根本動力也。即ちヘラクライトスは火によりて以て物の變化と、一との關係を説かんとしたる也。彼れ曰はく「世界は神々の造りしものにもあらず人の造りしものにもあらず常にありしもの又常にあらんとするもの、即ち永久に活ける火にして一定の量に従うて絶えず燃えては又消ゆるものなり」と。

彼れは更に火の万物生滅の原動力たる所以を詳説して曰はく「火其の熱を失へば水となり更に其の熱を失へば地となる。而して地となれば遠た熱氣を増して水となり更に熱氣を増して火となる。一物として此の火、水、地の状態を上下せざるはなし。火の水となり地となるをヘラクライトスは下り道と名け又地の水となり火となるを上り道と名けたり。これは彼れが大地より出で來たれる水集りて海をなし海水蒸發して太陽の火となり再び水となりて地に降るを見て云へる所な



りと知らる。火は水、水は地とならざるを得ず、地は水、水は火とならざるを得ず、變化の中に此の變化の規律のみは變ぜざる也。而してかく變化せしむる原動力原物は火なり。

〔六〕 此の如く火より下り地より上る反對の二傾向あればこそ万物は保たる、なれ。上り道を経て下り道をのみ存すべからず、下り道を経て上り道をのみ存すべからず、此れは彼れに彼れは此れに缺くべからず。故に反對なくば物なし。ヘラクライトス曰はく、もし不正といふ名なくば吾人は正といふ名を知らざるべしと又曰はく、善と悪とは同一なりと又曰はく、眠れる者は共に働ける者なりと。又彼れは變北の中に休息を見るときもいへり。この反對の相離れずして却つて相保たるの理これ彼れが自家獨創の見とする所也。

〔七〕 万物活動の原は火なれば吾人は火氣多きほど活潑なり聰明なり火氣乏しきほど頑冥不靈也。その言に曰はく、乾燥なる靈魂は最も賢く最も勝れたるもの也と。靈魂は火氣にして而して絶えず其の活力を保たんには常に五官及び呼吸によりて宇宙の火氣をうけざるべからず。其の通路を塞がば吾人は忽ち枯死すべし。吾人が睡眠せる間は呼吸の一路の外宇宙の神火を受くるの道全く梗塞せるが故に自己の小世界にのみ閉ぢこもり唯妄想(夢)を逞くするのみ。

ヘラクライトスは宇宙の火を神火と名つけ之れを以て世界の出來事を指揮する者の如くに見たり。彼れは偶像を拜し血を流して犠牲を供する等の事を嘲りたり。其の宗教思想が通俗のものに異れりしは明なり。

〔八〕 アナクシマン드로スは物その反對に分かれ互に其の位地を侵すが故にその中正を失ひ随うてつひにト、アパイロンに歸らざるべからずといへりしがヘラクライトスは之れに反し物は反對あるが故に却りて其の中正を保つを得反對なくば物なしと説けり。要するに反對は中正也調和也二者決して背叛するものにあらずといふがヘラクライトスの根本思想也。而して彼れの説に従へば万物の終には全く火となるの期あるか否かにつきては哲學史家其の見を異にす。かゝる期なしと論ずるものは謂へらく、万物の全く火に歸一するの期ありと説くはこれヘラクライトスの根本思想に反するもの也、何となれば反對の流行なくば凡べての物消え去ると云ふがその論旨なればなりと。然れども又或所傳はヘラクラ



イトスの斯かる説を爲ししとを證すと考ふる史家もあり。

五〇

## 第五章 エレア學派

(一) クセノフテスは凡ての物は一にして一即ち不動なりといへり。されど其の不動なる一と万物の變化とは如何なる關係を有するかの問題は未だ明に説明せられざりき。ヘラクライトスは此の問題を説きて曰はく万有は一にして志かも變化す否變化し相反對するが故に一なるを得、一と反對、流轉とは決して相乖くものにあらず、一なる万物が無限に變化生滅するこれ即ち世界の實相なりと。これ一なるものが變化して万物を成すと云ふミレトス學派の思想を變化といふ事の方面に追窮したるもの也。然るに万物の變化と其の一なることとは決して相合するものにあらずと見て大膽にも變化雜多を拒否したるものあり、エレア學派これ也。若し一原物が變化して万物を生したりとせば其の原物は他物と爲りかはりたる也。然れば他物(即ち雜多の個々物)は既に原物に同じきものにあらず別れに自己の性躰を具へて存在するものなれば原物が未だこの他物と爲りかはらざる時に於て實有なりし如く此の他物は今其の原物の既に變化し了はりたる後に於ては全く實有なり。假令ひこの他物は復原物と爲りかはるべき時期ありとするも是れ均しく實有なるもの、相繼ぎ相代はるに過ぎずして殊更に其の一方をのみ實有の本躰とは云ふべからず。又一物素(原物)が個々なる他物に全く變化し去らば少くも其の他物に變したるだけは其の物素の滅して其の代りに他物の生したりと云はざる可からず、而して其の他物が再び物素と爲りかはる時にはそれだけ其の他物の滅して物素の生したりと云はざる可からず。若し又天地萬物が一物素より生する時に於て又生したる後に於ても其の万物に於ける物素が毫もその自性自躰を變するとなくば何故に一原物より千差萬別の個々物を生じするかを解する能はず。此の困難を脱せんがためにエレア學派は一原物の變化すと云ふことを否みたり。即ちエレア學派はヘラクライトスが變化差別を物の實相と見做したるに反して變化差別は吾人の迷妄に過ぎずと斷言せり。此の學派の問ふ所は如何なる一物素が森羅萬象を生するぞと云ふよりも寧ろ實に有ると謂はるべきもの(即ち實有の躰)は何ぞやと云ふにあり。エレア派と名くるは以太利のエレアといふ市府に起りしが故也。此の學派の創唱者はバルメニテス也。



## パルメニデス (Parmenides)

〔二〕 クセノフテスが凡ての物は一にして不動なりといへりしより史家或はエレア派をクセノフテスに始まれりといへど眞に此の派の開祖と見做すべきはパルメニデス也。クセノフテスは唯だ世界は一にして不動なりといひしに止まり未だ變化雜多を否むには至らざりき、未だ明に唯一と雜多とを相容れざるものとは言はざりき。然るにエレア派の學說の主眼ともいふべき所は眞に有りといはるべきものは唯一不變平等なる實體にして他は一切無なりとするの點にあり、これクセノフテスの説より更に一大歩を進めたるもの又隨うてヘラクライトスの説に正反對をなせるもの也。(但し其の思想の一元的なるとは相同し)。

パルメニデスはエレアの人也。プラトンの記する所によりて推算すれば、その生まれしは五百二十年乃至十年より早からず、ツエラーはデオゲテスの言を正して五百四十四年乃至四十年ならんと考ふ。多少クセノフテスの思想に得たる所あり、又ピタゴラス學徒に聞きし所あらんと思はる。一世の大儒にして諸人に尊敬せられパルメニデスの性行といへば殆ど蘇の如く思はるゝに至れり。律語

を以て其の哲學を叙述したりしが其の幾分は今尙殘存せり。

〔三〕 パルメニデスの學說は有といふ一觀念を出立點となしそれを論理的に演繹開發したるもの也。即ち有といふ觀念を分析論究したるはパルメニデスの學說を以て其の嚆矢とす。其の説の主眼とする所は有 (eivan) のみあり、非有 (m' eivan) はなく、又考へられずといふにあり。今その意を推し究むるに凡そ物あるは即ちその有なる也、その反對なる非有のあるべき理なし、隨うて非有なるものは、又考ふべからず何となれば非有は無なれば也考ふべき事柄なければ也。有は常恒不變の實體にして曾てありしもの又將にあらんとするものにあらざ、唯恒に今ある者、その存在にはつねの今あるのみ、何となれば曾てありしものはあるものにあらざ、將にあらんとするものも亦あるものにあらざれば也。即ち有には過去なく將來なく唯無始無終の現在あるのみ。されば又有は生じたるものにあらざ、もし生じたる者とせば、之れを生ぜしめたる者なかるべからず而してそは有ならざるべからず、非有が有を生ずべき理なければ也、即ち有そのものは生起の始を見出だす可からざる也。又有は滅するものにあらず、滅すとはその非有となることなれば也。



有は有にして非有にあらず。故に有には生滅なし。次に又有は分割され得るものにあらざ何となれば若し彼れと此れとの中間に立ちて之れを分かつものあらばそのもの亦有ならざる可からざれば也。有ならぬものが有と有との間に入りて之れを分かつへきにあらず。故に有は不可割、不斷絶のもの也。個々の相別かれ相離れたるものを以て成らず唯一不二のもの也。又有は平等一如にして、此處より彼處に彼處より此處に多く又は少くあると云ふものにあらざ、有ると云ふ事の外に物をして有らしむるものなく而して此の有るてふ事に多少又厚薄の差別あるへからず、有は唯有にて都べて同一不異なり故に又有は變するものにあらず、動くものにあらず、平等の自體を保ちて常に靜なり。又思想も有と別なるものにあらず、それは思想さるゝ事柄は有ならざる可からず有ならずは思想さる可からざれば也。即ち思想あらばそは有の思想なり思想に入りて思想を成すものは有の外にある可からず。故に思想と有とは一なり。斯く有は不變不動平等一如のものなれどもアナクシマンドロスの「ト、アパイロン」の如く無定限のものにあらず、自足完滿の一體を成して他に依るとなく、他に待つとなし、無定限なるは未だ自足せず圓滿な

らざる所のある也。されば約言すれば有は無始、無終、不生滅、不可割、唯一不二、平等一如、不變不動にして自足完丁せる者、この外にあると云ふべきものなし。パルメニデスは此の自足完丁せる有を名けて一中心點より四圍八方に等しく廣がれる圓滿の球なりと云へり。

〔四〕 以上述ぶる所を觀ればパルメニデスに至りて抽象的思想のいちじるく進歩せしは否むべからず。志かも未だ之れを純理説とはいふべからず。その所謂有は未だ形而上のものには、あらで唯物體の不變平等の基本、即ち物の物たる所を指せる也。故に彼れが有は空間を塞充する底のもの、唯物體より個々の差別性を悉皆抽象し去りて後に残れる物基ともいふべきものに外ならず。アナクシマンドロスの「ト、アパイロン」は未だ個々物に分かれざるもの即ち無定限なるものを指し、パルメニデスの有は物體よりその差別相を除き去りたる平等一如のものを指す。而してその平等一如のところを何ぞと云ふ、空間を充たすの點に外ならず、これ物體の物體たる所、これ即ち有なり。故にパルメニデスにありては空間に充實すといふ意味の實と、實在すといふ意味の實とが相合したりし也。實に在るもの



は空間に實<sup>み</sup>てる者故に非有と虚空とは同一不二なり。約言すれば有は即ち充實(το πληρον)非有は即ち虚空(το κενον)實即有、虚即無なり。虚空は無きものなるが故に實なるもの、虚なる處へ移り動くといふとなく又は虚なる者の實と實との間に入りて之れを相分かつと云ふとなし。

〔五〕此くの如く唯一平等の有のみを知るは吾人の理性にして雜多變化ありとするは五官の作用也。五官の示す所のものは迷妄也、真理を示すものは吾人の理性のみと、斯くパルメニデスは截然理性と五官とを分別したり。

さて此くの如く五官の示す万物の變化差別を迷妄なりとし唯一不變の有をのみ眞實とするときは哲學の考究はこゝに其の局を結びたりといふべけれど彼れは流石に當時の學者が一般に其の心を注きたる万物生起の論をも顧みざるを得ず假りに俗見に従うて森羅万象を實在するものとせばその生起を如何に説明するが至當なるかと云ふとを論したり。彼れが著作の詩は二篇より成れり。第一篇には平等一如の有のみありて變化雜多はすべて無なりといふ真理を述べ、第二篇には假りに俗見に従うて雜多變化を説明したる假說的物理論を述べたり。前者

を實説ともいはし後者を權説とも名くべくや。

彼れが假說的物理論に曰はく凡ての物皆明、暗の二元より成り明は暖、輕、稀、暗は寒、重、濃也。而して明は有にあたり暗は非有にあたる。明なる者と共に暗なる者をも實に有りと思ふが故に茲に雜多變化の世界を見る也。二元の存する量は相同じ。万物一として此の二元より成らざるはなし。明者多きほど有に近く隨うて精神生氣饒く、暗者多きほど無に近く隨うて活潑々の氣乏し云々。

宇宙は相重なれる球層より成り中央に核ともいふべき球あり(この球は蓋し吾人の住する地球を指していへるならん)。此の球と宇宙の外皮たる極端の球層とは重くして光なき暗質より成り而して此の外皮の兩側と其の核の外側とを取り巻きて火層あり。此の兩火層の中間に火質と暗質との混せる幾層の球あり云々。右の二元的物理説並びに世界構造説は正しく當時のピダゴラス派の學説を取りこれを最もよく俗見を代表したるものとして述べたるものなりと考ふる史家もあり。

パルメニデスは吾人の知覺を説明して曰はく吾人の知覺は吾人の身軀を組織す



る明暗二元の配合如何により敏とも鈍ともなる也。暖にして明なるほど知力生氣旺に、寒にして暗なるほど知力生氣乏し。又吾人が外物を知覺するには吾人の身軀を組織する明暗の二元が各々みづからと同質なる外物を知覺す、即ち明なるものが外界の明なる質、暗なるものが外界の暗なる質を知覺する也。

〔六〕 パルメニデスの根本思想は實に有るもの即ち有は生滅變化するものにあらずとして一切の差別變化を否み以て實軀論に眼を向けたるの點にあり。ミレトス學派は一なるものが變化して万物をなすといへりしがパルメニデスは一なるもの變化すべき理なし實軀は決して生滅せずと説きたり。志かもこれ未だ純理的の思想にはあらずして物體的なりき。遮莫實軀的觀念はパルメニデスに至りて始めて現れ後の希臘哲學の發達に大關係を有するものとなれり。即ち實軀的觀念は第一期哲學の中心點又主眼點となれりし也。

パルメニデスの銳利なる辨證的論法を紹きて尙通俗の變化生滅といふ思想を打破するとに力めたる者を彼れの弟子ゾエノンとす。ゾエノンは師の説を開發せんと力めしよりもこれは實際更に開發するの餘地なかりしなりむしろ其の反對論即

ち雜多變動を實有のものとするの論を攻撃論駁するの位置に立ちたり。

#### ゾエノン (Zeno)

〔七〕 ゾエノンはパルメニデスの高足弟子、師と同郷の人なり。プラトンの記せる所を信ずべくば師より少きこと二十五歳。其の都邑を擅制家の手中より拯ひ出ださんが爲に雄々しき最期を遂げられたりといふ。

ゾエノンの目的とせし所は雜多と云ひ又變動といふ觀念を取り來たりてそれを分析討究し其の不條理なると自家撞着なることを暴露するにあり。故に彼れの論旨は表面より積極的に師説を立證するにはあらずむしろ反面より消極的に反對論の立つべからざる所以を明にするにありき。かく論敵に對して一觀念を分析開發して眞理非眞理論を證するの法を名けて辨證法といふ。アリストテレスは辨證法を以てゾエノンに生まれりといへれど其の端緒は已にパルメニデスが有の觀念を横説堅説して分析闡明せしに啓けりと謂ふべし。

〔八〕 ゾエノンの論は雜多の論と雜變動の論との二に分かれたり。前者は雜多といふ觀念を分析討究して其の不條理なるとを明にせんとしたるもの、後者は場



處の變動(即ち運動)といふこの道理上あるまじき所以を論じたるもの也。さてゾ  
 ノンに取りては存在すといはるべきものは空間を塞充するものに外ならず。而  
 して空間を塞充するものゝ變動するは其の存在の場處を變ずるに外ならず。故  
 に彼れは性質上の變化を措いて専ら空間に於ける變動即ち運動のあるべからざ  
 る所以を論じたり。(當時は性質上の變動即ち變化と空間上の變動即ち運動とを  
 共に均しく動くといふ一語にて言ひ表したれば即ち運動とを  
 易き)

先づ雜多を難ずるの論に曰はく(第一)若し雜多なるものあらばそれは限りなく小な  
 ると同時に限りなく大なる者ならざるべからず。其の故如何にといふに雜多を  
 なす中の一個は分量なき不可分のものならざるべからず。もし些にても分量あ  
 らばそれは更に分かれたれ得べきもの隨うて一個にはあらで數個物の相集まれるも  
 の也。志かるにかく分量なきものを他物に加ふるも之れを大ならしむる能はざ  
 るべく又それを他物より減するも之れを小ならしむる能はざるべし。而してかゝ  
 るものを如何ばかり集積するもそれは竟に分量あるものとはならざるべし。然れ  
 ば一個より成る雜多は到底分量なき即ち限りなく小なるものならざるべからず。

もし又一個を以て多少の分量あるものとせば其の中の一部份と他部分とは若干  
 の距離を有せざるべからず。志かるに吾人はその部分よりも尙小にして而も尙  
 若干の分量あるものを考ふるを得べく而して更に尙それよりも小なる部分を考  
 ふるを得べし。かくして一個の中には或分量を有する無數の部分を含まれたり  
 と見るを得べし。而して此の如く限りなき多くの部分を有するものを以て成れ  
 る多は限りなく大なるものならざるべからず。之れを要するに雜多をなせる一  
 個を以て各毫も分量なきものと見ばそれは無限に小なるべく又多少の分量あるも  
 のと見ばそれは無限に大ならざるを得ず。故に多といふは自家撞着の觀念なり。  
 又(第二)雜多は量に於て自家撞着の觀念なるのみならず其の數の上より見るも亦  
 志かり、それは限り有ると同時に限りなき者ならざるべからざれば也。何が故ぞ、曰  
 はく若し多なるものあらば、それはその實際あるより多くもなく又少くもなくその  
 實にあるほどのものならざるべからず。即ち其の數に於いて定限あるもの也。  
 志かるに二個のものゝ相分かれて實に二個のものたらんには其の間こそを分別  
 する第三者なかるべからず。而して又此の第三者が第三者たらんには之れを前



二個のものと分別する第四の者又第五の者なかるべからず。斯くして限りなく多くの個々物あるを要す。即ち雜多は其の數に於て限りなかるべし。限りあると同時に限りなきこれ自家撞着にあらずして何ぞやと。以上を難多の論となす。

〔九〕次に難動の論に曰はく(第一)先づ一定の距離についていはんに一物が甲點より乙點に達せんには先づ甲と乙との中央點に達せざるべからず。然るに其の中央點に達せんには先づ其の點と甲との中央點に達せざるべからず。而して又此の中央點に達せんには先づそれと甲との中央點に達せざるべからず。かくして無限の中央點を経過せざるべからざるが故に到底甲點より乙點に達する能はざるべし。

(第二)定まらざる距離については彼の有名なるアキルレス龜を追ふの論あり。アキルレスの章駄天走りを以てするも到底一步を先んぜられたる龜に追ひつくと得ざるべし。何となれば假りにアキルレスのある處を甲とし龜のある處を乙とし而して龜の速力をアキルレスの速力の百分の一とせんにアキルレスの走りて龜のありし乙なる點に達する時には龜は甲點と乙點との距離の百分の一を走り

て丙なる點にあるべくアキルレス更に乙點より丙點に達する時には龜は又乙點と丙點との距離の百分の一を走りて丁點にあるべし。アキルレス更に丁點に達する時には龜は更に丙と丁との距離の百分の一を走りて戊點にあるべし。斯くして遂にアキルレスは龜に追ひつきの期なかるべし。故に一物が一定せざる距離を飛び除えて他物に達すと思ふは迷妄なり。

(第三)一刹那に於ける運動の限りなく小なるべきの故をもて其の運動のあるべからざることを論ず、飛矢不動の論これ也。人は飛ぶ矢を動くと見る、まかも其の一刹那(即ち限りなく小なる時間)に於けるの有様は一點に停在する(即ち動かざる)の有様なるべし。されば第一の刹那に於いて動かず、第二の刹那に於いて動かず、第三の刹那に於いても動かず、其の他のすべての刹那に於ても動かざるべし。即ち飛矢は何れの刹那にも動かざるべし。然るに之れを動くと見るは俗眼の迷誤に外ならず。

〔十〕ゾエノン(Ζωεων)は又物が虚空に存すといふとを非難せり。その要旨に曰はく若し有りといはるゝものが皆虚空の中にあり而して虚空がまた有るものならばその



虚空も亦虚空の中にあらざるべからず。而して虚空を容るゝ虚空も亦虚空の中にあらざるべからず。かくして虚空に虚空を要して遂に窮極なかるべし。虚空といふ觀念の不都合なる此くの如し。實に有りといはるべきものは唯空間を塞充する有のみ。有以外に虚空あるべき理なし。有以外は無也。

〔十二〕 ツェノン<sup>1</sup>は万物生起の事に關しては別に新しく説くところなかりしが如し。パルメニデスは權りの説とはいへ尙物理につきての所見を陳べたりしがツェノンは彼れよりも尙一層物説には重きを置かざりしならんと思はる。

上に掲ぐるツェノンの論は要するに空間と時間との限りなく小分せらるべきことを根據とせるものなり。ツェノンの自説は空間時間の不可分なることを主張するにあるものから假りに反對論者の説(即ち雜多變化ありとするの論)に従うて其の觀念を分析論究し來たれば空間と時間とは無限に分割され得るととなり隨うて自家撞着に陥らざるを得ずと論したる也。雜多の二個條の論は甲點と乙點とを分別する空間の限りなく分たるべきことを基礎とす。空間の限りなく割かたるべきが故に甲乙兩者の間に限りなく多くのもの、挟まれ得と考へらるべし。然れ

ども又限りなく小なる空間は分量なきものなるべければ如何にして此く分量なきものより分量ある空間の成立すべきかを考へがたし。これ實に空間を思想する上に於て困難の存する所也。難動の論もまた空間并に時間の限りなく分たるべきとに基く。即ち一物が限りなく小なる時間に動く所の空間は限りなく小ならざるべからずといふことを論するもの也。然れどもこは限りなく小なる時間に動き得るは限りなく小なる空間に過ぎずといふことを證するに足れど限りなく小ならざる時間(即ち若干の分量ある時間)に甲點より乙點へ動き得ずといふことを證するには足らず。然れども限りなく小なる時間が積で如何にして分量ある時間をなすか又限りなく小なる空間が相集まりて如何にして分量ある空間をなすかは頗る考へがたき難問にしてツェノンのこれを指摘せし實に理ありといふべし。要するに空間時間の限りなく分たるべきとについては頗る難點あるを許認せざるべからず。蓋し限りなしといふ觀念それ自身に困難の伴ふれば也。ツェノン<sup>2</sup>もへらく空間并びに時間の限りなく分割さるゝと云ふとには斯かる困難あり然るに若し多と動とを實に有るものとすれば空間并びに時間の限りなく



割かたるべきとを許さざるべからず、故に眞實あるものは不動不可割の一体のみ而してその一体は個々の刹那に割かたるべき時間に存在するものにあらざり（パルメニデスが有はありしものにあらざらんとするものにあらざり唯あるものなりと云ひしは此の意なり）。

斯くゾノンが空間又時間を分割さるべしと見ると即ち空間を幾多の個々の限りなく小なる點より成れりと思はるれば又時間を幾多の刹那の相集りたるものと思はるれば難したるは是れまさしく當時のピタゴラス學派の所説を攻撃したるものなりと考ふる歴史家あり。若し果して然らば虚空を難するの論も亦専らピタゴラス學派に向けたるものならん、その學派は世界以外にはこれを包圍して無界限の虚空あることを説きたりと思はるれば也。或史家は又ゾノンが多を難し動を難するの論はアナクサゴラス等に向けたるものならんと考ふる（アナクサゴラスに就いては後章を見よ）。

## 提 要

〔十二〕 之れを要するにエレア學派の根本思想は實有のものは平等一如にして

變化なく生滅なしといふにあり。實に有るものが無となるとなく又無が有となるとなし、即ち生滅と云ふとなし、不變一如が有の實相にして變化雜多はすべて迷誤也。かく不變一如を實有とし生滅を拒否するがエレア學派の骨髓にして希臘哲學の發達に大影響を及ぼしたる所以こゝにあり。

クセノアテスは全軀即一體といひ而して其の一體を不動と見たり。ヘラクライトスは宇宙は一にして而も常に變化すとなし、一體と變化とは相容るゝものなりといへり。パルメニデスは一體と變化とは相容れざるものなりと見、實有は平等一如、不生滅、不變化ならざるべからず、これのみ唯一實體にして雜多變化は迷誤のみと斷じたり。これ一元的思想を其の極端まで論理的に推窮したるの結果也。宇宙を唯一のものより成れりと思はるれば又時間を幾多の刹那の相集りたるものと思はるれば難したるは是れまさしく當時のピタゴラス學派の所説を攻撃したるものなりと考ふる歴史家あり。若し果して然らば虚空を難するの論も亦専らピタゴラス學派に向けたるものならん、その學派は世界以外にはこれを包圍して無界限の虚空あることを説きたりと思はるれば也。或史家は又ゾノンが多を難し動を難するの論はアナクサゴラス等に向けたるものならんと考ふる（アナクサゴラスに就いては後章を見よ）。



官の迷誤といへど何故に五官の迷誤の起るかを説明せざるなり。されば打ちつけに之れを否まずしてむしろ吾人の實驗する所なる變化雜多の生起する所以を説明せんとせば如何なる立場を取るべき。ミレトス學派以來の定説なる一元論に代ふるに多元論を以てせば如何に。萬物皆一元と説くが故に雜多と變化とを否まざるを得ざるにあらざや。多元を説かば實有の生滅を否むエレア派の大思想を許してこれに脚を立しながらその派の學說に於ける奇怪の結論を脱し得ざや。こゝに於いて一元論極りて多元論に轉したる也。エムペドクレスは即ち此の多元説に其の立脚地を置きし最初の人なりき。

### 第六章 エムペドクレス (Empedokles)

〔一〕 エムペドクレスはドリア種族の植民地なるアクラガスの人、紀元前四百七十二年以後アクラガスにて活潑に働きしといふとは疑はれざる事實也又其の死せしは四百四十年以後なるとも確かなり。されば其の生涯はほゞ四百九十一年ころより四百三十年頃に至ると見て大過なかるべし。父メートン時の擅政家を排して民主政治を起すに與りて力ありき。エムペドクレスも亦大に民主黨の

爲に盡くすところあり常に平民の良友を以て自任しき。彼れは又宗教家として醫家として大に時人に尊信せられ廣く民間を巡歴して教法を説き民の疾苦を訪へりき。且種々の奇跡を行ひしよし古き書どもに記載しあれど實際如何ほどの事なりしか確には知りがたし。其の説きし教法は輪廻轉生、未來賞罰の説又ピタゴラス盟社に於ける信仰禮拜の如きものなりしならん。エムペドクレスは宗教家としてや、此<sup>em</sup>ゴラスに似たる趣あり。性沈重、志氣雄大、辯舌流るゝが如くありきとぞ。其の死に關しては古來種々の妄説傳はれど要するに民主黨の爲に力を致したりしに竟に平民の歡心を失うてペロポネッソスに遁れかしこにて終りぬといふが最も眞に近からん。「ペリ、フイゼオス」並びに「カタルモイ」といふ二篇の述學の詩を著しき。今猶幾多の部分を存す。或はこは二篇の詩にあらざして一篇の二部分なりと考ふる學者もあり。想像豊富、語調頗る高遠也。

〔二〕 嚮にパルメニデスは生滅變化といふとを拒否して有が無となり無が有となるとなしといへりしがエムペドクレスは思索考究の根據となせし所又實にこゝにあり。即ち眞に有りといはるゝものゝ滅し去り、又無きものゝ生じ來たると







充されざる空間の存するを説かず。(この點またエレンア學派に據れりし所なり)。  
 (三) 万物皆地水火風の離合によりて或は其の形を現じ又没するは前に述べたるが如し。然れども何物かよく彼等をして或は和合し或は離散せしむる。彼等四元素は皆不生滅不變化にして恒に其の自性自躰を保持するものなれば所詮彼等みづから離合集散せんやうなし。離合せんには動かざるべからず、而して彼は不變恒有の自性を保持するものなれば何故にその動くかを解する能はず。こゝに於てか彼等の外に彼等を動かし離合せしむるものなかるべからず。エムベドクレスはすなはち愛憎の二動力を設け來たり愛は諸元素を混和せしめ憎(又は争)は諸元素を離散せしむるものと説きたり。愛を説きては曰はく「死し果つべきもの皆知れり生來愛ありて彼等を互に近かしめ一致せしむるを」但だ彼等は知らず此の愛が全宇宙を通貫するものなるを。愛情といふ語の詩歌的たるの嫌はあれど兎に角動かさるゝ物と動かす物とを截然相分かちて對峙せしめたるは彼れを以て嚆矢とせざるべからず。其のこれを愛と憎との二に分かちたるは一は以て元素の混和、一は以て其の離散を説明せんが爲なるべけれど又思ふにこはへ

ラクライトスの唱へたりし反對の傾向の相争ふといふの説と思想上多少の關係を有するものならん。但しエムベドクレスが愛の作用を善と見、憎の作用を不善と見たるの點はヘラクライトスの説かざりし所也。

上陳せるか如くエムベドクレスは地水火風に對して之れを動かす愛情を説きたるが彼れは其のいふ愛憎の二動力を決して全く非物質的のものとは思はず、彼れに取りては愛憎の二動力も地水火風と同じく物なり、而して彼れに取りては物は皆空間に存在するもの也。故に古代の學者中には彼れの説を解して地水火風并に愛憎の六元素によりて万物を組織すと見るの論なりといひしもあり。然れども愛憎を地水火風と并べて之れを六元素と見るは決して彼れの意にあらず。彼れのいふ愛憎は決して全く非物質のものにはあらざれど彼れが動かさるゝ四種の物質元素と之れを動かす二個のものを區別したるや明なり。

〔四〕 此くの如く諸元素は愛憎の二動力によりて或は混和し或は離散するものなるが其の混和するの傾と離散する傾とは常に平均するものにあらず。宇宙全躰より見れば一が増進しつゝあれば他は減却しつゝありてついに一が全く他



を壓倒して全物界を横領するの時期あり。愛が全物界を横領する時は諸元素悉く一致結合して、些の分離なし。而して此の時に於ては全物界は渾然たる唯一の球形を形くると見てエムペドクレスは之れをスファイロス(*sphairon*)即ち球と名けたり。これに反して憎が全く愛を壓倒するの時は諸元素悉く離散しつくして其中些の和合なし。此の兩極端の中間にあるの時期には和合の傾と離散の傾とが交、相消長す。物界がスファイロスの状態を出で、他の極端に向かひゆくときは愛が漸次に衰へ其の代りに憎が漸次に増し而して其の離散の極に達したる後更にスファイロスへ向かひゆく時は愛漸次に増して憎次第に減ず。斯くして全物界は件の兩極端にあるの時期と其の一より他へ往還するの時期との四時代を経過す。全物界は無窮に此の四時代を循環來往す。吾人が今現に觀るが如き個々物の存在は一極端より他極端へ移りゆく時期に於いてのみあり。兩極端に於いては純然たる一致と離散とのみ專領する時代なれば今觀るが如き個物の存せんやうなし。個物の存せんには必ずや多少の混和と多少の離散となかるべからず。即ち一個物たらんには其の物が他物に對して離散せざるべからず然れども其の

物の一個物たるを得んには若干の元素相集合して一團の自體を爲さざるべからず。或史家はちもへらくエムペドクレスが離散と相交、消長すといへる和合は同種類の元素の相寄るを云へるにあらず異種の元素の相集まるを云へる也、愛の力によらざるも同種の元素は相寄り異種の元素の和合するは愛の力による、故にスファイロスに對する極端の状態にありては同種の元素はそれ／＼に皆悉く相合する也と。さて又通常史家はエムペドクレスは現今の世界を以て純然たる離散の世界よりスファイロスの状態へ進みゆく中途にありとなせりと解すれど又或史家は之に反してエムペドクレスは現今の世界を以てスファイロスの状態より離散の世界へ進みゆきつゝありといへるなりとも解す。

〔五〕憎によりて離散せられたる物界の中央に愛が入り來たりて先づ旋渦をおこし漸く周圍の諸物を吸引す(又或史家の見を取ればスファイロスの中央に憎が入り來たりて離散を生じはじむる也)。之れが爲に空氣まづ凝結して全物界の外皮を作りつゝいて火質出で、件の空氣を壓し空氣は下に壓せられて暗なる半球を形つくり火質は上りて明なる半球を形つくる、天廻りて明なる半球上に懸れば晝



となり暗なる半球之れに代れば夜となる。大地は初め粘泥の状態なりしが廻轉するに従ひて水を排出し水更に空氣を排出す。この最後に出でたる空氣これ天の最下層にありて大地を覆ふ所のもの也。暗なる天の半面に火塊の散布せるこれ星躰なり。日輪は玻璃質のものにて明なる半球の光輝を集めて之れを四方に反射す。月の光あるは日輪の光を反射するによる其の形盆に似て空氣の凝結せる水晶質のもの也。日蝕は日と地との間に月の挟まるによりて起こる。

〔六〕かくして成立せる此の天地の物躰は一として地水火風の四元素より成らざるはなし。エムペドクレスは此の四元の離合を以て天地間の個々物の變化成壞を説明する唯一の金鑰となしぬ。彼れに従へば一物が他物に影響を及ぼすも一物を組成する元素の他物に攪入するに外ならず。如何にして一物の元素が他物中に攪入し得るか。彼れは曰はく其の物の微部分が發出して他物の微窟に入るが故也と。而して一物より發出する微部分と他物の窟の大きさ及び形とが相適合すれば彼れと此れと相混じり易く隨うて彼れが此れに影響を及ぼし易し。混入しやすきは種類の同じき物躰なりそは發出する部分とその入るべき窟とが最も

よく適合すれば也。故に同種相牽き同類相求む。(エムペドクレスは鐵の磁石に牽引する微分子先づ鐵の殻に入り鐵の方より盛に其の微分子を發出しかくして次第に相接近してついに附着す) エムペドクレスは諸物を組成する不可分の元子のあるとを説かざりき。

〔七〕エムペドクレスの生物の説に曰はく最初に地中より生じたるは植物にして次は動物也。初め地中より手足等の個々の部分を別々に生じ後に此れらが相結合して千種万態の生物を形づくりぬ。かるが故に昔時は四肢五躰の結合のいと奇異なる怪物多かりしがそれは漸次に亡びて恰好よき生物の繁殖するに至りぬと。近ごろの哲學家の中には此のエムペドクレスの説を解して素と地上に發生せし種々の生物中最も生存に適合せる者の遺れりといふかの自然淘汰説のちもかげの己に此にほのみゆといふものあり。又エムペドクレスが植物の葉と動物の毛髪と鳥の羽毛と魚類の鱗と又植物の實を結ぶと動物の子を産むとを相較べたる如き近世所謂比較生躰學の思想を髣髴せしむるものあり。男女兩性の別を説きて熱度の多少に歸し熱なるを男性、冷なるを女性といへり。植物の生長するは己れと同類の物質を吸収するによる。而して其の生長に不用なる部分は



果實となる呼吸は咽喉のみに因らず身軀全面の竅によりてせらるる蓋し血液が身軀の表面より内部に退く時は空氣は皮膚の細微なる竅より侵入し血液内部より還り來たれば空氣は之れが爲に排出せらる。かくして呼吸の働を爲すと、これらの説によりて見るも當時生物生理の研究のやうく盛ならむとするの様を知るべし。

〔八〕 エムペドクレスは又身軀の表面の竅を通して外界の物質が軀内に於ける同種類の物質と相逢着するにによりて以て知覺を説明せんと試みたり。思へらく動物のみ知覺あるにあらず植物も亦之れあり。否如何なるものも多少の知覺を有せざるはなし。皆「知あり識あり」といへり。尙物は同類によりて知覺せらるゝとの意を述べて曰はく「吾人は地を以て地を見、水を以て水、アィテルを以てアィテル、火を以て火、愛を以て愛、争を以て争を見」と。視官は外物より來たる微部分の眼に達するとき眼中の火又水が細竅より發出して二者相逢着するに基く。吾人の身軀の成分と其の類を同うするものは吾人に快感を與へ其の類の相反するものは嫌惡の念をおこさしむ。欲し求むるの心は同類の物質相牽引するが故に生ず。吾人が知力の特に存する處は血液也。血液は諸元素を包含するが故に如何なる外物にも應接するを得。斯くの如くエムペドクレスはバルメニデスと共に物は其の同類によりて知覺さるゝよしを説きしが又彼れと共に感性と理性とを區別して純然たる眞理を知らしむるものは理性なりといへり。

〔九〕 藝にも陳ぜしが如くエムペドクレスは輪廻轉生の説を爲し又ピタゴラス盟社に於けるか如き信神禮拜を説きたり。吾人の靈魂は其の爲せる善惡業に隨ひ永劫轉生して歇むときなかるべし。故に殺生肉食すべからず、動物の靈魂ももど吾人の靈魂と同一なりしが、但し轉生してかゝる状態に墮落せしのみ。もし轉生中其の罪業を棄て去らば至福の人となりて生まれ出で後神界に入るを得べし。エムペドクレスハ多神教を説きて特に俗間の宗教に敵するが如き事をなさいりしかど其の宗教上の思想は固より俗間のものと同一視すべからず。彼れが目的は俗間の宗教に敵するにはあらで、むしろ其の最も高尚なる代表者たらんとするにありしならん。

## 提 要



〔十〕 エムペドクレスが思案の根本問題とせし所はエレア學派の主張せる不生滅不變化の實躰を以て万象の流轉變化を説明せんとするにあり。之れが爲に其の説きいでたる元素説は是れ其の學說の骨髓也。元素を不生滅不變化のものと見たるはバルメニデスの學說に基ける所なれども之れを平等一如と見ずして本來性質上に四種の差別あるもの又集散離合するもの(即ち位地に於いて變動するもの、量に於て割たるべきもの)と見たるはエレア學派と一致せざりし所也。而して愛憎といふ反對の動力を設け其が消長によりて万物の成壞變化を説明せむとしたるは恐くはヘラクライトスの學說に負へる所ならん。エムペドクレスはバルメニデスの謂ふ所とヘラクライトスの謂ふ所とを我が學說に攝入して前者を其の所謂スファイロスの状態に置き(バルメニデスをみづから「有な」の有り)後者を愛憎の相争ふ状態に置けりしが如し。此の外エムペドクレスは尙天文并に宗教上の所説に於いてピタゴラス學派より幾分の影響を受けたりしは明也。

エムペドクレスが物質分子の混和といふことをもて唯一の原理となし之れを以て物理、生理、知覺上の現象をも説明せんとせし所は上來述べたる諸學說中最も一貫したる所ある學說に近きものなれどこれと共に又矛盾の點も尠からず。第一彼れはスファイロスに於いては諸物全く混和すと説きたれど、かゝる状態にありて四元素は尙其の特殊の自性を保ち得べき乎。彼れは或は四元互に混和しながら各、其の自性を保存すと思へりしならめどもし一元素が自性自躰を保持して少しにても他の元素と相容れざる所ある間はそは未だ全く混和せりといふべからず。若し彼れと此れと全く相渾融和合せば四元は最早其の特殊の自性を保持せずして平等一如のものたらん。この故に四元全く混和してスファイロスをなすといはんには四元を本來有差別のものに見ずして一旦平等一如の状態をなし後憎の力によりて分離し出づるものと見ざるべからず。かく一方には地水火風の四元を本來有差別のものに見做しながら又一方にはスファイロスなる状態を説くは是れアリストテレスの已に指摘したる彼れが學說のいみじき自家撞着の點なりとす。次に又スファイロスと正反對の状態について見るも同一困難なき能はず若し諸元素が無窮に離散して其の間些も同種のものゝ相合するなくばこれ又各元素がその特殊の性質を留めざるの状態ならん。若し多少の分量ある物ありて特殊の性



質を存すればこれ未だ其の物の全く離散せずして其の間幾分の和合を存するなり。故に諸元素の全く離散するは其の極つひに其の全く和合するとひとしく毫末も特殊の點を留めざるに至らん。(若し或史家の見の如くエムペドクレスの謂ふ分離は唯異種の元素の分離ならば今云ふ困難はなかるべし、そは同種のもの相合せさればなり、但しスファイロスに對する困難は尙依然として存す)。諸元素を絶對的に混和し又離散し得るものとせばそを限りなく割たるべきものといはざるべからず。若し少量にても分割すべからざるの體を有せばそをば全く混合し又離散すといふべからず。さればエムペドクレスの所謂本來有差別の元素の説をして上の困難より免れしめんには其の元素は幾分の量を存しながら尙其の上には分割すべからざる極微體(即ち全くは混和せざる又離散せざる元子)となさざるべからず。又離合即ち運動のあり得べき爲に虚空の存在をも説かざるべからず。さはれエムペドクレスはつひに此に説き至らざりしなり。又彼れの説くが如く地水火風の四元素のみをもて能く天地の森羅万象を説明し得べきか。宇宙に存する千万無量の性質上の差別が如何にして唯だ四種の元素

より生ずるか。エムペドクレスは唯四種の元素の離合すと説くのみ。その離合が何故にかゝる性質上差別ある無數のものを生し來るかを説かざる也。此の問題に關してエムペドクレスとは異なる、而も其の根本的思想に於いて頗る相類似せる所説を立てしはアナクサゴラス也。

### 第七章 アナクサゴラス (Anaxagoras)

〔一〕アナクサゴラスもエムペドクレスと略ぼ同じ時代に出て、同じ問題を解釋せんとしたり。小亞細亞のクラゾオメナイの人アポロドロスに據れば紀元前五百年に生まる。クラゾオメナイもホイオニヤ文化の範圍内にありし一市府なり。年齢よりいへばエムペドクレスに先ち著作よりいへば彼れに後れたり。紀元前五世紀の中頃かの波耳斯亞戰爭の局を結びて間もなく亞典府に來たり當世の名士ペリクレス、エウリピデス、ツキデ、ス等と交り學術を以て同志に推されたり。ペロポネソス戰爭の開かるゝに先ちペリクレスの政敵彼れが朋友たりしとありしが、アナクサゴラスも其の一人として此の禍に罹りき。彼れ月を大地と同心といひ又日を燃ゆる石塊に外ならずなどいへりして訴へられ遂に亞典府を



去らざるを得ざるに至れり。或はいふ一旦獄につながれ後放たれてラムプサコ  
スに行けりと、或はいふ直に亞典府を逐はれたるに過ぎずと。時に紀元前四百三  
十四年ラムプサコスにて齡七十二にして没す。散文にて『ペリ、フィゼオス』と題す  
る書を著し、が今尙其の断片の句を存せり。

〔二〕 アナクサゴラスが思索考究の起點となし、所もエムペドクレスと同じく  
パルメニデスの實有論即ち實に有りといはるべきものは生滅變化することなし  
といふにあり。然れども又エムペドクレスと同じくエレア學派に反して此の世  
界に雜多變動の眞に存することを否まず。即ち彼れは此の世には不生不滅なる  
數多の原物ありてその離散し集合するによりて諸物の變動なるものを生ずと説  
きたり。曰はく、世に生あり滅ありとヘレテ人の云ふは誤れり、そは一物として生  
するなく滅するなく、唯すでにある物の相混し相離るゝに過ぎず、故に正しくは生  
を混合といひ滅を離散といふべしと。然れどもエムペドクレスは不生不滅の原  
物は唯地、水、火、風の四種なりと説きたれどアナクサゴラスは本來性質を異にする  
無數のものありと説きたり。彼れは天地万物の千態万狀なるを見て本來性質上

千種万類の物あるを要すと思惟せしなり。こは思ふにエレア派の根本思想を物  
の性質に適用してその性質の所に生ずべき理なく今現存せる性質は實に太初よ  
り有らざるべからずと考へしに出でたるものならん。アナクサゴラスは此の性  
質上有差別の原物を名けてスヘルマタ(*stêpharata*)又はクレイパタ(*kreipata*)といへり、  
種子の義なり。一種類の種子は如何ばかり之れを分割するも又之れを集合する  
も其の一部分の性質と他部分の性質と異なるとなし。黄金は如何ばかり之れを  
分割するも黄金骨は如何ばかり之れを分割するも骨なるが如し。而して此等性  
質上判然たる區別を有する無數の種子は即ち原始のものにして性質上單純なる  
ものはむしろ此の原始のものゝ相混じて生じたるなり。かるが故にアナクサゴ  
ラスによれば性質上單純なるものが相合して複雑なるものを成すにはあらでむ  
しる性質上判然たる差別を有する數多の種子の相混合するが故にその異性質の  
互に相埋没せられてそれが混合體は恰も性質上單純なるものゝ如く見ゆる也。故  
にエムペドクレスが單純なる元素となし、地、水、火、風もアナクサゴラスに従へば  
むしろ複雑なるもの即ち數多の種子の相結合して生じたるなり。



(三) 斯く萬物を形つくる無數の種子は如何なる點に於ておの／＼其の性質を異にするかといふにアナクサゴラスは唯形に於て色に於て又味に於て相異なれりといひしのみにて特に詳説せし所なし。さて各種子は相合すれば如何程にも大なるを得べく又分割すれば如何程にも小なるを得べし。隨うて此く無窮に細分せらるゝが故に彼此全く相混入するを得。太初此の世界は一切の種子全く相混融して無差別の状態にありしが其後漸々異種の相分かれて同種の物のみ相集まるに従ひ益々千差万様の物象を生ずるに至れる也。故にアナクサゴラスに従へば千種万類の差別は異種のものゝ相合するによりて現るゝにあらざむしろその相分かるゝによりて現るゝ也即ち本來種子に具れる(而も世界の太初には相混して埋没せりし)千万無量の性質上の差別が異種なる種子の相離れ同種なる種子のみ相集まるに従ひます／＼現じ來る也。然れども此の異種なる種子の分離は今日に至るまで全く完了せしに非ず隨うて今尙一物といへども全く一種類の種子のみより成れるはなく多少他の凡ての種子を包含す。されば現存せる個々物は多少太初一切の種子の相混合雜糅せし状態の痕跡をといむといふべき也。ア

ナクサゴラスの語に曰はく凡べてが凡べての部分を含むと又曰はく世界は一なり其の中のもの相分かれたるはなし斧を以て断ち割られたるはなし熱も寒と離れず寒も熱と離れずと。夫れ物の變化は所詮種子の或は來集し或は離散するの現象に外ならず。若し一物にして他物を含まざるは如何にして他物と化するを得んや。一物の變化して他物となるが如く見ゆるは其の素より含有せりし種子の出現すれば也。故にアナクサゴラスの有名なる語あり曰はく雪も黒しと。又曰はく凡べてより凡べてが來たるとそは凡べてが凡べての種子を含めばなり。然れども今現に一物に含まれたる各種の種子の量は固より同一なりといふべからず。物はその含める種子の中最も多きもの隨うて又最もいちじるく露るゝものによりて名けらる。

右はアナクサゴラスが凡てのもの凡ての部分を含むといへるを諸物が各種の種子を含めるの意に解しての説明なるが或史家は之を解して各種子に寒熱等反對の性質の多少皆含まるゝの意とす即ち一種子として全く寒又は全く熱なるはなし寒と熱とは全くは相離れず而も無數の反對の性質の各種子に含まれる割合の



異なりて或は寒を多く或は熱を多く含むが故に甲の種子乙の種子といふが如き性質上の差別を生すと解する也。

〔四〕太初一切の種子の相混入せりしものが如何にして分れそめたるか。アナクサゴラスはエムペドクレスと同じく動かさるゝ種子の外に動かすものを説きて之れをヌウス(νοῦς)即ち精神と名けたり。所謂ヌウスは何ぞ。從來の哲學家は多く之れを解して形而上の靈智なるものゝやうに説けども恐らくは當たらじ。案ずるにアナクサゴラスの所謂ヌウスは未だ全く物體的性質を脱離せるものにあらず。彼れは曰はく、ヌウスは凡べての物の中にて最も稀なるもの、最も純なるもの、一切の物につきて凡べての智識を有し又最も大なる力を有すと。ヌウスは醇乎たる獨自の存在を有し毫も他物と相混せず他を動かして他に動かさるゝとなし、即ち他物は皆混成物なるに此れのみは他に結ばるゝとなし、都べて他に結ばれざるが故に之に束縛せらるゝとなくして能く之を動かす之れが上に力を有する也。而してその作動や智識あり、思慮あり。アナクサゴラスは宇宙万有、特に天體の整然秩然

として美しき調和を保てるを見てこは智識なき盲目者のなし得る所にあらずと思惟せしなり。此くの如くアナクサゴラスの所謂ヌウス即精神はエムペドクレスの所謂愛、憎よりも一層靈智に近きものなるは疑ふべからざれど直に之れを以て非物質のものとは斷了すべからず。ヘラクライトスが其の所謂火を神火又は道理ある火と名けし如く物質上のものに智識の作用を具せりと見るは當時の學者に取りては決して異しむべき事にあらず。且又アナクサゴラスは智識あるヌウスなかるべからずと説けども實際は唯運動を起す根本力として之れを用ふるに過ぎず。天地万物の生ずる所以を説くには矢張エムペドクレスと同じく専ら機械的説明を用ひたり。又彼はヌウスは或物には存在して或物には存在せずといひ又ヌウスの存在する處にも或は多量に存在し或は少く存在すともいへり。即ちヌウスを以て個々に分たるゝもの、其量に於て大に小に分たるゝものとするなり。此等によりて考ふるもアナクサゴラスの謂ふヌウスは未だ全く物質的性質を脱却したるものにあらざるを知るべし。則ち知る彼れが思想の未だ全く物理學派の立脚地を超越せざるとを。さもあれ物界研究時代の物理學者の中



にては彼れがヌウスの説は無形なる靈智のものを説くに最も近きものなるは敢て拒むを要せず。但エムペドクレスが所動のものと相分かちて能動の力を説きながら尙之れを物體の如くに考へたると同しくアナクサゴラスも亦其の謂ふ精神を全く物質的性質と相離しては考へざりし也。

〔五〕アナクサゴラスは所謂ヌウスを以て天地の秩序を説明するに欠くべからざるものとせども其の實際之れを用ふるは専ら最初の運動の起る所以を説かんが爲にして一旦運動の起りし後は機械的作用によりておのづから天地の形成せらるゝが如くに説きたり。太初宇宙は雜糅混沌の狀態にありしがヌウス一たび旋動を起こし此の旋動恰も漣漪の水面に擴がるが如く漸く四方に波及し今尙ますく外圍の部分をもその旋渦中に捲き込みつゝあり。或史家は案すらくアナクサゴラスの説に従へばヌウスは唯一箇處のみならず處々に運動を生じて多くの世界を作りぬと。混沌たる物質は際限なく擴がりその中些の間隙をだに存せず。アナクサゴラスはエレア學説に従うて虚空の存在を否める也。さてヌウスの起こしたる旋動によりて先づ稀薄、乾明、暖輕なる物と濃厚、濕暗、寒重なる物

と相分かれたり。前者をアイトール(*aithēr*)後者を空氣(*khōnē*)と名く。ヌウスの起こせし旋動につれて濃くして重きもの中央に集り稀くして輕きもの周圍に散ず。中央なる濃く重きものより水、土、石を排洩す。最初ヌウスの起こし、旋動繼續して大地今尙廻轉す。而して件の廻轉によりて飛び去りし幾多の石塊エーテルの境に入りて熱熾せるが日并に星となる、こは隕石を見て知るべし。隕石等の證に徴して宇宙を組成せる物質の天と地と相ひとしきを論じたるはアナクサゴラスを以て嚆矢とす。

大地は形圓柱の平きものに似、空氣に載せられて世界の中央に靜在す。諸天體は皆大地の周圍を轉廻す。月は日光を反射して照る。月蝕は大地が日光を遮るによりて起る、又地と月との間に吾人の視得ざる若干の天體ありて之れに遮らるるによりて月の蝕するともあり。日蝕は日と大地との間に月の挾まるによりて起る。月界には山あり谷あり生物も棲息す、其の自體の暗きは日蝕の時に徴して知るべし。星は月と異なりてみづからの光を有す、併し又太陽の光を得て其の光輝を増す。銀河は太陽に照らされざる星々の光の反射せる也。



〔六〕 動植物は皆種子より生起したるものなり。詳しく言へば素とアイテール及び空氣の界より下りし種子が泥土に混じたるが日光に照らされてつひに發生して動植物となりぬる也。

動植物皆靈魂を有す、こはヌウスがそれに宿れる也。動植物の生育活動するは智ありて働くヌウスの作爲に外ならず。當時の希臘學者は感覺知識の心的作用と生育活動の生理的作用とを共に等しく靈魂の所爲と見做し、なり。

パルメニデス又エムペドクレスは類の相同しきもの相逢ふにより五官の知覺を生ずと云ひしが、アナクサゴラスは反對のものによらずは知覺は生せずと説きたり。彼れおもへらく吾人が物を視得るは吾人の瞳子に外物の象が映じ來たれるが故也、まかるに物の象は同一のものには映ぜずして相反するものに映ず。類の相同じきものは激動を生せず、故に感覺を生せず。吾人が物を視得るは吾人の瞳子は黒きに其の物は光に照らさるゝが故也。吾人が闇中に物を視得ざるは其の物の色と其の物の映すべき眼中の部分の色と相同じければ也。苦を以て甘を感じ冷を以て熱を感じるは皆同し理に基く。此くの如く吾人の感覺は反對の物の

相違ふより生ずるが故に如何なる感覺も多少の苦痛を伴はざるはなし。故に其の感覺を上げしうるときは皆苦痛もまた隨うて増加す。音にまれ色にまれ其の劇烈なるときは皆一種の苦痛を覺ゆる蓋し此の理に外ならず。

〔七〕 幾多不生滅不變化する原物を以て森羅萬象の生起と變化とを説明せむとするはアナキサゴラスがエムペドクレスと其の見を同しうせる所なれど彼れと異なりて性質上の差別を本來無數なりとし世界の千差万別の物象は素と存在せる性質上の差別の相分れて現出するなりと説けり是れ其の學說に於ける一の特殊の點なり。其の説に於て注意すべきはヌウスの論なり。所謂ヌウスは上述せるが如く全く物體的性質を脱したる者とは見るべからざれど精神的作用に出づるものとせずは宇宙の秩序を解すべからざると考へたる所は彼れの說に於て決して蔽ふべからざるの點也。但しヘーゲル派の哲學史家は概ね彼れを目してソクラテス以前の物理說の立脚地を超越せるものゝやういへども彼れが尙物理派學者の一人たるとは其の學說全體の趣より見て明なるべし。彼れが虚空の存在を拒否し又凡べての種子の曾て全く相混淆せる状態ありしを故に又各種子の限り



なく小分せらるべきとを説く所はエムペドクレスの學說に於けると同じ非難を受けざるべからず。要するに限りなく小さく分れたる部分といふとにつきてはかのゾエノンの指摘せる困難の纏はれりといふべし。

### 第八章 ビタゴラス學派

〔一〕 エムペドクレスは地、水、火、風の四元素を以て又アナキサゴラスは無数の種子を以て諸物の生起と變化とを説明せまくせしが、こゝに又物の原素を多元的に見て空間に於ける單一のもの即ち個々の點の相集まりて凡べての物體をなすと説きたるものあり。ビタゴラス學派これ也。エムペドクレス、アナキサゴラスの二人いづれも多元的原素を説きたれどその謂ふ原素は單一なる物によりて成れるにあらず窮まり無く分割さるべきもの也。ビタゴラス學派は物體を組成する單一のものを説き而して其の單一のものと空間を占むる點とを同一視したり。ビタゴラス派の學說はソクラテス以前の希臘哲學にありて他の學說と關係する所の最も親密ならざるものゝ如く、恰も物界研究時代の哲學思想の主脈の傍に流れたる副流の如くに見ゆれど、又決して當代の一般の思想と全く縁なきにあらず、

一種の多元説としてエムペドクレス又アナキサゴラスの學說と列を同しうし得べきもの也、又同じき多元説の中にて其の學相に於いてはエムペドクレス及びアナキサゴラスとアトム論者との間に其の位置を占め得べきもの也、そは其の學派に云ふ空間上の單一のものをエレア學派の思想と結びて更に明瞭に言表すればアトム論者のいふアトムとなるべければ也。又ビタゴラス學派の數理天文の説は當時最も進歩したりしものにして他學派に教ふる所ありしが如し。又此の派は早くより(恐くはアナキサゴラスの寒暖二氣説等に基因して)二元的思想を有し而してこれが多少他學派の立說に影響せし所もありしなるべし。

〔二〕 第二章に陳ぜし如くビタゴラス盟社は一時南伊太利に於て政治界に一大勢力を振はんとせしが當時勃興しつゝありし民主思想と大衝突を來たし紀元前四百四十年より四百三十年に至る頃此の社に對する反對の氣憤其の頂上に達しクロートンなる此の社の集會所を焼き拂ひ遂には乃にちぬるに至りしかば社友は其の難をのがれて多く他方に離散せり遁れて希臘本部(ヘルラス)に至れる者の中にフィロオス及びリシスあり、居をテーベスに占め共に當時の碩學を以て稱



せられき。フィロオスのテーベスに在りしはプラトンに従へば第五世紀の末つ  
 かつた也、惟ふに彼れはソクラテスよりも少しく年長なりしならん。リオンは名  
 將エパミノンダスの師となりきピタゴラス盟社クロトン等にて其の權勢を失ひ  
 し後又一たびはレキオンを以て其の中心となしたりし、其處の團體も後遂に離散  
 するに至りぬ、當時哲學者として又將軍として高名なりしアルキタスのあるあり  
 しが彼れの死後は此の社の勢力頓に衰へたり。

ピタゴラス派の學説は一時に一人の作りしものにあらずで長き時を経て多くの  
 人によりて漸次に組成せられしが如し、故に其の一部分と他部分との關係甚だ疎な  
 る所あり。又其の學説の大部分の何時構成せられしかは明ならず。フィロオス  
 の著作なりとて傳はれるものは此の派の學説の記録せられたる最古のものにし  
 て其のうち明に偽作と見ゆる部分を除けば信憑するに足ると考ふる史家あり、然  
 れども又此言を以て毫も信するに足らずとする學者もあり。

〔三〕ピタゴラス學説の根本思想は物皆數より成るといふにあり。されど此の  
 派に謂ふ數と物との關係を委しくは如何に考るべきかは史家の大に其の意見を

異にする所也。或は思へらく物體が數を以て成れりとの意にあらず唯、數の關係  
 に従ひ數の模型に倣うて形つくらるといふのみ數が物體の原質にはあらずと。

然れどもこは寧ろ後世の説明にして原初のピタゴラス學徒は數を以て諸物の原  
 素と思ひたりしが如し、而して斯く思ふは諸物を數の關係に従うて形つくらると  
 見ると毫も相容れざるとにあらず、彼等は恐くは万物は數より成る隨うて諸物は  
 數にかたどりて存在し數は諸物の原型なりとやうに考たりしならん。

斯くピタゴラス學徒が万物を成すと見たる數は吾人の今日所謂數即ち抽象的の  
 ものなりと考ふる史家あれど、果して然るか疑はし。寧ろ彼等が物體の成り立ち  
 を考ふる時には數を空間と相離さず空間を占むるの點と同一視したりし如し。

ピタゴラス學徒が夙くより數學の研究に心を用ゐたりしとは其の哲學たる數論  
 を構成するに至りし原因の少くも一なりしならんが、當時の數學は専ら幾何學な  
 りしを思へば彼等が數を謂ふ時これを空間上のものとして云ひしも敢て怪むべ  
 きとに非ず。如何なる數も皆一を以て成れり、而して其の一即ち單一なるもの  
 よりて物體の構成せらるると彼等の云ひし時には専ら空間を占むるの小さき單一



なるものを眼中におきしならん。彼等は一を名つけて數の本、又數の父と云へり。約言すれば彼等は諸物皆單一なるもの即ち點を以て成れりと思惟せしならん。

〔四〕 斯く個々の點相合して物體をなすと見ると、早くより此の學徒間に行はれたりしと思ふ、二元説と相結ばれり。諸數は皆一より成れるものなるが此の諸數には奇數と偶數との二種あり。而してピタゴラス學徒は奇數を定まれるもの、偶數を不定のものとし、萬物は皆此の奇と偶と、即ち定と不定との對峙によりて成ると考へたり。

定、不定の二元の反對は萬物を貫通するものなるが故にこれを根本として世界に幾多の對峙を生ず。或ピタゴラス學徒は此等の對峙を數へて十種となせり、(一)不定(二)奇偶(三)一多(四)右左(五)男女(六)靜動(七)直曲(八)明暗(九)善惡(十)方形長方形是れなり。定は不定にまさり奇は偶にまされり。

〔五〕 此の學徒は一より十に至るまでの數に特別の重きを置きしが就中一、二、三、四を貴びたり、そは此の最初の四つを加ふれば十となれば也と。

諸形體を以て成る。點は一、線は二、平面は三、立體は四なり。さるは點は分つべか

らざる單一のもの、線は二個の點に界限せられて成るもの、三個の線もて圍みて始めて平面を成し、四個の平面(三角面)もて圍みて始めて立體を成せば也。一より四に至るの數を合して完全なる數即ち十を成すが如く點、線、面、體の四種を以て諸形體を成す。要するに立體も平面も線も皆點を以て成れるものなり。尙此の派の學者が其の數論を廣く諸般の事物に應用せんとする時には勢ひ牽強附會の説に陥らざるを得ざりき。彼等おもへらく、一より四までは形體の數なるが、五は形體の有する性質の數、六は生氣の數、七は健康理解の數、八は仁愛、友誼、知慧、發明の數、九は正義の數、十は宇宙の調和を保つ數なりと。

〔六〕 ピタゴラス學徒の世界構造の説に曰はく、世界の太初に一あり、之れを圍繞してト、アパイロン(不定、無限)あり、此の太一がト、アパイロンに働き漸次に其の範圍を蠶食してこれに定形を附與しつひに此の有形なる世界万物を形づくるに至りし也と。彼等は定と不定との對峙をこゝに應用し來たり不定ト、アパイロンを虚空の如きものと見此の虚空に形を與ふる一を定と見做したり。詳言すれば此の世界の外圍には無限の不定なる虚空あり、世界の中央に位する太一は件の空漠た



る虚空を引き入れて此れに形を與へかくして此の世界は成れり。アリストテレスがピタゴラス學徒のいふト、アパイロンに就いて記せる語に曰はく、世界は之より虚空と氣息と時間とを吸ひ込む、これらはト、アパイロンより出て、世界に入り込む、世界はト、アパイロンより吸ひ込む如くに又これへ吹き返へす也と。其謂ふところは恰も生物が周囲の物質をわが体内に入れて之を同化せしめ又体内の廢物を外界へ排泄する如くに世界の中心より出つる力がト、アパイロンを引き入れて之に形を與へ而して世界の内に於て既に形の壞敗せるものは再びト、アパイロンに還りて漠々に歸すと云ふにあるならん。(アナクシメニスの説と比ふべし)。此くの如く太一といふ形造するものとト、アパイロンと云ふ形造せらるゝものとのを説きたるは此の派の學說に於て最も注意すべきの點なり。

〔七〕太一は世界の中心にしてこゝに此の學派の所謂中央火あり。宇宙は球形にして中央火其の重點となりて之れを保つ。中央火の周圍に西より東に廻る十個の天體あり。恒星の天、五遊星、日月、地球及び向の地球(antithoon)これ也。天體は凡べて透明なるうつろの球に附着し其の球の廻轉するにつきて廻轉す。恒星の

附着せる球(即ち恒星の天)最も中央火を離る、次に五個の遊星各遠近あり、次に日月、地球向の地球と順次に中央火に近し。地球は中央火に對して常に同一側面(西の半面)を向けて廻轉するが故に曾て中央火に向ふとなき側面に棲息する吾人人類は其の火を見るを得ず、又地球と中央火との中間にある向の地球も吾人の地球に伴うて回轉する故に吾人は之を見るを得ず。地球と太陽が同一方角に位する時は晝となり互に反對の方角に位する時は夜となる。日蝕は月が太陽と地球との間に挟まるとき生じ月蝕は地球が月と太陽との間に挟まる時生ず。ピタゴラス學徒は大地の形を球と思へりしや明なり。又日月を玻璃質の球とも思へり。然れども又或所傳によれば星體を地球と同様のものと思ひ月界には植物生長し有情のもの住すと思へりしとも見ゆ。

地球は一日に、月は一月に、太陽は一年に中央火の周圍を廻轉す。他の星體は尙許多の歳月を要す。凡そ迅速に空中を飛行する物體は音を發するが如く天體も亦音を發して運行す。其の運動の速力中央火を離るゝに従うて異なるが故に其の發する音もまた異なる。天體の音相調諧して一の音曲をなす。之れをピタゴラ



ス學徒の所謂天球の音曲となす。吾人が其の音曲を聞かざるは生れてより絶えず之れを聞き慣れたれば也。鍛冶屋に居るものゝ鑪の音を聞かざるが如し。宇宙に一大調和の存すといふは是れピタゴラス學徒の好で唱へし所なりき。右陳べたるピタゴラス學徒の天文説は他學派の説に比すれば著き進歩をなせるや明也。殊に大地を宇宙の中央に靜坐すと見ずして他の天躰と共に或同一の中心を廻轉すと見るが如き、又大地の形を球と見たるが如き、又其廻轉を以て晝夜の生ずる所以を説明せんと試みたるが如き一大進歩といはざるを得ず。ピタゴラス學徒は全世界の生起即ち其の太初あるとを説けども其の終に壞滅するの時期あることを説かざりしが如し。但し彼等(少くも其の或者は宇宙の變遷に大曆あると換言すれば其の状態の往復循環するを説けり。以爲らく諸天躰その曾て有りし處を全く同位置に立ち戻るの時あり。而して其の時に至れば世界の事悉く皆前時と全く同一状態に復歸しまた其の時より以前と同一變遷を繰りかへすべしと。

〔八〕 前述の循環説と關係あるは此の學徒の最初より説きたりと思はるゝ輪廻轉生説也。以爲らく靈魂肉躰に宿れる間は之れを知覺の具として用ふ一たび肉躰を脱すれば上界に往きて形骸の繫累なき至福の生涯を送るを得、但しこは現世に於てかゝる幸福を享くるに足るべき行爲をなしたるものに限る、然らざるものは再び世上の生活に繋かるゝか若しくはタルタロス(陰府)に墮ちて罰を受けざるべからずと。

或はいふピタゴラス學徒は所謂太一を神と思惟し天地萬物を其神の所造若しくは顯現と見做しきと。然れどもピタゴラス學徒の説をかく有神説若しくは凡神説の如くに解するは惟ふに後世學者の附會説なるべし。但しピタゴラス學徒に先つて既に或詩人等が一神教的思想に近づけりしか如く彼等學徒も亦之れに近づけりしは殊更に疑ふを要せず。さはれ其の宗教上の所説と其の哲學的思想と何程の關係を有せしや審ならず。其の靈魂又神明に關する説は其の哲學の根據とは關係なく、むしろ其の學徒の中に行はれたる一種の禮拜に附隨せしものならん。

〔九〕 ピタゴラス派の學説はエムペドクレス又アナクサゴラス等の説と列べて



一種の多元説と見るを得べきものなれども、其の最も負ふ所ありしはイオニア學派なりしが如く、エレア派に直接に負ふ所ありし跡は認め難し。其の二元説は他學派に説く所と思想上相通へる所あるべし。アナクシマンデロスは寒熱の對峙を云ひ、アナクシメニスは厚薄の作用を云ひ、パルメニデスは明暗の對峙を説き、エムペドクレスは愛憎を語り、レウキッポスは(後に)出づは元子と虚空とを相對せしめたり。是れ皆對峙のものを以て森羅万象の生起を説明せんとしたるものなり。ピタゴラス派の學説は前にも云へる如く一人の造る所にあらず又一時に成れるものにあらず、其の學徒間にありて漸次に形成せられしもの也。かるが故に其の所説は恰も關係なき個々の部分を綴り合はせたらんが如き趣あり。其の數論、其の天文の説及び其の宗教上の所説は相聯絡せるものにあらず。一を以て諸數の、又隨うて諸物の根元とする數論と中央火を説く宇宙構造論と、善惡應報輪廻轉生を説く一神教的信仰とは相互に自然の關係を以て繋かれたるものにあらず。離々片々たる所説の相引き寄せられたらんが如し。斯くの如く此の派の學説は個々獨立せる諸部分の集合せるが如きものにして頗

る散漫の嫌あるを免れざると共に又哲學的所説としても此の派に特殊なる數論に於て彼此相合せざる點あるを見る。蓋し諸數の原始なる一を以て奇偶兩數の對峙をその未だ相分れざる状態に於て包含するものとなし奇數と偶數とは此より出でたりとやう説きながら又一を以て不定に對するものとなし能定の一が其の活動を不定に及びすより有形の万物を生すと説くは一を兩様に見るの難なくばあらず。一方に於ては一を以て奇偶即ち定不定の對峙の分出する根源となし又一方に於ては其の對峙の一端に位するものとなす。十種の對峙を擧ぐる所に於ても一を多と相對せしめて之れを定不定、奇偶、善惡等と相併ぶものとなせり。此の困難を除かんには諸數の本原たる一と多に對する一とを區別するを要す。然れどもピタゴラス學派の立脚地よりはかゝる區別を如何に説明すべきか、かゝる區別を何處より來たるものとなすべきか。此等の點は此の學徒の辨明せざりし所なり。

ピタゴラス派の學説にはかゝる散漫なる所又困難なる所あれど其の數論即ち數によりて諸物は其の形を定めらるゝと見るの論及び定と不定との對峙を以て万象



生起の理を説明せんとするが如きは優に哲學思想として一緊要地を占むべき價値ある也。特に此の學派のプラトンに及びし影響の著明なるを見れば其の希臘哲學思想に於て輕からざる位地を占有するは否むべからず。又殊に星學及び數學に於ては此の派は遙に當時の他の學派の上にいで其の學の進歩に資せるとと蓋し尠少にはあらずりき。

### 第九章 アトム論者(レウキッポス並デモクリ

トス)

〔一〕 元素又は種子が限りなく小さく分割せられて其各部分全く相融合し得といふの點又虚空の存在を否むの點はエムペドクレスとアナクサゴラスと其の見を同じうせり。されば虚空の存在を説かずして如何にして物體の運動を説明し得るか。又原物即ち種子もしは元素を以て限りなく小さく分割されて全く相混入し得るものとなさば其の如き混入の状態に在りては各種子の各種子たる又各元素の各元素たる特殊の性質隨うて又變化するとなき原物たるの性質を失ふにあらずや。エムペドクレス、アナクサゴラスの説に此等の難點の存するよし

は前にも述べたり。ピタゴラスの學徒は單一にして分つべからざる者即ち空間の一位地を占むる小點數多相集まりて物體をなすと説きたり。故にピタゴラス學派が他元的見解を取れるはエムペドクレス、アナクサゴラスと同じけれど其の空間に存する個々の點を以て分割すべからざる單元と見做ししは彼等と異なる所なり。又ピタゴラス學派にては定と不定との對峙を説き不定を虚空の如きものと見この虚空に形を與ふる定ありとなし此の二元の對峙を以て万物生起の理を説明せり。虚空の存在及び物體の不可分なる單元を説くとの最も明になれるをアトム論者とす。ピタゴラス學徒もエムペドクレス、アナクサゴラス、アトム論者等と共に多元説を唱へたるものと見らるべきが其のエレア派に對する關係の親密ならぬとは此等と異なり。同しくバルメニデスの根本思想を以て出立點となせる者の中にもアトム論者が虚空の存在と多元とを説けるにも拘らず最もエレア思想に親密にして又其の所説の最もよく整へるもの也。アトム論を以て希臘哲學の物界研究時代に於ける思想發達の頂點に達したるものと見做して可なり。約言すればミノトス學派に於ける一元説はエレア派に至りて其の極點に



達し更に一轉して多元説を誘致し而して其の多元説の最も完全にして首尾貫徹せるものはアトム論なり。

(二) アトム論の創始者レウキッポスはエムペドクレス、アナクサゴラスとほゞ其の時代を同うせりしが如し、或はアキクサゴラスより少しく年少なりしやも知るべからず。其の生地また明ならず。或はアプデラ(ツラキアの一市府、イオニア種族の植民地)或はミレトス、或はエレアに生れきといふ。書を著し、や否や明ならず。アトム論の根本思想はレウキッポスの創唱せし所なるは疑を容れず。然れどもこれが應用を押しひろめて其の論を完成し以て一大學説となし、功はたしかにデモクリトスにあり。されば後世デモクリトスの名の爲に創建者たるレウキッポスの名の蔽はるゝに至りぬ。デモクリトスはアプデラに生まる。アポロドロスによればアナキサゴラスより年少なると四十歳とあり、されば其の生れしは西紀前四百六十年頃ならん。兎に角ソクラテスとほゞ其の時代を同うせりしが如し。廣く埃及及び波斯近傍を漫遊し他郷の客たると五年、後故郷に歸りてこゝに其の學派を開きたり。當時亞典府は希臘文化の中心たりしがデモクリ

トスはこれと隔離し其の府に於ける思想界の影響をうくるとなかりしが如し。思ふに彼れとソクラテス又プラトンの間には殆ど相互の思想上の影響なかりしものゝ如し、こはプラトンが一たびも彼れが名を其の書中に掲げざるを見ても知らるべし。郷人の扱からざる尊敬を受け高齡を以て卒はる。著述浩瀚、其の書の断片の今日に傳はれるものによりて見るも彼れが數理、天文、地理、物理、生理等諸學に亘り、かねて道德を論し又音樂、繪畫、詩歌等より兵法、醫術に至るまで其の講究の及ばざるものなかりしを見るに足る。其の識の該博なる、其の議論の銳利にして整然紊れざる前代學者の遠く及ばざる所なり。其文の燦然光彩を放てる其の聲調の高雅なるシセルは之れをプラトンに比す。實にプラトン、アリストテレスと列んで遜色なき大哲學的著述家たりしが如し。物界研究時代の物理的哲學は彼に至りて最も光輝ある頂上に達しぬといふべし。惜むらくは彼れの著書の傳はらざるを。

(三) 所謂アトム論は如何程レウキッポスの立てたる所にして如何程デモクリトスに屬するか判然たらず。然れども上にもいへるが如く其の論の根本思



想と見るべきものは概ね既にレウキッポスによりて唱道せられたりしならん。アトム論の根本思想は實なるものと空なるものとは共に均しく存在するものにして而して實なるものは夥多あれど其の個々は更に分割すべからざる者なりといふの點にあり。デモクリトスの語に曰はく「有のあるは毫も非有のあるに優る所なし」と。斯く有と非有とをひとしくあるものなりと云ひ得しはエレア學徒と共に非有と空とを同一視せしによる。即ちあるとに於ては「虚空は毫も充實に劣らず」といふ意なり。この故に有は充實せるものなりといふの點は正しくエレア學徒の思想と同一なれど非有なる空も共に均しくありといふに於てはエレア學説を離る。これ即ちエレア學説に従うて虚空の存在を承認せざるエムペドクレス并にアナクサゴラスとアトム論者との異なる所也。而して實なるものは夥多ありて且つ運動すと説くはエムペドクレス、アナクサゴラス及びアトム論者の皆同じくエレア學説に違背せる所也。さて其の夥多あるものゝ運動し得るはアトム論者に従へば虚空あるによる。アリストテレスに據ればデモクリトスは虚空の存在する證據として今いへるが如く物體の運動に虚空を要することを説き又

物の厚薄を生ずるも生物の生長するも虚空あるを要すといひ又水を充てたる器中に灰を投じて猶其の水の溢れざるは是れ亦水中に虚空の存在する故なりといへり。此の虚空と共にある(語を換ふれば虚空の中にある)多くの實なるものは唯だく、塞充せるもの即ち有なるものなれば其の自體に虚空即ち非有を容れず。故は此の夥多ある實なるものゝ各個は更に分割されず、分割さるゝは虚空を容るゝなり。而して又有の有なる所は唯だ充實すといふの點にあれば凡ての有なる(即ち實なる)ものゝ間に彼れ此れ性質上の差別あるべきやうなし。斯く有は平等一處にして更に分割すべからざるものなりと見るの點に於てはアトム論者はエレア學徒にしてエムペドクレス、アナクサゴラスは然らず、所謂元素も種子も性質上有差別にして且つ分割せらるべきものなれば也。デモクリトス曰はく若し絶對に(即ち限りなく)分割し得ば少しの分量をも隨て何物をも遣さざるに至らんと。斯く幾分の量はありながら而も不可分なる單元をアトマ(atoma)と名く分つべからざるもの義なり。この故にアトムはパルメニデスの所謂有を粉碎したるか如きもの也。(アトムはこゝに元子と翻すべし)。



〔四〕 アトムは生ぜず滅せず變化せず實有なるものゝ生滅變化するとなしといふの點はエムペドクレス、アナクサゴラス、并にアトム論者の共に固くエレア學説を執りて動かさる所也。各アトムは其の自躰を保持して毫も他より變せらるゝとなく且其の自躰を組成する物質の新陳を謝する如きとなし。然るに此の現世界の雜多と變動とは何れより來たるぞ。是れたゞアトムが其の本來有する形を異にし且つ其の空間に於ける位地を變する(即ち運動する)によりて來たる其の性躰に於ては些も差別なく又變化なし。物の生ずといふはアトムの相寄るに外ならず、其の滅すといふはアトムの相離るゝに外ならず。生滅は所詮アトムの集結と離散との謂なり。而して集結と離散とはアトムの機械的運動に外ならず、即ち一アトムは他のアトムと相衝突しもしくは相附着するも毫も相混入融和するとなし。一の躰は他の躰の胃す能はざる障礙を呈す。これ原素及び種子の混合を隔るエムペドクレス、アナクサゴラスとアトム論者との異なる所なり。斯く一アトムは他のアトムと衝突するも嚴然其の自躰自性を保持して少しも他より傷けらるゝとなければ一物が他物に影響するが如く見ゆるは畢竟一物より其の

微部分の發出して只機械的に他物に衝突附着するが故のみ。空隙を隔てゝ一物が他物に影響すべきやうなし。(エムペドクレスもまたかゝる説明を用ひたり)。以上陳ぶる所によりて觀ればアトム論は既にミレトス學派(殊にアナクシメニス)に於て萌芽せりし機械的説明を最も明瞭に且大膽に應用擴張したるものなり。アトムは肉眼にては見得べからざるほど微小のものなれど種々の形狀を有す。其の形狀は千差万別限りなく多くの種類あり。形狀*idea*又は*pythia*がデモクリトスのいふ所によりて觀るにアトムの相異なる最要の點なるが如し。デモクリトスは形狀順序及び位地に於て元子は相異なるといひ又或は其の相異なる點として大きさ及び重さをも掲げたり。此等諸點の中、大さと形との關係に就いては後世の學者其の見解を異にし、即ち大さは只だ形の如何にかゝるか否かは定めがたし。重さは大きさの如何(即ち容量の多少)に懸る。そはアトムは皆その充實すといふに於て平等一如、而して此事以外に其の性躰とする所なきが故に同じ容量を有するものは又同じ重さを有する也。位置は形の如何にかゝる。たとへば其の形を或は倒にし或は横ふるを得。順序は一アトムが他のアトムに對する排列の前後



をいふ。一物體の重さと其體質の密なるとは相比例す、そは密なる程アトム量の多ければなり。堅さは一物體内の空隙の分配の如何にかゝる。蓋し相集結するアトム量の總量を等しとせば其の集結より成る物體の全部分に成るべく平等に空隙の分配せらるれば其の體は密なれども軟なり。空隙の不平等に即ち片よりて分配せらるれば疎なれども硬也。鉛は鐵よりも軟にして密、故にまた重し。斯くの如く物體の硬軟、疎密、輕重、大小は皆唯アトム量の集結の如何にかゝる也。地水風等は單純のものにあらず、皆種々のアトム量の相寄りて成れるものなり。但し火は最微圓滑なる同一種のアトムより成る、故に最も動き易し。テオファラストスの傳ふる所によれば赤き物は火と同種類の(たゞそれよりも稍大なる)アトムより成る。此の種類の成るべく細微なるアトムを成るべく多く有する程物體は光輝あり。

〔五〕 斯く種々の形狀を有し而も其の性體に於て平等一如なるアトム量の相集結すれば何故に色聲香味觸等の性質上の(換言すれば感覺上の)差別を生ずるか。エムペドクレスは唯だ四種の元素より有りとあらゆる性質上の差別を生ずと説

きたれど如何にして其の然るかは考へがたし。思ふに此の困難を見ればこそアナクサゴラスは本來性質を相異にせる無數の種子ありとも説きけれ。然るにアトム論にては全く性質上の差別を容さず、アトムは其の性體に於て渾べて平等一如なり。然らばかゝるアトム量の集結より如何にして性質上の差別を生ずるか。デモクリトスはこゝに主觀的説明を用ゐて色味寒熱は主觀上(即ち感覺上)に存するに過ぎずとして之れを疎密、輕重、硬軟などいふ直接にアトム量の集結の如何にかゝれる差別と相別てり。さはれかく色味寒熱等の差別は唯外物によりて起こさるゝ五官の状態にかゝる(即ち主觀上にあり)と説きしはデモクリトスの自ら發明せし所なるか、はた其由來する所は彼れと同郷の人にして彼れに先ちて出でたりしソフィストの首魁たるプロタゴラスの主觀説にあるか。思ふにプロタゴラスの説に因由する所ありしは否むべからざるに似たり。

〔六〕 エムペドクレス、アナクサゴラスは原素又種子以外に運動をおこすものを説きたれどアトム論者は運動はアトム以外の物によりて起こるとは説かず、即ち彼等は運動をアトムそれ自らより離さずして考へたり。然れどもアト



ム自らが運動を有すとは如何なる意ぞ。アトムには若干の重量あればちのづから空間を落下すべく随うて運動を生ずとの意か。はた重量によらずしてアトムそれ自身が自由に運動するの動力を具ふとの意か。これにつきては史家其の見を異にす。ツェラーは前説を取る、其の解に曰はくアトムは其の重さの故を以て無始より無限の空間を直下す。然るに其の重さの相異なるにより悉く同一の速力を以て降下せず。重きは速くして軽きに追いつきこれと衝突す。此の衝突によりて上より下へ直下する運動の外に垂直より外れたる運動を生ず。かく外れて傍に走れるアトムは又他のアトムと衝突し衝突に衝突を重ねて遂に渦旋を成する至ると。

兎に角アトム論者はアトムはそれ自身に運動するの性質を有するもの即ち必然に動くものなりと見たり。運動の必至なるをばデモクリトスは運命(*τύχη*)と名けたり。アナクサゴラスは目的ありて働くヌウスを以て運動の原因と見做したりしがアトム論者は運動の何のために起これるかを説かず之れを以て元子に本来具はれるもの、無始より必然にあるものと考へたり。

[七] 渦旋運動の爲に相類似せるアトム相集結し、大きくして重きが中央に集まり小さくして軽きが周圍に寄る。而して此くして成りし一團躰が一世界を形造す。空間は無限、其の中に散布せる元子も無量無数なれば其の元子の相集結するもの無数の團躰を成し無数の世界を形つくる。吾人の俯仰する天地は唯其の中の一なるのみ。而してかくして形成せられたる一團躰は更に大なる團躰の中に取りまかれて其の一部をなすことあり。或は二個の團躰相衝突して共に破壊するとあり。各世界は増減伸縮し、終には壊滅するの期あるものなり。吾人のこの世界の最初に旋動の爲に周圍に放散せられたる物躰が恰も其の外皮の如くに其の全躰を取り巻き中央に寄りたる物質大地をなす。火質、空氣、其他天を形つくる物質はもと大地より上騰せしもの其の物質の或部分は凝固して個々の團躰をなし當初は粘泥の状態にありしが風に吹き動かされて乾燥し且つ其の運動の迅速なる爲に遂に發火するに至れり。之れを天躰となす。大地は圓き盆に似て空氣に支へらる。又デモクリトスはアナクサゴラスと共に月を大地に似たるものとし其の表面に山嶽のかけを認むといへり。其他日月、銀河、彗星等



につきても説く所ありしがこれらの點に於ては概ねアナクサゴラスに從へり。  
又宇宙の大層に關しても説く所ありき。

〔八〕 デモクライトスの殊に秀でたりしは生物の論なり。就中人類の研究に  
意をそゞり。其の生理説に曰はく心情の種々の働は身軀のそれ々の部分に  
其の坐を占む。腦は全身の主宰にして思慮の存する處、心臓は忿怒の情の育てら  
るゝ處、欲心の坐は肝臓にあり。靈魂は生物の依て以て活動し得るもの、其の質は  
圓滑にして動き易き火氣のアトムに外ならず。これは全身に散布す。其の微に  
して動き易きが爲に空氣の軀内に入り來たりて靈魂のアトムを軀外に壓出する  
虞れあり。靈魂のアトムの減失を防がんとため呼吸は二様の働をなす。一は吸ひ  
込みたる空氣が軀外の空氣に抗して其の侵入を妨げ一は吸ひ込みたる空氣より  
新なる靈魂の元子を得て以て軀内より流出するものを補ふ。蓋し空氣中にはあ  
またの靈智散布して存せるが故に吾人は之れを軀内に吸入し得る也。凡そ物熱  
氣あるほど生氣あり。即ち靈魂あり智性あり。一物として靈魂のその中に住せ  
ざるはなく。此の神妙なる靈智は全世界に彌漫す。靈魂のアトムの全く離散す

る時即ち死なり。睡眠氣絶等は唯靈魂のアトムの一旦いちぢるしく減少するに  
起因す。此くの如く吾人の靈魂はつひに離散すべきものなれども而もこれが吾  
人に於て最も貴重なるもの。肉身は只だ靈魂を盛る器に過ぎず。靈の爲に心を  
勞すること身の爲に勝る。

〔九〕 デモクライトスは凡て感覺は外物が五官に觸るゝによりて起ると見て  
諸の官感を觸感の屬類に外ならずと説けり。空間を隔てゝ物を感じ得るが如  
きも實は其物より發出する微部分の來たりて五官に觸るゝによる。感覺を起こ  
すには外物より發しつづるアトムが幾分の量及び強さを以て五官に觸接し來た  
らざるべからず。其の接觸によりて靈魂のアトムを動かして始めて感覺を生  
ず。視覺は外物の影像(εἶδος)發出して空氣に其の象を印し空氣相傳へて遂に眼  
を壓し其の印せられたる象を靈魂に傳ふるによりて起る。夢幻の如きものも  
亦皆この影像の作用によりて起る。距離遠ければ物を視るとおぼろなるは途  
中にて印象の亂るゝによる。吾人の眼よりも發出するものありてこれ亦外物の  
印象を亂すとに與る。



凡て五官の智覺は物の眞實の状態を示さず、唯外物が吾人の五官に觸れたるの狀態を示すのみ。言ひ更ふれば五官の知覺は主觀的にして不變不易なる外物そのもの、眞相を示す能はざる也。唯理性の作用のみよく吾人に眞實の知識を與ふ。而して理解の作用も所詮靈魂のアトム運動に外ならず。其の運動が靈魂をして正當の溫度を發せしむれば事物を理解すると正しく寒或は熱に過ぐれば隱見を生ず。理解は吾人をして物の眞相(アトム并虚空)を觀ぜしめ五官の知覺は唯其の確かならぬ外観を見せしむるのみ。デモクソトスは五官の知覺も理性の智解も共にひとしく靈魂のアトム運動に外ならずと説くにかゝはらず、尙ほ斯くパルメニデス、エムペドクレス等と共に兩者の間に眞假の區別を置けり。

〔十〕 デモクソトスは智識を分かちて五官の與ふる塵埃の智識と理性の與ふる眞實の智識となせるが如く又快樂を分ちて肉慾を充たすの快感と眞正の幸福(*eudaimonia*)となせり。肉慾の快樂は欲求の苦痛を醫するによりて生ず。幸福は牛馬の多きにあらず金銀珠玉にあらず肉身にあらず、たゞ心の徳のみよく眞實の満足を與ふ。約言すれば眞正の幸福は心の靜なる(*housia*)にあり。デモクソト

スは此の心の靜なる状態を海のなごたるに譬へたり。尙語を換へていへば眞正の幸福は眞智によりて得らるゝ適度を守り過不及を避くるによりて得らる。道徳は外形の行よりもむしろ内心の情態にあり。故に不義をなすものは他に不義を仕向けらるゝよりも不幸也。

デモクソトスの鬼神の存在を説くに曰はく空中に住める幾多のものありて其形人に類す。唯人間よりも大きく強く且壽なるのみ。彼等の身軀より影像絶えず發生し人之れに觸るれば髣髴其の形を見其の聲を聞く。吾人は彼等を崇めて神となしあらゆる天變地異を其の作爲に歸しその實にあるよりも想像を以て一層之れを貴きものとなして畏れ且つ事ふ。其の身より發出するものは或は吾人を利し或は害す。又發出物の媒によりて未來を豫知するとありと。

## 提要

〔十一〕 均しく多元説を取れるものゝ中にも其の原理とする所の最も簡にして而も要を得整然として首尾貫徹せるものはアトム論者を推さざる可からず。純然たる機械的説明を用ひて之れを固守する是れ其の最も特色とする所、且是れ



近世の科學が凡て事物の性質上の差別を是の分量上の差別に歸せんとするの傾向をば希臘の古代に於て既に頗る明瞭に發表せるもの也。此の原子論は純然たる機械的説明を取ると共に所謂唯物論となりて實に近世の唯物的元子論の最古の模範又其の淵源と見るべきものなり。且つデモクリトスの説く所は諸種の學科を網羅して燦然たる一大學説を爲せば希臘初代の物理的哲學はこゝに其の光輝ある頂上に達せりと謂ひつべし。夫れ原子論者は性質上無差別なる、但だ空間を填充する固々物の機械的運動(集散離合)を以て諸々の性質上の差別の生起を説明せんとす。但し原子それ自身に於て全く差別なきにあらず、然れどもこれは唯形狀(又大さ)の差別に過ぎず、詮すれば空間を塞充する分量に於ての差別に外ならず。物體の輕重といひ軟硬といひ皆要するにその原子の大さと配置とに歸せざるを得べし。是れ原子論者の立脚地よりして爲し得るかぎり性質上の差別を單一なる(即ち唯だ空間を充たす)に於けるの差別に歸したるものなり。再言すれば其の立脚地の容す範圍に於て力めて性質上の差別を空間に充實する個物(即ち原子)の分量上の差別に歸したるものなり。然れども形狀を異にする

而も其の特性に於て無差別なる幾多の原子の集散離合するによりて如何にして色味寒熱等の性質上の(換言すれば感覺上の)差別を生ずる。こゝは原子の形狀の差異と其の機械的運動とのみを以ては説明し得べくもあらず。こゝに於てかデモクリトスは思ふにプロタゴラスより得たる(主觀的説明を用ゐて色味寒熱等の性質は客觀に(即ち五官に對する物體それ自らに)存するにあらず、唯吾人各自が外物を感じする上に存すといへり。然るに感覺するもの(主觀)を何ぞと問ふに彼れの唯物説に従へば一種の原子即ち物體に外ならず。最微圓滑なる火質の原子これ即ち感覺思慮の作用を有する靈魂なりといふ。かく内外(主觀客觀)都てものを物質元子となし了らば何故に色味寒熱等の性質なき物體(原子)の相接觸するによりて色味寒熱等の感覺を生ずるかを解し得ざるべし。外界の原子の機械的運動が靈魂の原子の機械的運動を起らせば何故に色味寒熱等の感覺を生ずる。是れ凡ての唯物説に離れざる根本的難點にあらずや。エムペドクレス等の説く所に於て既に此困難を指摘し得ざるにはあらねどデモクリトスが主觀的説明を試みてそれが爲に其所説の唯物論となり了れるに至つて殊にいちじ



るく此の困難に面し來たれるなり。是れ機械的説明を擴張し來たつて遂に其の弱點を暴露したるものにあらざや。此點に於てはアナクサゴラスの謂ふヌウスの説はやゝアトム論とその趣を異にせり。然れども是れ將た全く物理説を超脱したる所見にあらぬとは前に論ぜしが如し。アトム論は希臘哲學初代の物理説を其の機械的説明の傾向に従うて其の頂上にまで發達せしめて知らず識らず其の弱點を露出したるもの、アナクサゴラスのヌウス説は機械的説明をいさゝか脱せんとして而かも之れを脱し得ずして尙ほ物理説の範圍内に徜徉したるもの也。

## 第十章 折衷説及物界研究時代の趨勢

二二二 エムペドクレス、アナクサゴラス、レウキッポス等の略は其の時を同うして出でし時代こそ希臘哲學の初期にありて學派の相競うて勃興せし頂上ならめ。此後は物理的思索に於ける創始發明は漸く衰へて希臘思想界の一大新傾向の將に其の頭を擡げんとするあり。此時にあたりて尙ほまだ從來の物理的思索の立脚地にある者の中に幾多の折衷説の唱道せられしを見る。即ちアナクサゴラスの時代より後へかけて一時多くの折衷的物理説の流行したりしが如し。此

等の折衷説は將に思想海の新潮流の湧出せんとする時にあたり未だ舊思想の立脚地を離れずして而も既に物理的思索の創始力の衰替せし處に出現せし現象と見るを得べし。

斯く希臘哲學第一期の末に方り學説創始の元氣は一時沮喪したるが如きの跡なれども亦一方に於ては科學的研究はいちじるしく其の歩をすゝめたり。從來の物理的哲學に胚胎したる種々の學科が此の頃よりして多少各々獨立の學問として考究しめられたり。數學、星學、生理學、醫學等は特に其の進歩のいちじるかりしを見る。就中星學數學の研究は特にピタゴラス學徒の獎勵する所となり其の進歩に資する所少からざりき、醫學も亦其の學徒の研究する所となりき。純然たるピタゴラス學徒とはいふ可からざるも其の徒の著明なる影響を受けたるクロトンの醫師アルクマイオンの生理及び解剖上の研究の如きは頗る注意すべきものあり(彼れは知覺思想の座を頭腦にありとし而して感官より頭腦に到達する神經によりて感覺の傳致さるゝとを説けり)。然れどもピタゴラス學徒等の説く所多くは哲學的思索を混入したりしがヒッポクラテス(自四百六十年至三百七十



七年)出で、醫術を哲學より引き離し全く之れを一の技術と見做して其の研究の面目を一新せり。又此頃より生物學上の智識の如何に廣くなりゆきしかは疑にかへげたるデモクワトスの學説に現れたる所を見ても知らるへし。

(二) 大躰はエレア學派の立脚地に在り而して通常其の學派の一人と見做さるゝメリッソスの學説も幾分折衷説の趣を帯ひたるものとして見るを得べし。

メリッソス(Melissos)

彼れはサモス島の人。西紀前四百四十二年ペリクレスがサモス島に派遣したる艦隊を破り己か都邑の軍將及び政治家として名聲を輝したりしメリッソスと此の哲學者とは同人なるべし。

メリッソスは専ら多元的物理学派に對してバルメニデスの學説を辯護せんとしたりしが、しかすると共に多少又物理学派に假す所ありきとてアリストテレス以來哲學史家は多く彼れを非難せり。然れども其の據りて立つ所は要するにエレア學説の立脚地なり而して其の立脚地を離れたるところ亦彼れのために辨すべきものなきにあらず。彼れはバルメニデスを祖述して實有のものは不生滅不變化

平等一如なりといひしが、バルメニデスと異なりて實有の躰は無窮なり界限なきものなりといへり。又彼れは有を空間に限り無く廣かれるものと見たるのみならず又之を時間に限りなく存在せるものと思ひたり。そは有は生したる始なく滅するの終なければなり。斯くメリッソスが有を空間并に時間に無際限に存在する者と見たるはアナクシマンドロスの思想(ト、アパイロン)を雜えたるものなること明なり。バルメニデスは有を自足完了せるものとなし、無際限の過去未來をいはず、其の存在には唯恒の今あるのみといへり。

史家或は斯くメリッソスが有を無限に廣がれるものなりといひしを見て其の思想のバルメニデス並にゾノンよりも一層物躰となれるの證なりとし而して彼れが退歩を咎む。然れどもバルメニデスの説元來全く物躰以上のものを謂へるにあらず。其の所謂有を以て純然たる形而上の觀念にはあらで物躰の平等一如の基本(即ち空間を塞充せる所)を指すものとせばメリッソスが明にそを空間的のものとし而して空間には際限を附しかたければそを無限の空間に充ち廣がれるものとし考へしは決して全く無理なることにはあらず又強ち思想上の退歩といふべきも



のにもあらず。若し有を以て際限あるものとせば之れに虚空なかるべからず即ちピタゴラス派の學說にいふ如く世界を包圍せる無限の虚空ありとせざる可からず。然れどもエレア學說に於ては虚空を非有と見たり。

斯くメリッソスは實有者を無限なりといひ而して之を基として又そを唯一のものなりといへり、そは無限者の二つあるべき理なければ也。又斯く無限の廣がり  
を塞充するものなれば虚空のあるべきやうなく、虚空なくば運動はたなかるべく、  
隨うて又實有者は集、散、離、合すべきものにあらず。又厚薄を生ずべきものにもあ  
らず。平等一如にして憂苦を感すべきものにあらず。

メリッソスまた論ずらく世俗の見て有となす雜多若し眞に實有ならばその有なるの性体を保ちて滅するとなかるべき也。然るに世間雜多のもの一として懷滅せざるはなし。何故に昔時有りしもの今は其の形をだに留めざるか。これ昔時有りしと思ひしもの實に有りしものにあらざれば也。かるが故に雜多變化の界は實有實相の界にあらず。雜多變化をありとする吾人の五官こそ迷妄の根本なれ。五官の示す所は自身に自身を非難するものといふべし、そはその有りとする

もの忽焉として無きものとなれば也。

(三) 當時の折衷的思想は多くはイオニア學派の流を汲めりしが如し。アリストテレスは水と空氣と又空氣と火との中間の物を以て萬物の大原となしたる學者ありしとを記し置けり。折衷說の最好の代表者は

アポロニア人なるアオゲネス

なり。彼れの學說より察するにエムペドクレス又アナクサゴラス等に後れて出てたる人ならん。其の説く所畢竟イオニア學派の物活說とアナクサゴラスのメ  
ウス說とを撮合したるものに外ならず。彼れはイオニア學派に従うて萬物の大  
原を活動する物質、特にアナクシメネスに従うて之れを空氣と見たり。而して又  
アナクサゴラスに従うて之れを智慮あるものと見たり。其の理由とせし所は、ア  
ナクサゴラスの唱へし如く、智慮なきものゝ所爲としては天地萬物の秩序の成り  
し所以を解し得ずといふにあり。彼れはエムペドクレス等の多元說に反對して  
曰はく、諸物若し其の本體に於いて一物ならずは其の相互の混淆又その一より他  
に移るの變化又その一より他に及ぼすの影響の出來べき所以を解すべからずと。



萬物の大原は其の全體に貫通して之を活動せしむるものならざる可からず而してこれは空氣に外ならず。空氣は際限なく廣がりて存在せざる處なく又アナクサゴラスがヌウスに就いていひし如く諸物の最も精微なるもの最も稀薄なるもの此の故に又最も自ら活動し易くして他の一切の活動の本原となるもの也。デオクテスの學說中最も記憶さるべきは生物及び生理の論なり。靈魂は乾燥せる空氣にして其の幾分は母の胎内に宿れる種子より來たり又幾分は生れ出て後ち常に空氣を呼吸するによりて得るところ也。靈魂は血液と共に脈管内にめぐる是れを以て全身に活氣あり。感覺思想の座は頭腦中の靈魂にあり。外物の印象が此の靈魂に觸るゝによりて感覺を生ず。快樂苦痛健康疾病等は皆空氣が血液に混和するの割合に懸る。デヤゲテスが脈管に就いて説く所當時にありては頗る見るべきもの也。

予輩は今こゝに上陳せる如き折衷説を以て終はりたる希臘哲學の第一期なる物界研究時代の大勢を叙述すべし。

#### 物界研究時代の希臘哲學の大勢

〔四〕 第一期の希臘哲學はターレス以降アナクサゴラス、アトム論者等に至るまで都べて其の主眼とする所は物理的研究にあり、客觀なる天地万物を以て其の攻究の對境となせり。ミレトス學派はいふも更なり、エレア學派又ヘラクライトスも其の研究の問題とせし所は客觀の境界として存する天地万物について其の真相を看取せんとするにありき。パルメニデスが所謂有も廣袤を有するものなること其の學説を論じたる處に陳べしが如し。彼れが吾人の思想をも有と同一不二なりといひたるも其の着眼點は矢張り客觀の有にあり、其の意蓋し吾人の此有を思惟するの思想も眞實有るものなる以上は有の外なるものにあらずといふにあり。ヘラクライトスが万物の實相を不斷の生滅變化と見而して火を以て生滅變化の基因となしたるも是れ亦客觀的物界に對する思索に外ならず。エムペドクレス、アナクサゴラス、レウキッポスの三家及びピタゴラス學徒が思索の對境となし、所はた同じく客觀的物界にありしこと論を須たず。彼等の説たまく知識の論に涉ることありしもそは唯だ客觀界の實相に對する解釋より生じいでたる餘論に過ぎず。感官的知覺と理性的智解とを相分ちたるも只だ客觀界の實



相と考定したるものをば前者によりては見得ずと思惟せしが故也。如何にして外物の知覺し得らるゝかを論じ又智力の鋭鈍の何物にかゝるかを論ずるも要するに之れを客觀的現象の一部分若しくは之れより生じ來たれるものと見て尋究せしに過ぎず。故に知識に關する多少の論はあれど論理學と見做すべきものなし。且又其の眼光の専ら物理的研究に注がれしか故を以て未だ倫理學と稱すべきものを見ざる也。要するに彼等の思索は終始物理的説明の立脚地を離れず未だ純然たる虚靈界即ち形而上界に翱翔するに至らざりし也。かるが故にソクラテス以前の希臘哲學を或史家の爲したる如く主心派と主物派との二派に分かたんは非なり。其が全軀の主眼は畢竟物界の研究に外ならざりき。

然ども其の物理的思索を一括して唯物論といはんは非なり。心と物との對峙の明に想念せらるゝに至りてこそ近世いふが如き唯物論はあらめ。ミレトス學派もエレア學派もヘラクライトスも純然たる唯物論の主唱者にあらず。未だ全くは物質的性質を脱せざるものなれども彼の愛憎又ヌウスと云ふが如きものを説けるエムペドクレス又アナクサゴラスも純然たる唯物論者にあらず。アトム

論者に至りて始めて全く唯物論の面目を具へ來たれり。こは思ふにデモクリトスの唯物的世界觀を大成したる時に當つては既に傍には主心的傾向發生して心と物との對峙のやうく明に意識せらるゝに至りしが故ならん。物界研究時代の希臘哲學はアトム論者に至りて其の發達の頂上に達したりといはるべし。而してアトム論者に至るまでの希臘哲學は總て物理的研究を超越せざりしかども又決して純然たる唯物論ならざりし點の(即ち素とミレトス學派の物活説に存在し而してエムペドクレスにありては愛憎の二動力として現れたりし要素の)アナクサゴラスに至りてはヌウス説として現れ來たれり。物活説に於ては漠然相混合せりし物體と活動との二觀念がパルメニデスとヘラクライトスとに至つては明瞭なる對峙をなしアナクサゴラスに於ては其の一分は矢はり種子なる觀念に保たれながら其の他分は發達してヌウスとなりアトム論者に於ては其の一方が全く他方を併呑してこれに別個の存在を與へざるに至れり。アナクサゴラスにありては此の兩者を相離して一は他と相混せずと見しと共に其の一方が多少靈智的のものに近よりアトム論者にありては之れを相離さざりしと共に一方が他



方を横領して遂に物體的元子といふ觀念となり了れり。

斯くの如く第一期の希臘哲學は客觀の物界を研究するを以て其の主眼となしたりしが其の學相を更に二時期に分つを得、即ち前期の學相はミレトス學派以降パルメニデスに至りて窮極せる一元說、後期の學相はパルメニデス以後一轉して遂にアトム論に於いて其の發達の頂上に達したる多元說なり。而して此の物界研究時代の學統の中心となれるものはエレア學說なり。又此のエレア學說が如何に後の希臘哲學に重きをなせるかは更に述ぶる所あるべし。

上來叙述したる物理的思索の頂上と見るべき元子論はデモクリトスによりて大成せられて一大組織となりあがり。其の組織の宏大なる、又新時代の思想なるプロタゴラスの主觀說に負へる所ありと思はるゝ、唯これをソクラテス以前の物界研究時代の産物とのみ視がたきものあり。又デモクリトスの生時をいふも彼れは或は少しくソクラテスよりも年少なりきと思はる。然れども彼れを取りて物界研究時代の思索より斷ち離すべきにもあらず、その學說は大體の點に於てシウツポスの唱へたる根本思想を繼承し開發したるものなれば也。彼れはアテ

イカに於いて盛に起これりし新思想の大潮流と隔離せり。故に學派を以てすれば彼れは寧ろ大體上物界研究時代に屬すべき者なり。希臘の學界が物界研究の時代よりして一大歩を轉するは次に叙せんとする人事研究の時代にあり。

附言　デモクリトスの希臘哲學に占むる位地に於いては史家其の見を同せず。ソクラテス并にシュライエルマヘルは之れをソフィストの一流なりと考へたり。然れども彼れの學術はソフィスト輩の説く所と同一視すべきものにあらざるは明かなり。史家多くは彼れをアナクサゴラス等と相列べて希臘哲學第一期の結末に置く(但しアナクサゴラスのヌウス說を以てソクラテス以前の希臘哲學の立脚地を超越したるものと見る史家は此のヌウス說を以て第一期の發達を結ぶ者とすこは前にアナクサゴラスの條にいへるが如し、又彼等史家の中にはエムペドクレス等の物理家とアナクサゴラスとを全く相分つものあり)。ギンデルバンドはデモクリトスをソクラテス以前の哲學者と相分ちて彼れをプラトンと列べたり。其の理由とする所は一は時代一は學相にあり。おもへらくデモクリトスの師事せしレウキッポスはエ



ムペドクレス、アオクサゴラス并にエレア派のツエノン等と同時代の人なれどもデモクリトスは其の後の人なること前にいへる如し、又其の晩年の著作はプラトンの既に壯なりし時に成れりきと見るも敢て不可なかるべし。學相の上よりいへばプロタゴラスの主觀説の影響を受けたる所あるが故に之れをソフィスト輩の後に置かざるべからず。又其の説く所が諸種の學科を網羅して宏大なる組織を爲せるはソクラテス以前の學説の比にあらず。デモクリトスの學説はプラトンの主心説、目的説に對峙すべき唯物説機械説にして相共に莊嚴なる大哲學をなせる者なるが但だ唯物的機械説はソクラテス、プラトン、アリストテレスの相繼いで唱道せる反對の學風の爲に其の光輝を蔽はれて希臘の古代に於ては其の眞價値の認められざりし也と。斯くギンデルバンドは論ず。この論一理なきにあらねどなほデモクリトスは大體上物界研究時代に屬せる者と見んかた穩當なるべし。但しプロタゴラスがデモクリトスと同郷の人にして且彼れに先ちて出でしを思へばギンデルバンドの所見の如く(ツェラー)は之れを承認せざれどデモクリトスの用ひたる主觀的説明がプロタゴラスの影響を受けたりと見るは決して理由なきとにあらざ。然れども此點を以てデモクリトスがレウキッポスを繼紹してエムペドクレス等と共に物界研究時代の學流の中に立てる者なるとを破するに足らず。彼れが思索の大體の趣は依然として物理派の一人たる也。其の根本思想は彼れに先ちてレウキッポスの唱へいでたる所にして彼れの功は専ら之れを開發應用するにありしとは拒否すべからざらん。但た感覺の論に於てプロタゴラスの主觀説を便として之れを利用したるに過ぎず。且又其の説く所は諸般の學科に亘りて稀有の博識を現したりしには相違なければ是れ亦以て彼れを物界研究時代の學者と相分つに足らず。時代よりいへばソクラテス以前の人とはいふべからざるも此に彼れを第一期の哲學者に列するは時代を以てせずして其の學脈を以てすと心得ば毫も不可なる所なかるべし。

## 第二期 人事攻究の時代

### 第十一章 ソフィスト



〔二〕西紀前七世紀より六世紀へかけて希臘に於ける智識上の進歩とこれに伴ふ宗教道徳上の搖動とはミレトス學派及びピタゴラス盟社等によりて代表せられしとは前にも述べし如くなるがさて其の進歩搖動のますく盛なるにつれ諸種の學說紛然として競ひあこりぬ。かく智識上の進歩やうく社會に波及すると共に古來の信仰習慣風儀傳説等はた漸く其の勢力を失はんとするの傾向を現しぬ。而して第五世紀の後半に於て件の大變動の廣く社會に波及せる情勢を示し又これを波及せしむるに與りて力ありしものをソフィストとなす。ソフィストに於て希臘の思想界は一大歩を轉じたるなり。蓋しソフィスト等は諸種の學問及び從來の學理的研究の結果を通俗にするに於ての代表者なりき。こゝを以て其の社會に及ぼし、影響はた廣く且大なるものありき。希臘の社會に於ける史家の謂ふ開明時代クラシシスとは即ち此の時を指す。さてソフィスト等が心を用ゐし所は重に社會上の事柄なりき。前の物界考究の時代は一轉して専ら人事研究の時代となれり。ソクラテスも亦此の時代の人なり。後にも述ぶるが如く希臘の哲學はソクラテスによりて新原動力を得次いで新なる大組織時代を啓き來たり

しが而も彼れみづからはソフィスト等と共に人事研究の時代に屬すべき人なり。〔二〕前にいへるが如く物界研究時代の末つかたより生理學、醫學、數學、星學等學術の局部々々の研究や、精密となり來たりぬ。又歴史もヘロドトス出で、一段の進歩をなしたり。而してこれと同時にこれら學理的研究の結果を實際の事柄に應用せんとする傾向また著るく見え來たりぬ。これ社會活動の結果にして又その需用に應ぜんとする自然の道なりし也。是よりさき希臘國民が一たびペルシヤ戰爭に光榮ある勝利を得しより前述せるが如き學術の研究競ひあこりしがこれと共に文學、技藝、美術等燦然として一代の盛觀をひらき政治機關また大に發達して社會の事ますます複雑を極むるに至れり。而して當時希臘文化の中心は亞典府なりき。而して此の如き社會にありて當時人の最も榮譽とし又目的とせし所のものは、公共的生活即ち政治上の舞臺に立ちて活動する事にありき。さばれこは理財、政治、兵事などに關する明確なる知識を要す、單に漠然たる從來の傳説に従ふもの、能くし得る所にあらず。又これと共に政治上の生活に必要な辨舌をも有せざるべからず。ソフィストはすなはち此等社會の必要に應じて出で



時人に智識を興へ處世立身の道を教へんとしたる也。原語に *Moralis* (ソフィステース) とは學者又は知識ある人といはんほどの義也。彼等は希臘の各市街を遍歴して諸般の智識を人に與ふるを以て其の職業となせり。而して彼等が活動の中心は亞典府なりき。さればソフィストといふも決して一派の學說を傳へ一個の學派を立てたりしにはあらずむしろ種々様々の事を教授し中には技藝などを教へたる者もありき。而して彼等は其の教ふる所に對して報酬を求めたりき、即ち學問を授けるとが彼等に於いて一の職業となりし也。(從來の希臘人が單に其の好奇心にかられて學理を考究せしとは大に其の趣を異にせるを見るべし)。これしかしながら社會需用の自然の結果なりといふべし。

〔三〕 ソフィスト等は學理に關して何等の新研究をもなししにあらず寧ろ從來の學說の結果を實際に應用し又それらを通俗平易にして一般の人に教へたるなり。故に種々なる知識をあつめ之れを折衷補綴せるが彼等の重なる傾向なりき。唯特色とする所はこれらの智識を廣く實世間に散布し一般の人に解し易からしめ且其の實際の應用をも教へ政治社會に立つ者に取りて必要なる人心を收懐するの道を教へんとしたりしより彼等はますく人間の事社會の事に眼を注ぎ人事の研究は彼等の又此の時代の特色となりし也。

〔四〕 此くの如くソフィストが學術を教ふるや概ね從來の研究の結果を拆衷的にひろく蒐むるに止まりて甚だ雜駁に流れ隨うて其の自然の結果として一學說に重ををきて固信すといふが如きとなくむしろかゝる確信は甚しく衰へゆけり。物理研究の結果として出でたる考説已に紛然として其差別の益々多きを發見し多岐亡羊の歎なきを得ざりき。而して物の是非を判かち難く且物界の研究は正に一段落をなしてまた新學說の出づるものなきの時に際したれば彼等は在來の諸學說に對し天地萬物の大原などに對してはやうやう懷疑的傾向を生し來たれり。而して此の傾向や次第に猖獗を極め後には習慣、法律、宗教など社會實際の事にまで波及するに至れり。これ即ちソフィスト等によりて起こされたる新運動が當時の希臘社會に大影響を及ぼしし所以也。殊にソフィスト等の末流に至りて酷しく破懐を事とし其の説く所亂暴狼藉を極むるに至りき。されど彼等は初めより然りしにはあらざる也。



〔五〕 ソフィストの中最も有名なるものを擧ぐれば、プロタゴラス (Protagoras) ヘルキアス (Gorgias) 又少しく後れてはヒッピアス (Hippias) プロヂイコス (Prodikos) 等あり。ヒッピアスは博識を以て聞こえ、數學、天文、物理、歴史、又技藝をも教へ學術を通俗ならしむるの傾向を代表せる顯著なる一人なり。プロヂイコスは倫理、道德の事を論じたりと傳へらる。されどソフィスト等が起こし、當時の新思想、新傾向の代表者として最も肝要なるはプロタゴラスにして、次はコルギアスなりき。

〔六〕 智識論上懷疑説を唱へいだして希臘哲學史上に一要地を占むるものをソフィストの泰斗プロタゴラスとなす。プロタゴラスはアプテラの人西紀前四百八十年に生まる。諸處を遍歴し到る處に名聲を揚げ遂に亞典に來たりこゝにて帷を下して教授せり。然るに間もなく神々の存在を否みたりとの理由もて訴へられ此地を去らざるを得ざるに至りぬ。時に紀元前四百十一年也。シ、ラーに渡らんとして途中に海を渡りて他に行かんとせしが不幸にして溺死せり。プロタゴラスが知識論の根據は、人が万事の度量なりといふ彼れの有名なる語によりて表示せらる。其の智識論の主觀的且待對的なるはいとよく此の語中に見

えたり。謂へらく吾人が外物を知覺すといふは唯外物が吾人の五官に觸れたる其の時の状態に外ならず物それ自身を知ると能はず。吾人の五官の状態にして變すれば知覺はた變ぜざるを得ず。所詮智識とは外物が吾人の五官に影響する其時の關係にかゝれるもの、万古不易の眞理といふ如きものあるにあらず。吾人の五官に見えたるの様これ即ち凡の知識にして此れ以外に知識なし。故に人を異にし場合を異にすれば知識また異ならざるを得ず。一概に何れを眞理とも定めがたし。知識は凡て個人的にして又一時的のものなり。我れと他と其の見を異にし又我が前の見と後の見とを異にすとも何れを是とし何れを非とせん、唯其の時其の人に見えたる事柄より外に知識といふべきものなければ也。此の故に知識は主觀的なり。其の人其の時の状態に關係す故に待對的也。絶對の眞理といひ萬古不易の道理といふが如きものは吾人の知り得る所にあらず。さもあれプロタゴラスは此くの如き懷疑説をば流石にいまだ道德の方面には應用せず、善惡正邪等の區別は彼れこれを疑ふとをせざりき。されば彼れが宗教に關する思想の既に懷疑的傾向を帯びたりしはその一著述の冒頭の語を見ても明



なり。曰はく、神々に關しては我れは其の眞實存在するや否やを知る能はずと。  
〔吾人の五官の知覺は外物そのものを示観して外物が吾人の採用せられてアト  
ム論中の知覺論の根據となれりしものと思はる。〕  
是れアトム論者の條下に歸し置きたる所の思はる。

〔七〕 ゴルギアスはシ、ローの一市府レオンテイニに生まる。プロタゴラスと  
同時代の人なり。四百二十七年に亞典府に來たれり。彼れに於て破壊的の智識  
論はその極點に達したり。彼れ曰はく第一、何物もあるなし。第二、たとへ物あり  
とも吾人は之を知る能はず。第三、たとへ知り得るともそれを他人に傳ふる能はず  
と。先何もなしといふとの彼れの論證に曰はく何物か有りとすればそは有又は  
非有又は二者を併せたるものならざるべからず、然れども物は此の三者の何れに  
もあらず。何となればもし有なりとせばそは生じたるものか若しくは生ぜざる  
ものかの一ならざるべからず、又は一若しくは多ならざるべからず。然るにもし  
生ぜざるものならんには始なし故に無窮無限なり。無窮無限のものは何處にあ  
り得るか。自身の中にも他の物にもあるべからず、何となれば其のものゝある處  
は自身より大ならざるべからず。然るに無窮無限のものよりも大なるものある

べきやうなし、故にその在るべき處なし、則ちそは無きものなり。然らば有は生じ  
たるもの也とせんか、生せしならば有よりせしか無よりせしか、無より有は生ぜず、  
又有よりも有は生ぜず何となれば他に變するものは有にあらず有は生滅あるべ  
き理なければ也。次に有は一かはた多か。若し一ならばそは分たれざるものな  
るが故に大さあるものにあらず大さなければ物體にあらず物體にあらずば存在  
を有する能はざるものなり。有は多なるか。多は一の多く集まりてなれるもの  
なれば一なくば多もあるまじ。然らば在るものは有にあらずして非有なりとい  
はんか。非有は有にあらず、ざるものなれば無きものなり。然るにそは又非有にて  
あるが故に在るものといはざるを得ず、即ちあらざると同時にある也自家撞着な  
り。然らば在る物は有なると共に非有なるか、されど有と非有とは相合ふ可から  
ず。此の故に何物もあるなし。

第一、たとへ物ありとも之れを知る能はず。そは在る物と吾人の思想とは別物な  
ればなり。若し別物にあらずとせば吾人の思想に誤謬あるべき理なし、すなはち  
吾人の考へたるものは悉く皆實在に合致すべき筈なり。此の故に物と相異せる



吾人の思想を以て物の知られんやうなし。

第二、たとへ物を知り得とも其の知識を他人に傳ふる能はず。そは之れを傳ふるには言語などの外面の符徴をからさるべからず。然るに符徴と知識せる事柄とは別物なり。又他が件の符徴を會得するところ果たして能く吾が傳へんと欲するものと符合すべきかは保す可からず。我が心の知識を取つて他人の心に移さんよし無し。實に他人に傳へんとは到底不可能事なり。

プロタゴラスの説は或史家のいふが如くヘラクライトスの無常流轉の説を用ひたるもの也とは謂はれずともゴルギアスが上述の壞論を唱ふるにエレア學說(ゾエーン辨證法)を借り來たりたるとは明なり。

〔八〕既にゴルギアスの説に見ゆるが如くソフィスト等の論はますく詭辨に流れたり。つひには凡ての事につき凡ての事をいひ得といひ又人は決して誤り得ず又我れみづからと矛盾するとなしなどいふが如き極端論をもなすものあるに至れり。(これエウチデモスの言彼等は同一物につきてそを激賞せる即座に又そを激しく非するをも爲し得と談れり。かるが故に初は悪しき意味は帶ひ

ざりしソフィストと云ふ名稱も後世詭辨家と同じ意味に用ひらるゝに至れり。まかもこはプロタゴラスが知識論の自然の結論といはざるを得ず。

〔九〕啻に理論上に於てのみならず實際上においてもソフィストの末流はますく破壊狼藉を事とするに至れり。彼等は自然即ち天則(εἰσένεσις)と法律即ち人則(νομος)とを相對せしめたり(ヒッピアス既にこれを分てり)。天則とは隨時隨處に相異ならず諸多の事物に通じて不變なるものをいふ物界研究時代の學者が天地に求めたるもの即ち是れ)。ソフィストは則ちこの觀念を人事に應用し來たり人事に於ける如何程が天則なるかを見人事のすべてに通じて不變不易ならぬものを人則といへり。人則とは人爲の法則にして風俗習慣制度等を指す。人則は時により人によりて變化す万古不易の價值を有するものにあらず。畢竟時人の便利に従うて定めたるものなれば其の便利を缺く時には隨意に之を打破するも可なり。之れを實際に徴するも所謂社會の風儀もしくは習慣なるものは不變不易ならず變遷推移し來たり。ソフィスト等は古來の習慣風俗等の根據を討究するに隨うて其の決して變らざる者にあらざるを看又従うて其の効力を疑ひこれ



らは所詮其の時々の便宜もしは好尚に従うて作り出でられしもの、いつまでも之れを株守するは愚なり適意に之れを變更し破壊すべしと思惟するに至りたり。而してソフィスト等の人間を見るや主として個々人の好む所又個々人の便利とする所の方面に於てせり。恰もその知識論に於て個人が一時一時の感覺を基礎となししが如く實際上に於ても吾人の行爲の動機を専ら各人の個々の願望欲求に看たり。されば其の極つひに權力あるもの勢力あるものはその好む所欲する所に従うて何をなすとも可なりといふがごとき論を唱ふるもの出で來れり。プラトンはその『會話篇』に凡ての權力は強者の權力なるをカルリクレスの主唱せる所となし又トラシマコスをして法律は原と有力者が自己の利益の爲に設けたるものなりと言はしめたり。此くの如くソフィストの末流は甚しく破壊的となり貴族の特別の權理等を否認するのみならず凡ての古來の風儀と傳説との尊貴を疑ひ之れを動搖せしめたり。此の破壊論は宗教上にも及び信神の起原を自然的に説明するに至りぬ。プロディオコス已に人の拜する神々は元と天軀地水火風又は地の産物など凡て人間に利益あるものを喩へて神軀となしたるに過ぎずと

云へり。メロソス人ディオゴラスの如きは遂にむぎだしの無神説を唱へ出でたり。

〔十〕 此くの如くソフィストの末流は希臘に於ける當時の社會運動の破壊的方面を代表せり。其の末流が斯くの如き甚しき輕薄亂暴に流れたるは一は當時の社會の映射なり。蓋し當時の亞典府は已に其の政治上の最も光榮ある時代を經過し人心蕩然として腐敗せんとせり。而してソフィスト等はまた一層この腐敗を助けたりしならん。適莫ソフィストを以て希臘の社會に單に弊害をのみ流したるものとするは非なり彼等は又希臘思想發達の自然の通路ともいふべき變動時代を代表せるもの也。彼等によりて從來専ら客觀(物界)の研究を主とせりし學問の風潮が靡然として主觀なる人事の研究に轉したり。彼等出でし知識論、道徳論等の新研究起こりたり。これ即ち希臘の學界に大變動を起すの一大原因なり。言語、脩辭、論理及び倫理などいふ諸科の學の萌芽せしは彼等の力に負へる所甚多し。彼等は自然に來たるべき希臘人心の變動を代表して其の社會の大掃除をなしたるもの也。

此の時にあたりて一面ソフィストの立脚地に立ちまかも其の破壊的傾向を支持



し以て社會の道德を更に確實なる根據に建立せんとして出でたる人あり。ソクラテス即ちこれなり。

## 第十一章 ソクラテス (Socrates)

〔二〕前に陳ぜしが如くソフィスト等の新傾向は實際的道德の方面にまで其の影響を及すととなれりしが、こは畢竟當時社會一般の智識のいちじるく進歩せし結果に外ならず。即ち此の時に至りては前代に於ける學術上の研究心と其の種々の研究の結果とを社會の事に應用せんとしたる也、人事をも學術研究の範圍に引き入れんとしたる也。ソクラテス亦此の時に出で當時代の精神を呼吸したり。但しソフィスト等は智識に關しては懷疑的となり社會道德の事に關しては破壊的となり了りたるがソクラテスは智識を明にして以て社會の道德を確實なる根據上に築かんと志したり。蓋し當時に於ては問ひ考ふるとなくして唯古來の習慣風俗をそのままに繼承し遵守すべくもあらず。此の點に於いて彼れはソフィスト等に許せり。彼れは則ち社會の風儀法律等の因りて立つ所以の根據を看取せんと力めたり。彼れは研究心の已むべからざるを看、其の研究をして其の至る

べき所に至らしめ是れによりて以て社會の改善を圖らんと欲したる也。當時ソフィスト等の辯論例へば凡ての事につき凡ての事を言ひ得へしといひ、同一事につきて均しく能く相反するを立し得べしといふが如き、既に甚く輕佻浮薄に流れたり。之れを眞面目なる議論といふべからず、論ずるものもはた聽くものも共に眞面目に智識及び道德の事を研究せんとはせず寧ろ脆辯を弄して自ら喜びたる也。こはゴルギアスが「何物もあるなし」と言ひし口吻に徴しても知らるべし。即ち彼等は既に確實不動の知識を疑ひ半ば遊戯三昧に學問を弄したるの觀ありき。ソクラテスは此の輕佻なるソフィスト風に反して立ち同じく彼等が武器となして用ひし辯論を用ひて更に確實なる研究の途に上らむとせり。

ソクラテスが考究の主眼となしし所は吾人の智識と道德との事也。猶細しく言へば彼れは道德問題を中心としてこれがために新しく吾人の智識の如何なるものなるかを考へたる也。彼れは即ち人事研究時代の一人なり。前時代物界研究時代にありては會々論せらるゝことあるも研究の附屬物に過ぎざりし智識及び道德の事は此の時代にはむしろ殆ど全眼界を蔽ふに至れり。クセノフオンはソク



ラテスの性行を記して曰へり、彼れは他の多くの哲學者の論し争ひしが如く世界の如何にして生したるか如何なる永恒の法則に従うて天に於ける諸の事の成さるゝかを思索せず、却て其の思索の事柄を擇へる人々の愚なるを示さんと力め常に先づ彼等に問うて彼等は既に十分人事を知悉せりと思ひ而して斯かる事柄の穿鑿に力を勞する若しくは全く人事を措いて天上の事に思ひ耽ければ是れを以て彼等自らにふさはしき業と思へるかと言へり。ソクラテスの眼界はソフィスト等の或者よりも尙一層人事研究的となれりと謂ひつべし。

(二) 紀元前四百六十九年(又は四百七十年)ソクラテスは亞典に生まる。父をソフロニコスといひ彫刻を業とせり、母をフィナレテと呼び産婆を業とせり。彼れが幼時の教育につきては今多く知られず。當時世の注意を惹きたるソフィスト等に聽きしことあるは疑ふべからず。初は父の業を繼ぎて彫刻を事としたりしが後ち悟る所ありて其の業を棄て一身を擧げて精神的事業に於いて當時の社會に盡す所あらんと志したり。彼れは十分新時代の精神を吸収し其の需用を看破せり、然れどもソフィスト等の教ふる所に慊らず却て彼等が輕薄に流れひたすら

詭辯を弄するの風あるを見て慨する所あり、一面彼等が影響をうけながらそが辯論に眩せられず更に確實なる研究に従事せんと欲したり。即ちソクラテスは人事に關する研究并に批評の抑ゆべからざるを看唯漠然たる傳説と習慣とに依頼せず明確なる知識に従うて社會の事を處理するを要すと考へたり。彼れがこの事業のために奮然蹶起したりしは何の時なりしか確知し難けれど其の四十歳を踰えたる時には已に此事に従ひ居たりと知らる。家を外にして貧窶なる境涯を顧みずソフィスト等の如く報酬を受くるとを屑しとせず二十年一日の如く亞典の市街を徘徊し何人を問はず彼れに耳をかすものと對論せり。殊に當時の青年は最も喜で彼れに耳を傾け彼れまた最も青年を愛し自ら稱して「青年の戀人」といへり。ソクラテスの容貌風采の奇なる、其の談論の方法の新たなる、いたく時人の注意を惹けり。彼れの容貌は頗る醜なりきと傳ふ。如何なる場合にありても從容自若寡慾自ら制し其の品德は百世の師表となるに足れり。

ソクラテスの目的は十分當時の研究心の要求を充たし其が研究の結果に従うて社會の道徳を堅牢なる基礎上に確立せんとするにあり。故に其の立ちし處は一



方に於てはソフィスト等と異なり他方に於ては問ひ考ふるとなくして唯従来の習慣を固執する保守家とも異なれり。彼れは兀然此の兩者の中間に立ちて當世を濟はんと努めたり。當時ソフィスト等の破壊的傾向に反動して起れる保守派ありてアリストフハチス等之れを代表せり。ソクラテスは此の派の人にはソフィストの亞流に過ぎずと思はれたり。彼れが辯論の新奇なる昔しかたぎの人々に危険とせられて斯くの如き誤解を蒙りしも亦全く故なきにはあらず。世に最も公正を失したりと稱せらるゝ裁判をうけ服毒の刑に處せられたりしも少くも其の一原因は此の誤解に基けりと見て可ならん。メリトス等三名の者彼れを訴へたり其理由とせし所に曰はく彼れは亞典の青年を腐敗せしむ彼れは國家の神々を否めり彼れは新なる神を唱へ出でたりと。此の三箇條に含まれたる誤解の外に恐くは政治上の理由も混せりしならん。彼れは貴族主義を取りし一人にはあらざるも平民の意志に媚ぶるとをせず彼の三十人の擅制家を倒したる民主黨は恐くはソクラテスを以て自黨に不利なるものとなしたるならん。初は僅少の多數を以て有罪と決せられたりしが彼れは當時の人の屢々な志し如く毫も判官

の憐を乞ふとなく反りて飽くまで自己の正義なることを主張して動かざりしかば其の刑を適用せらるゝや遂に死刑に處せらるゝに至れり。獄に投ぜられての後逃脫のよすががありしに拘らず又之れを勤むるものありしに拘らず斯かる卑劣なるとは予の好まざる所なりとてつひに従容として毒杯を傾けて逝けり。ソクラテスの性行及び學術は載せてクセノホンの『紀念錄』とプラトンの『對話篇』とにあり。前者はソクラテスの傳記性行を記するに詳にして其の學術及び深奥なる思想を記するに疎也。後者は如何ほどまでソクラテスの自説又事蹟にして如何ほどプラトンの自ら潤飾し理想化せる所なるかを見わけ難し。ソクラテスは書を著しゝとなし。

(三) ソクラテスは物理天文等の研究を措き専ら人間の善福の何にあるかを究めんとしたり。即ち倫理道德の研究是れ彼れの主眼となしゝ所也。彼れは謂ふらく吾人の行爲は各自の悟得せる所に従うて爲さる可からず。各自の判断力を用ひずして唯所傳に習慣に盲従するは未だ眞の徳行と云ふべからず。知らずして爲すは假ひ當たるとあるもまぐれ當たりにあたるのみ。此の如



ソクラテスが各人皆みづからの眼識により知了し判断力によりて是認したる所に従ふて行ふを要すと言へるはソフィストの主観説に許せる所ありと謂はるべけれども彼れはまたソフィスト等の如く各人の主観を以て個々相異なれるもののみ見さりき同じく主観の働きといふものから人間の正當に其の思想を働かしめたるものは彼此相合致する所なかるべからずと見たり。故にソクラテスの人間を見るヤソフィスト等の如く好悪情慾など時により人により場合によりて常に變化するものによりて動かさるゝ方面よりせずして明瞭確實なる知識を以て行爲を整理するの方面よりせり。眞知識は各人の主観即ち其の思索の働に憑れども又人々相合すべきもの也。此の故に或哲學史家はソクラテスの立脚地をソフィストの立脚地に比して之れを遍通主観といへり。蓋し主観的にして而も遍通のものなるをいへる也。

〔四〕 此くの如く個人によりて相違せざる知識は是れ即ち事物の遍通不易なる所を看取せるもの也。事物を知ると何の謂ぞ。其の遍通不易なる所を看取するの謂なり。個々物に通じて其物をして其の物たらしむる所を悟得せされは未だ

眞に之を知れりといふ可からず。例へば勇を知るといはゞ唯一場合の勇しき行爲を知覺するに止まらず遍くすべての勇といはるべきものに通じて變らざるもの即ち勇の勇たる所を知るこれ眞に勇の何たるを知れるなり。此くしてソクラテスは知識の新理想、新觀念を立てたり。彼れが立てたる此の知識の新理想は希臘哲學の大動力となりそが一大進歩の緣由となれりし也。

〔五〕 吾人は果してかゝる知識を有するか。ソクラテスは自ら省みてかゝる知識を有せずと見たり、通常稱して知識といへるものゝ極めて漠然たるものなるを悟れり。吾人は知らずして知れりと思へり。是れ凡べての失敗と誤謬と混雜との淵源也。吾人はまづ吾が無知を告白し生れ更はりて新知識的生活に發心せざるべからず。知識のはじめは先づ自己を知るにあり。自己が眞に如何ほどの事を知れるかを知らざる可らず。如何なる事柄も其の事柄に關する自己の知識自己の能力の何なるかを知らずして無謀の舉に出つべし。故にソクラテスは常に「汝自身を知れ」(γινώσθη σεαυτόν)といふを以て常に自ら戒め又人を教へたり。ソクラテスは實に死に至るまで熱心に智識を追求したるの人也。彼れは終始攻學研



究の位置に立ちて論ることなかりき。是れ彼れが學相の特色なりき。

〔六〕彼れが知識を求むるの法はまづ人と對話するにあり。對話によりて自己を知らんと力めたり。彼れは彼れがいへるが如き知識を自ら有せざることを知り。彼れを教へんとて來たりし者は能く彼れを教へ得しか。否、彼れと論談を接ゆるの後は自家撞着に陥りつひに亦自己の無知なるを告白せざるを得ざりき。彼れが歩々對手を論じつめてつひに其の者をして呆然自失の窮地に至らしむるの技術は實に驚くべきものなりき。史家或はこれを名けて「ソクラテスの反詰法」<sup>イソロギ</sup>といふ。蓋しソクラテスを教へんとて來たりしものをして反りて自己の無知なるを自白せしむるをいへる也。これソクラテスが學を講ずる消極的方面即ち知らずして知れりと思へるを破るの方面なり。

〔七〕かく對話により敵者が其の無知を自狀するに至れば則ち曰ふ、然らば乞ふこれより相共に智識研究の途に出立せんと。かくして彼れと論ぜるものは何人も彼れに耳を傾けざる能はざりき。さて彼れは如何にして智識研究の途に出立するやといふに先づ多くの事柄を取り來たり之れを比較對照して其の物其の事

をして其の物其の事たらしむるものは何ぞやと問ひ以て其の事物の遍通不易なる所を觀取せんとしたり。故に哲學史家或は之れを「ソクラテスの歸納的考究法」といふ。かくて其の物の物たる遍通不易の所を明に觀取しこれが概念(Νοῦς)を得、これに定義を下すに至り、こゝに始めて其の物の眞知識を得たりと謂ふべし。ソクラテスは別に研究法を研究法として説かず唯彼れが問答の仕方としてものづから具はれりしものなりし也。故に史家の「彼れが歸納法」と稱するものも固より近世論理學者のいふ所のものゝ如く精しからず。又ソクラテス自らは件の方法によりて明なる概念を多く作りしにあらざ。さはれ兎に角彼れが其の如き研究の道を示し之れを實行せんとしたりしは後世の學術のため其の問題を掲げたるものと謂ひつべく一類の衆多の事物を統括する概念を明にし其の定義を下すといふことは是れ後世の學術の忘れ得ざる所也。ソクラテスが概念的智識を唱道したりと史家のいふは是れをいへる也。

〔八〕右の如き概念を作るにソクラテスは對話を用ひたり。問答によりて概念を形つくるの術是れ彼れが眞理を發見するの方術なりといふべし。吾人の事物



に就いて知れる所漠然たりといへども亦全く知れる所の無きにもあらず是れ眞知識を形づくるの素地を具へたるもの也吾人は皆正當に思想すれば事物の概念を發見するを得。ソクラテスが他人を教ふる唯彼等を助けて彼等をしてみづから智識を發見せしめ自覺せしむるなりといへり。彼れは之れを母の業に譬へて産婆術なりといひき。即ち他をして智識を生みいださしむるの助力をなすものに過ぎざるの意也。

〔九〕 ソクラテスはかく徳を行はんとせば徳の何なるかを明知せざるべからずと見て其の明確なる知識を基礎として社會の改善をはからんとせり。一技藝といふとも其れに關する明瞭なる智識を有せずば之れを爲す能はず。家を造るの術を知らずして工匠の業を全うする能はざるべく一家を調理し一國を治むるにもまた是れに關する明確なる智識なくしては能くする能はざる也。此くの如く吾人は徳行の何たるを明知せずば眞正の道德的行爲をなす能はざる也。明確なる知識なくして行爲するは盲目的作動のみ眞の徳行とはいふべからず。勇の勇たる所義の義たる所を明知せずば如何で勇を振ひ義を行ふを得んや。かるが故

に吾人は凡ての行爲が趨向すべき正當の目的を知らずば正當に行爲する能はざる也。而して其の如き凡ての行爲の標的となりて之れを統一調整するものは善(εὐαβον)これ也。徳とは即ちこの善を得るの謂也。善は吾人に取りてよきもの、吾人は皆吾人に取りてよきものを求めつゝある也而して之れを得ること即ち徳に外ならず。こゝに於てか倫理學研究の問題は明に掲げ出だされたりといふべし。以後の希臘哲學は常に件の善とは何ぞやといふ問題は眼中に置くことを忘れず否むしろ之れを中心として倫理の研究をなせる也。

〔十〕 前に陳ぜしか如く徳を修むるには明確なる知見を要す。蓋しソクラテスは吾人の道德を一種の能技(τέχνη)と見たり。一技術に堪能ならんには其の事柄に關する明知(επιστήμη)を要するが如く道德を行はんにまた是れに關する明知なかるべからず。技能の中心となるものは明確なる知識也。明確なる知識は諸藝に堪能なるの根本なる如くにまた修徳の根本なり。

皆に知見の徳を修むるに必要なものみならず知らば徳を行はずといふことなし。人は善の何たるを眞に知らば之れを爲さずといふことなかるべし。何となれば



ソクラテスの考ふる所によれば善は即ち吾人に取りてよきもの、而して吾人は常に吾人に取りてよきものを求めつゝあればよきものを知りて之を取らざるの理なければ也。人誰れか自ら好みてよからざるものを取らんや。よからざる事即ち悪をなすは畢竟眞に之れを悪と知らざれば也。無知なる是れ不徳の根本なり。かるが故に人をして徳を行はしめんとせば先づ善の何たるやを明知せしむるにあり。知見明にして徳行のつから脩まる。随うて徳は人に敵へ得べきもの、また學び得べきもの也、人を導きて善に進ましむるを得る也。衆徳は所詮知見に歸す、不徳は無知に歸す。

〔十一〕此くの如くソクラテスの見る所によれば善は吾人に取りてよきものなれば徳を脩めて吾人に不利となるが如きことは決してあらざる也。クセノフソンの録せる所によればソクラテスは善と利(εὐδαιμονία)とを相契合するものと見たるが如し。而して自己に利なるものと不利なるものとを識別して常に利となるものをのみ採擇するの技能は即ち智慧(σοφία)也。この故に一時の感情、個々の情慾に放心することなく常に自己を抑制する即ち克己堅忍の志を要す。而してソ

クラテスの生涯最もよく己れに克ち己れを制したる生涯の模範なり。彼れは實に克己節慾(εὐσωφρονία)の人、自己を制するとの自由自在なるを得たりし人なり。かく徳は自己を制して常に己れに善きものを採るにあるが故に徳の脩まれると其の人の幸福とか決して離れたるものにあらざり。徳脩まりて是かも不幸なるものある可からず。此の幸福(εὐδαιμονία)といふ觀念は以後の希臘倫理學に於ける主要なる思想となれり。

以上述べし所によりて觀るにソクラテスの道德説には二方面ありといふを得べし。一は智力的方面、即ち智見を以て徳行の根本となすの説にして他は功利的方面、即ち徳行と幸福とは決して相離れたるものにあらざりといふの説也。智と徳と又福と徳とはソクラテスの思想にありては常に相交錯して離れざるを見る。而して此の二觀念はやがて希臘の倫理思想全般を貫通すといふも不可なき也。

〔十二〕ソクラテスは尙一步を進めて精しく善の何たるやを説明するとなかりき。彼れは其の倫理説を嚴密に學理的に開發するとなさでむしる唯個々實際の場合に應じて必要なる諸徳を説き出でたり。中にも節制、克己、外物に動かされ



ずして其の心を常に安靜の境にあらしむると、及び正直、友愛などいふ諸徳は彼れの最も熱心に唱道せし所にしてこは彼れが性行と教訓とによく現れたり。彼れが理想の最も美しく高き所はプラトンの書に就いて見るを得。クセノフオンの書にはソクラテスを専ら實際的、實用的の人として描きたるの傾あれどプラトンの書にては理想的生活に向かへるものとして其の他方面を描きたるを見る。即ち善美 (καλοκἀγαθία) を徇徳を追慕するの熱心を以て友情の精髓となし友と共に善美を慕ひ之れを得、之れを相分かち是れに向かつて進むをもて無二の友情となせしとなどはプラトンの記する所によりて知らる。

ソクラテスは國家の法律を遵守すべき義務を説くに力めたり。これソクラテスがソフィストと其の歸結を異にする所也。ソクラテスはソフィスト等と共に研究の心の已む可からざることを認め其の研究の結果として得る知識の缺く可からざることを唱道したりしかど彼れは却りて之れを利用して社會の道徳を新基礎の上に建て得べくと考へたる也。當時の開明を來たし、大動力たる而してソフィストの依て以て其の勢力を振ひし同一の武器即ち研究と知識とを用ひて當時既に業

に現れせめし開明の弊を救はんとしソフィスト等の流弊を防遏せんとせり。前にもいへるが如くソフィストは個人の情慾を先にし自己の欲するがまゝに云爲するを憚らざりしかば其の弊や肆然として放縱蕩佚に流れたり。ソクラテスは此れに反し吾人の明知見に照らして眞に自己に利あらざるものと否らざるものとを臆別し以て己れが一時の情慾を抑制するの必要なるを説き而して又彼れ自ら之れを實行せし也。ソフィストは個人マイの力と所欲とを主眼となし社會の法律等は若し之れを破るの力あらば自己の所欲に従うて之れを破るも可なりとまで説きたりしがソクラテスは社會の法律の貴ぶべき所以を述べ自ら身を以てこれに殉したり。

〔十三〕 宗教上に於てもソクラテスは激烈なる革命的の議論をなさざりき。從來其の國人の一般に信じ來れるが如く神々の存在を認め社會の慣習に従うて之れを禮拜するの正當なるを説きたり。殊に彼れは神明の照覽を信じ善惡の賞罰の行はるゝことを信じき。其の全軀の思想は一神教的に傾けりとも見ゆれどさりとて國家の多神をも否むことなかりき。彼れが國家の神々を否めりといふの



理由をもて訴へられたるは或は彼れみづから一種特別の示現を心裡に聞くといへること即ち其の謂ふダイモニオン(Daimonion)に原因せしならん。所以ダイモニオンは何たるかにつきては後世の史家其の説を一にせざれど思ふにソクラテスは個々實際の場合に處して其の何故に志かすべきの理由を知悉し得られざるも何となく其の常に取るべき道の見ゆるを心指してさは名けたりしならん。ソクラテスは常人にまさりて其の如き理解すといふ可からずば寧ろ感知すと云ふべき實際的判斷に長けたりきと思はる。此の故に或者學史家はソクラテスは學理的知識の傍に吾人の實行を導くに缺くべからざるものとして一種の感情の必要を認めたるなりといへり。此の見解に従へば學理的研究の結果としては吾人の明瞭に知識し能はざる境涯の無きを得ざれば其の如き場合には彼れは(學識とは云ふべからざるも)心情の指示の存するあるに依るへしとなせる也。

〔十四〕上に陳ぜしが如くソクラテスの研究の結果はソフィストの如く破壊的ならずして建設的なり。其の建設的なるの根據は明確なる知識の得らるべき事を説きしにあり。語を換ふれば吾人は事物の通達不易の相を知識し得といふにあり。

り。さはれ如何にしてかゝる知識の得らるべきか。之れを否みしものはプロタゴラス也。プロタゴラスは知識の性質を考究してかゝる知識は有り得へからずと論じたり。ソクラテスは其の如き知識の必要を説きたれども未だプロタゴラスの懷疑説に對して其の如き知識の有り得る所以を明示せりとは云ふべからず。即ちソクラテスは未だ十分の自覺を以てプロタゴラスが提出せし知識論上の問題に面せざりきといふを得べし。蓋しソクラテスが此かゝる通達不易の知識を要すと見たるは彼れが道徳上の確信より來たれりといふべきならん。そは其の如き知識なければ真正の徳行は成り立たず實際の行爲を正當になす能はずと見たれば也。而してこれやがてソクラテスに取りては此かゝる知識の眞實在り得るの理由なりしならん。又彼れが神明の照覽を信じ善惡業に對する賞罰の過らざるを信ぜしも亦此の道徳的確信に根據せりといふべし。要するにソクラテスの思想の窮竟の根據及び動力は疑ひもなく其の確然不動の道徳的確信にあるなり。彼れが一代の精神と事業とは一に道徳的確信を中心としたりしもの也。

〔十五〕道徳の研究としてはソクラテスの説未だ精なりといふべからず。ソク



ラテスの位地の希臘哲學史上に重き所以は道德上知識上において一學説を立てたりといはんよりも寧ろ其の攻學の精神及其の方法を説けるにあり。これ即ち希臘哲學の新生面を開く動力となりしもの也。言ひ更ふればソクラテスは纏りたる一哲學を組織したるよりも寧ろ新眼孔を以て事物を研究することを教へたる也。其の後世に及ぼし、影響の偉大なる實に此に存す。随うて彼れが影響をうけて出でたる學者は彼れが學説の未だ整はざる方面を取りておの／＼之れを開發せんと務めたり。或は彼れが辯證的論法を取り或は専ら道德倫理の説を取りておの／＼其の方面に於て之れを發達せしめんとせり。ソクラテスの教の唯一方面を看たる此等の學者を其の「不完全なる學徒」とも名く。ソクラテスが後に遺し、問題は彼等不完全なる學徒の看取せし所よりも尙一層深き處に横はれり。知識問題は即ちブルマゴラスの懷疑説に對して知識を根本的に立し又是れに根據して倫理道德を建設せんと志せしはソクラテスの完全なる學徒とも謂ふべきプラトンの如く。プラトンはソクラテスの知識問題と倫理問題とを根本的に建設せんと力めたり即ち彼れは其の師の提出したりし問題の全體を看取したりし也。

プラトンの學説を述ふるに先ちソクラテスの不完全なる學徒に就いて記せざる可らず。そは彼等は尙概ね人事研究時代に屬する者なれば也。

### 第十三章 ソクラテス學徒

〔一〕ソクラテスに接して其の學説の影響を受けたる者の中彼れが所説の或方面(主に倫理道德上の問題)を取りて更に之を考究開發せんと力めたる者あり。慣用の名稱に従ひ此等の學者をこゝに假りにソクラテス學徒と名づく。然れどもソクラテスの旨意が必ずしも彼等の所説に保存され又開發されたるにあらず、却て大にソクラテスの教學と異なる趣を呈せるものあるを認めざるべからず。また彼等は専らソクラテスが教の一方面にのみ着眼して其の問題の全體と根柢とを看取せざりしより前にも云へる如く此等の學者を「不完全なるソクラテス學徒」と名づく。彼等の中に就き哲學史上其の學説の傳はれるもの三あり。メガラ學派、キニク學派、及びキレネ學派是れなり。メガラ學派はソクラテスが教を受け深く彼れを尊敬したるエウクライデスが其の師の死後幾もなく其の故郷なるメカラに開きたりし所のもの、キニク學派者キニクといふ名稱の起原に就きては此派の學が犬の如き見苦しき生活をなして意せざ



然れども恐らくは教祖アンテステテスがアテシテのキノサルゲスに云ふ古くより傳はれ  
 教を説きたるために諸人の集合する所にて其の同じくソクラテスに接したるアンテ  
 ステテスの創立せる所なり。此の二人は共にソクラテスの門下中にて年長な  
 りきと思はる。キレネ學派はキレテの人アリスティボスの立てし所、彼れ亦志ば  
 らくソクラテスに接したるとあれど決して親密なる關係を維持したりしにはあ  
 らず、前の二人よりは年少なりしが如し。アリスティボスはソフィストとして諸  
 方を遍歴したり、アンテステテスはソクラテスに師事せし前既にゴルギアスの教  
 を聞き又自ら講筵を聞き居たり、又メガラ學徒の論法の多くソフィストと據ぶ所な  
 きは後に陳べんとする所の如し、此の故を以てギンデルバンドは此等三者を視て  
 元來ソフィストの流を汲める者が唯少しくソクラテスの學風に觸れたるに過ぎざ  
 とす。以上三派の外ソクラテスの弟子フアイドンが其の故郷エリスに立てた  
 る一派及び此の派の流がメテデイモス(紀元前三百五十二年より二百七十八年頃  
 の人)によりてエントリアに傳へられたる一派ありと傳ふれど此れに關しては哲  
 學史上委しき事を知る能はず。但し此のエリス、エントリア學派は素とメガラ學  
 派に似寄りたるもの、如く而して後にはキニク學派に近づきたりしが如し。今  
 は先づメガラ學派より記述せん。

メガラ學派

〔二〕 此の派はソクラテスの思想とエレア學派の思想とを結合せるが如きもの  
 なりソクラテス思へらく吾人の知識は事物の遍通不易なる所を觀取するものな  
 らざるべからず即ち事物の概念を形づくものならざるべからずと。此の事物  
 の遍通不易なる所はエウクライデス以爲らく究竟するにエレア學派の所謂唯一  
 平等一如なる有に外ならず、此の外に實有のものある無し、眞正の知識は此の有を  
 知るにあり、且つソクラテスが掲げし倫理問題の中心思想たる善と謂ふものも畢  
 竟此の有に外ならず、知見と云ひ理性と云ひ或は神明といふ、名は則ち異なりと雖  
 ども要するに此の有を指せるなり、而して又之れを知るの知識即ち徳なりと、メガ  
 ラ學派の根本思想は此の外に出でず。

〔三〕 斯くの如き説を立つるにあたりエウクライデスはエレア派のゼエノンが  
 用ひたる論法を襲ひて正面より論證するとをせず専ら反對説を駁撃して裏面よ



り立證したりと傳ふ。此の派の學徒は後益、ゾエノンの如き論法を用ふるを事とし、論理の研究に多少の裨益を與へざりしにはあらざるも其の論や遂にソフィストの詭辯を簡ばざるに至れり。此の派學者の論法にして時人の注意を惹きたる一二の論例を擧ぐれば、今茲に數物を積み行かんに何れの一粒に至りて始めて一石を成すかといへる疑問の如きは彼等が得意の論題として傳へらるゝ所なるが、是れは要するにゾエノンが限りなく小なる部分を如何ばかり集むとも分量あるものを成すこと能はずといへるを言ひ更へたるものに外ならず。また此の派のデオドロスが可能(Possibility)といふ觀念を打破せんとしたる名高き論あり、曰はく、唯實に在り又た必ず在らんとするものゝみ可能なり、何となれば何が可能なるかはそが實在となることによりてのみ知らるべければなり、更に裏面より云へば、現在とならざる可能はそが實在とならざるによりて不可能なることを現はせばなりと。また此派のステルポーンは云へらく、一物につきて吾人の立言し得る所は其の物の外に存せず、何となれば其の物につきて其の物以外の事を立言し得る等なければなり、則ち吾人の立言し得るは唯だ同言判定のみ、犬は犬なり、馬は馬なりと云ひ得るのみ。

〔四〕メガラ學派はソクラテスが所説の概念的知識をエレア派の所謂唯一平等一如の有と合し、またソクラテスが所謂善をも此の有に同ぜしめたるがゆゑに、エレアの思想が更に開發すべきの餘地を有せざりしが如く此の派の所説も亦た同一窠内を廻るに止まり遂には唯上に云へる如き詭辯的論法を弄ぶに至りぬ。然れども此の學が希臘哲學史上極めて肝要なるエレア思想を繼承して之れをソクラテスの知識論と道德論とに結ばんとしたりしは其の着眼の點に於いて頗る見るべきものあり。此の點より考ふれば此の學派を以て後のプラトンが大組織へ至るの一橋梁と視るも不可なきなり。此の派はステルポーンに至りてはキニク學説を混するととなれり。

### キニク學派

〔五〕此の派の祖アンテステテスはソクラテスの所説中重に實際的方面を見たり。ソクラテスは善の何たるを問ひ出でたれど未だ明かに其の内容を擧示せざりしが、アンテステテスはこゝに其の説を結び來たりて曰はく德行を除きて他に



善なるものなし徳行のみが吾人をして幸福ならしめ又吾人を幸福ならしむるものは徳行のみを以て足れりとす、正當なる行爲其のものに於て得る所の満足是れ即ち吾人の幸福なりと。此の思想はソクラテスが福と徳と相離れずとなし徳ありて不幸なるものなしといへるに本けるなり。

〔六〕 徳ある者必ず福ひなりと云はんには其の所謂徳行は外物に懸れるものならざるを要す。蓋し外物は吾人の隨意に左右し得るものならざるが故に外物に依りて初めて幸福を得るものなりとせば吾人は幸福を得ることを必ずべからず。吾人若し心を外物に置きて富貴權勢を欲せば之れに束縛せらる。欲望は吾人を外界に絆すものなるが故に吾人を幸福ならしむる所の徳行は此等の欲望を抑えて外界の束縛を脱するものならざるべからず。此の如き觀念よりしてキニク派の所謂徳行は専ら消極的のものとなれり、即ち欲望を抑えて成るべく僅少の所得に満足する邊に於て其が所謂道德を結び付けたり。

〔七〕 此の思想の結果として此派の學徒はあらゆる文化の所造を輕んじ寧ろ之れを捨て、天然の狀態に居らざるべからずと唱へ又既にソフィスト等の説けるが

如く人爲に定めたるもの (nomos) と天然に定まれるもの (physis) とを相對せしめて曰はく吾人は人爲の所定に束縛せらるゝを要せず須らく天然の狀態に處るべしと。是に於て此の派の思想は社會の制度を輕んじ世に謂ふ法律風儀を蔑視し世間の毀譽褒貶を冷笑し一切此等の束縛を脱して唯天然の狀態に處るとを貴び人間の自然に具ふる根本的欲求(食色の欲)には自由に從うて可なりと説くに至れり斯かる理由を以てキニク學徒は往々世間の風儀と相容れざる行爲に出て、顧る所なかりき。

〔八〕 かくの如き思想より此の派の學者には家を捨て、乞食の生涯を送れるもの輩出しき。有名なるシノヘ人ディオゲネスは家を捨て國を捨て、何れの國家に屬せざるを誇れり。彼れ思へらく人間は宜しく野獸の群を成すか如くなるべし、是れ天然の狀態なりと。其の外終生乞食の生活に満足したるソクラテス、又其の志を嘉して良家に生れながら彼れの妻と共に諸方を流浪したるヒッパルキアの如きありき。

當時斯くの如き乞食哲學者の出づるに至れる、是れを其の社會の狀勢より觀察し



來たれば決して意義なきことにあらず。此の時や希臘の社會は已に頽敗に傾き政治に道德に腐敗を極め文化進むにつれて民心懦弱に流れ文明の流弊また殆ど拯ふべからざるの有様にあり。キニク學徒は此の文明の流弊に反激して出でたる者なり。此の派の祖アンティステテスはソクラテスが教學及び性行の上にて克己節欲の大力を看取し己れに堅固なる意志さへあらば外物に依る所なくして我が心の福ひならんとを得べしと考へたり而して此の派の學徒は此の見地を安住の處として當時の社會を輕蔑したる也。主觀が客觀を離れ自己に立て籠らんとする傾向は此の派に於て大に著るくなれり。

〔九〕 アンティステテスはソクラテスが教學のうち重心に心を其の實際的方面に傾けたりしが知識論に於ても亦全く無頓着なりしにはあらず。彼れ思へらくソクラテスが所謂事物の遍通不易なる所に就きて立言せんには其の物それ自身を以て云はんの外なし其の物以外の物を以て云ふべからず、そは其の物にあらざる物を以て其の物を言ひ表はす可からざればなりと。故に彼れが説はメガラ學徒の論の如く結局世に謂ふ立言(即ち或物に就いて或事を言ひ立つると)を否むもの

なり。其の説に従へば吾人の爲し得る判定は唯分析的判定(既に主語に含み居る事柄を分析し出だして之れを客語に言ひ表はすもの)あるのみ。故に吾人が概念を用ゐて定義を下し得るは分析し得らるべきものならざる可からず、分析し得べからざる單一のものに就いては概念的知識を形づくと能はず。かくの如き單一のものは唯吾人の五官を以て直接に感覺し得るのみと。是に於てキニク學徒の知識論は終に感覺説となり了れり、以爲へらく吾人の素と知り得るは吾が五官に觸るるもの、外に出でずと。此の如き感覺的知識論とは全く異なる立ち場を取れるプラトンのイデア論(後章を看よ)をアンティステテス又ディオゲテスは口を極めて嘲りたりと傳へらる。

キニク學徒の知識論は前述の如くメガラ學徒の説く所と頗る相似たる所あれど畢竟彼等はメガラ派の如く論理的研究を事とせず寧ろ専ら實行の方面に着眼したりしが故に彼等は多く重きを學問に置くことなかりき。アンティステテス自らも吾人の徳は實行に在り多くの言葉と知識とを要せずと云へり。

### キレネ學派



〔一〇〕此の派の祖アリストテッポスは其の思想をソクラテスが道徳論中幸福をいへる方面に結びつけ是れを以て其が學說の出立點となしたり。キニク學徒は吾人が幸福を得るには徳行其の物の外に要する所あらずと説きたれども其の所謂徳行の内容を示さんとしては専ら消極的方面より云ふに止まりたり。アリストテッポスは思へらくソクラテスの説ける如く徳行と幸福とは相離るゝものにあらず、それは徳行は幸福を得るの道に外ならねばなり而して謂ふ所幸福は快樂を得るの謂ひに外ならずと。即ち彼れは徳行を以て快樂を得るの方便に外ならずと視たり。ソクラテスが明かに内容を定めざりし善(吾人に取りてよきもの)てふ觀念はキニク、キレテの兩派に於てまかく兩端に分かれたり、而も兩者共に幸福を云ふに於ては一なり。

アリストテッポスの所説に従へば徳行その物に何等の價値あるにあらず、其價値あるは唯それが吾人各自に快樂を興ふればなり。故に如何にしても快樂を得るかは敢て問ふ所にあらず、如何なる方便を以てするも快樂(幸福)に得らるれば我が幸福は茲に全うせらる、要は成るべく大なる快樂を得るに在り。是れ此派の根本

思想なり。即ちキレテ學派に説く所は純然たる倫理上の快樂説なり。而して其の説に吾人各自の行爲の目的と看做す快樂は各人自らの快樂に外ならねば委しく云へは其の道徳論は個人的快樂説なり。

〔一一〕アリストテッポスは以爲らく快樂の最も大なるものは肉體の快樂なり、而して眞實我がものたる快樂は現在のもの、外にあらず、過去の快樂は已に過ぎて追はんに由なく未來のものは未だ我が得たる所にあらず、故に快樂の中最も主要なるは肉體現在の快樂なりと。然れども彼れが説も唯手當り次第に快樂を取れといふには非ず。現在得らるべき快樂の中にも大なるあり小なるありまた苦痛の之れに伴ふものあり。故に吾人は此等の中に就き何れか最も大なる快樂を現實吾人に與ふるかを見ざるべからず。之れを見る者即ち賢人なり。知見の要は畢竟快樂の選擇をなすに在り。吾人は知見によりて行爲を導き妄りに情慾の發動に任すべからず。能く樂むとを知るは樂みを捨て、安んずるに優れり又之れよりも爲すに難し。哲學は此の快樂を得るの知見を開くものにして學問の必要唯こゝに存すと。キレテ學派の思想の偏へに實際的となれるを看るべし。



〔一二〕 アリストテレス教を其女アレテーに傳へアレテー又之れを其の子アリステイッポスに傳へたり。キレテ學徒中殊に此の少アリステイッポス等が開祖の快樂説の根據として快樂苦痛の生起に關する生理上の状態を研究しきと見ゆ。其の説に曰はく諸種の感情の生起は之れを吾人が身内物質運動の有様に歸するを得べし又曰はく五官の知覺は吾人自家の状態(ハリス)を示すのみ外物そのものを示すにあらざと。(此等の説はプロタゴラスに據る)。体内物質の運動穩かなる時は快感を覺え激しきに過くる時は苦痛を感し其の運動の甚しく微なるか又は全く休止する時には苦痛もなく快感もなしと。

〔一三〕 キレテ學派の所謂快樂はもとより各人自己の快樂なり。謂へらく賢者は世間の諸の煩累の爲めに自己の快樂を害ふとせず故に社會の法律習慣に踰踏せず其の法律を守り習慣に従ふとをするも是れ畢竟自家の安樂を得んが爲めに外ならずと。遂に社交によりて自家の快樂を取らんは可なれども公務に服して身を煩はし國家の爲めに身命を犠牲に供するが如きは智者の爲さざる所なりと説くに至れり。吾人は此の非社會的の點に於てキレテ學派が其の道徳論上大

に相異なれる(寧ろ全く相反せる觀ある)キレテ學派と殆んど同一の立場に至れるを見る。以て希臘社會の如何に頹敗して個人的精神の頭を擡げんとしつゝあるを見るべし。愛國は智者の爲す所に非ずとは此の派のテオドロス少アリステイの弟子の言なるが彼れはまた曰へり自己の快樂を得るに妨ある事は凡て宗教上の習はしにも拘泥せずして可なりと。

〔一四〕 老アリステイッポス已に妄りに快樂を取るとが真正の幸福を得る所以の道に非ざるとを云へり。此の思想を推窮すればテオドロスが幸福の解釋の出でたる所以自ら明かなるべし其の説に曰ふ吾人の真正の幸福は心の安らかなる状態(ハリス)にありて唯一時々々の歡樂を極むるとに存せずと。又アソニケリスは肉體の快樂よりも寧ろ精神上の快樂に重きを置くに至れり。然れども此の派の學者はキレテ學徒の唱へしが如く一切外物に待つ所なく力めて吾人の欲望を箝制せよとは云はず吾人の快樂を受くるや外物に依る所あるを認許せり。然るに吾人の此の世に處するや必ずしも常に安樂を得べきの地に居る能はず人世却りて不如意の事多く不幸の中に住む者多し。是に於てか此の派のヘゲシアス(紀元



前三百年頃の人(は)説をなして曰はく快樂を得ずとも苦痛なき状態に在らば吾人は已に幸福を得たりと云はざるべからず、歡樂を盡さんと求めんよりも寧ろ苦痛なき状態に在るとに満足せざる可からず。而して如何にしても苦痛を脱し得ざる境遇に居る者は寧ろ死するの優れるに如かざるなりと。彼れは死を勸むる人でふ、其名を得たり。斯の如く、キレテ学派の快樂説はヘゲシアスに至りて遂に消極的となり、厭世論に陥れり。

### 第十四章 プラトーン

(一) ソクラテスが教義の全體を悟下し、又ソクラテス以前に出でたる物理的研究の諸説をも咀嚼して、新たに哲學の一大組織を立てたる者はプラトーンなり。在來の希臘哲學に於ける諸種の肝要なる思想と、ソクラテスの新見地とは、彼れに依りて陶治融合せられて、西洋哲學史上の大偉觀たるプラトーンが理想哲學は成り上がれり。プラトーンは雅典府の人、紀元前四百二十七年門閥の家を生る。父をアリステイ

ソといふ。プラトーン初め祖父の名を繼ぎてアリストクレスと稱しき。天資衆に秀で幼時より手厚き教育を受け、夙くより美術を愛するの傾向ありて詩作をも爲したることありしが、後ソクラテスの人物と數學とに接して大に之れに服し其門に入りて一身を哲理の研究に委ねるに至れり。ソクラテスに師事するに先だちヘラクレイトスの流れを汲めるクラテウスに哲學を聽けるとあり。齡二十にしてソクラテスに師事したる以來八年間其の師の死するに至るまで其の門下に在りき。ソクラテスの死後直にメガラに遊びメガラ學徒と交を結べり(ヘルモドロスの記せる所に従ふ)。其の後久しからずして更に漫遊の途に上り、キレテ、エヂプトまた恐らくは其の他の地方へも行きしならん。三百九十五年頃には一旦雅典府に歸りきと考へらる。彼れ當時已に著作を始めまた恐らくは教授にも従事せしならん。其の後三百九十一年の頃南部伊太利及びシ、リに遊びて親しくヒュゴネス學徒と交り、またシラクサの朝廷に行き、ディオソと相議れりしが、其處の主權者ディオニオスの意に觸れて俘虜の如く逆待せられ遂にヌバルタの使者に付されてアイギナの奴隸賣買地に送られたりしを、成人に贖はれて自由の身と



なされたり。此の不幸の因由に就きては史家の間に異論あれども、ディオソと相識りてシラクリス國政事上の葛藤に關係したるに基因せりと云ふ説或は異なるに近からん歟。三百八十七年の頃には雅典に歸りて府の郊外に在りしアカデミーアと云ふギムナシオンに一の學會を設け同志を料合して哲學の講究に従事せしが彼れが名聲の盛んなるに従ひて教を請ふもの續々として集まり來たれり。シラクリスの老ディオシオス死し其の子少ディオシオス位を踐むや、プラトーンは其の友ディオソ(少ディオシオスの叔父)の懇懇せるに従ひ其の國政を補佐せんと欲して再びシラクリスに行けり。彼れのシラクリスに行けるや其の政事上の理想を實行せんの企圖を懐けりしが事其の志と違ひて雅典に歸れり。其の後三百六十二年ディオソとディオシオスとの間を調訂せんが爲めまたシラクリスの地を踏みしが政事上の關係よりして甚しき危険の位置に陥りたりしを當時アルキメデスを首領としてマラスに覇威を振へるピタゴラス學徒の強大なる干渉によりて漸く危きを免れたりきと思はる。次いで雅典に歸りし後はまた他事を顧みず専心子弟の教育に従事し三百四十七年八十歳の高齡を以て時人景慕の間に逝けり。碩學と

して思想性行の高雅なる實に希臘哲學界の花といふべし。彼れの幽玄なる思想が後世に及ぼせる影響のいかばかり偉大なるかは西洋哲學史を講じゆくに從うて明なるべし。

プラトーンが門下を教ふるに當初は専ら對話問答を以てせりしと思はるゝが其の師ソクラテスの模範に倣へるならめど、其の哲學研究に委ねたる生活の機に至りては已に大に其の師と異なるものあり。ソクラテスは廣く訪ひ普く交りて談話を試み研究を促すことに於て更に人と處とを問ふことなく頗る通俗的なる趣ありしが、プラトーンに至りては哲學は世事と離れて別に唯學者の従事するものとなり専ら學校に在りて同志と共に攻究さるゝものとなれり。プラトーンは門閥の家に生れたるを以て政治界に驥足を伸ばすを得るの地位と機會とを有したれど、當時雅典の政事は其の心に適はざるもの多く、彼れは全く政治上の關係を断ちて一意哲理の研究を以て其の畢生の事業となせり。

(二) プラトーンの著作は概ね對話の體にもしあり。其の結構或は頗る劇詩的活動を具へたるあり或は講述體に近よれるあり。其の文雄渾莊麗を以て稱せ



らる。プラトーンが對話篇の少くも或者は文學上の著作としても得易からざるものなり。對話篇中述ふる所特に二題目を限りて秩序的に論せるにはあらず、智識論、理、神論、倫理論等の問題は概ね相纏うて一篇の中に入れり。此等の對話篇はもと彼れが同志の輩と共に論談せし所を骨子として成れるものなるが如し。多くの對話篇はソクラテスを立て、主人公とせり。蓋し概ね其の口を假りてプラトーンが自説を吐露せるなり。故に對話篇に現はれたるソクラテスを以て直に歴史上のソクラテスなりとす可からず。中には真にソクラテスに關する歴史上の事實と見て可なるが如く思はるゝふしもあれど、何れが真にソクラテスの云爲せる所にして何れかプラトーンの醇化せる所なるかは容易に辨別し難し。プラトーンの著作として傳はれるもの多きが中に彼れ自身の作ならずと思はるゝもの亦た少なからず。何れが彼れの真正の作にして何れかしからざるかは古來プラトーンを研究する者に取りて一の肝要なる問題たり。今日まで史家の考證せる所により眞作と視るべきものを掲ぐれば、『プロタゴラス』、『ギョギアス』、『アイテレートス』、『ソフィスト』、『シムポシオン』、『ソフィスト』、『ポリタイア』、『國家篇』、『マイオス』以上は疑を容れざるものまた、『アポロギア』、『辯護篇』、『クリトーン』、『イオス』、『ノモイ』(法律)此等は眞作と見て可なるべしと思はるゝもの、次ぎに多少の疑ひを挿み得るものは、『ソフィスト』、『ポリタイア』、『バルマンニアス』、その他、『クラテイロス』、『メノーシ』、『エウテデーモス』、『クリテアス』、『小ヒッポアス』、『エウテテロン』、『ラシモス』、『カルミダス』、『ラケイアス』等なり、此等も疑を挿み得るとは云ふものから概ねプラトーン思想を寫したるものと見て可なるべし。假令プラトーン自身の筆に成れりとは云ふべからざるも、其が學徒の中に出でしは疑ふべからず。此等多少の疑を挿み得る部類の中最初に掲けたる、『ソフィスト』、『ポリタイア』、『バルマンニアス』の三つは彼れが哲學思想と其の變遷發達の趣とを窺ふに頗る肝要なるものなるを以て其の眞偽に就きては學者間紛々たる議論あり。

〔三〕彼れが著作の順序も亦たプラトーン研究者間に存する大問題なり。蓋しその年代の順序は彼れが哲學の成立を知るに大なる關係を有すればなり。或はプラトーンの著作を見て豫め計畫を立て、一の完備せる思想を叙せる者なりと爲すものあり。シュライエルマヘルの如き是れなり。されど此の説の根據を缺け